
八国ノ天

櫛名 剛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八国ノ天

【Nコード】

N0480T

【作者名】

櫛名 剛

【あらすじ】

伝説のカムイを信じ剣で戦い、失われた文明を取り戻そうと争いの絶えない、まるで時代が昔に戻ってしまったような遠い未来の世界。この時代、文明を発展させようとする国には制裁者と呼ばれるカムイによって、肅清が行われるという言い伝えがあった。

八国地方の小国の一つ、ヒムカ国の王女・木沙羅と侍女の佳世は幼

少の頃から

ずっと一緒に育ってきた間柄だった。

しかし、ある日を境に佳世は戦乱の渦に巻き込まれ木沙羅と離ればなれになっ

てしまう。

ひよんな事から佳世は、二人の伝説のカムイ官兵衛と櫛に出会い、一緒に旅を

することになる。

待ち受けるのは、罪・葛藤・宿命・戦い。

佳世は仲間とともに、いくつもの困難を乗り越え成長していく。

木沙羅がどこかで生きていて、いつか真の再会を果たせることを信じて。

序章

西暦二三××年

M県N市、某研究所。通称「月の社」。

「私がこれからすることは、歴史を裏切ることになるかもしれない」
黒い棺のようなカプセルの前で、土埃にまみれた男は言った。

千曲キアラはカプセルの中で仰向けになりながら、その男の言葉を待った。

千曲キアラの首から上は外が見え、目の前に立っていた男の背後で白衣姿の者、将校やアサルトライフルを肩に下げた兵士が広い室内の中を慌ただしく動き回っている。

誰も彼もが土埃にまみれていた。時々、地響きを伴って室内全体が揺れ動くのが全身に伝わってくる。

「キアラ、時間が無いから簡単に説明する」男が険しい表情で話を続ける。「お前は私の代わりに『月のカムイ』となり、これから一〇〇年間、眠ることになる。その間、お前の脳にはカムイの事を始め、あらゆる知識や経験が埋め込まれていく。そして、体には『変異細胞』が埋め込まれる」

（月のカムイ？ カムイって？ 変異細胞は知っている。しかし、それは　）

キアラは目の前に立っている男　父、千曲博隆を見た。

「大丈夫だキアラ。カムイの変異細胞は特別だ。人工種に改造するためのものではない」

キアラは頷いた。

「そして、カプセルに入る前に見せたデバイス『光明ノ書』と四つの制御キーは、カムイの命と言える。平たく言えば、眠っている間、お前の心と体は、光明ノ書に保存される」

（保存？　どういうことだ？）

「光明ノ書には、もう一つ重要な役割がある。書には地球上のあらゆる情報が保存されている。文明の英知すべてと言ってもいいだろう。スバルバル全地球種子庫は知っているか？ およそ三〇〇年前、世界の終末に備えることを目的に作られたものだ。その中には世界中から集められた種子三〇〇万種が貯蔵されている。いわば種子版ノアの箱舟だ。書はデータ版ノアの箱舟と言える。すなわち、地球規模で壊滅的な状態になったとしても、この書があれば文明を取り戻すことができる」

「千曲さん、急げ！ もう間もなくヤツらがくるぞ！ この場所を知られるわけにはいかん」

千曲博隆は白衣の男に向かって、わかったと返事すると、

「いいか、キアラ。一〇〇年後、天と地のカムイが迎えに来る。目覚めたら一緒に太陽の社へ行きなさい。そこに、愛^{あやめ}耶愛がいるはずだ」

（太陽の社？ ことと同じような場所なのか。すると、母さんは愛耶愛を太陽の社に連れて行ったんだな）

月の社と呼ばれるこの研究所もそうだが、何もかもが初めて見聞きするものばかりだった。キアラは科学者である両親が具体的にどこで何をしていたのかさえ、つい先程まで知らなかった。

兵と一緒に連れて来られた時、千曲博隆が最初に言った言葉を思い出す。

プロジェクトKAMUI。

話によれば、プロジェクトKAMUIとは国家機密に相当するものらしい。だから太陽の社と聞いたところで、当然、高校生であるキアラがその場所なんて知る由もない。

（場所は、天と地のカムイに聞けということか……）

「システム起動するぞ！」 さきほどの白衣の男の声。博隆は振り返らず、腕を上げ人差し指を二回振る。

《HT 1023 ASは、プロセスを開始します》

部屋全体に女性の声が響き渡ると同時に、カプセル内にかすかな

音が聞こえてくる。

キアラは激しい眠気に襲われた。体温が冷えていくのがわかる。視界がぼやけだす。

「この一八年間、愛耶愛とキアラ、一緒に過ごせて父さんも母さんも幸せだった。一〇〇年後、お前たちが平和に暮らせる世の中になっっていることを願っている。この国を……未来を頼んだぞ」

最後の別れ　博隆の声が遠のいていく。警報とシステムの声が頭の中で鳴り響いている。カプセルに液体が注入されていく。

「全員、早く退避しろ！　封鎖するぞ！」強い地響きの中、声が飛び交う。

博隆がカプセルに拳をあてると、キアラもゆっくりと拳をあげ、博隆の拳に重ねた。博隆の目を見た　父は微笑んでいた。

キアラも微笑み返すと、そのまま目を閉じていった。

一〇〇年後……愛耶愛。

陽はすでに落ち、研究所の入り口は海に面した岩窟にあった。

岩窟から続いている崖に沿って、千曲博隆は紅い月に照らし出された階段を昇ると、輸送ヘリや軍用車両を前に兵士たちが銃を構えながら位置についていた。崖に打ち寄せる波の音以上に激しく無線が飛び交い、硝煙の臭いがどこからともなく漂ってくる。

「全員出たか？　よし、封鎖！」

「封鎖だ！」

兵士たちの声とともに、大きな爆発音がそこから中から鳴り響く。博隆たちが今出てきた入り口が大量の土砂に覆われた。

『敵と接触！　この分だとすぐに突破されてしまう！　敵はかなりの数だ。くそっ！』土埃が舞う中、無線から悲痛な叫び声上がる。銃撃音が鳴り響くとともに、空に稲妻のような閃光が走る。近かった。

一人の兵士が博隆に声をかける。

「さあ、博士たちは早くあのへりに乗ってください！ 艦隊と合流します」

風圧を避け、駆け足で輸送へりに乗り込むと同時に、前部、後部のローターの回転数が上がり地面を離れる。ドアの窓から、銃を撃つ兵士の姿が見える。

博隆は窓から飛び立った場所を見おろした。すでに、そこは真っ赤な戦場と化していた。

「制裁者……」

博隆はそう呟くと、空を見上げる。月が燃え盛る炎のごとく紅く輝いていた。

博隆たちを乗せた輸送へりは、重い回転音とともに、赤黒く広がる海へと消えて行った。

月と太陽

1

いくつもの時代を過ぎて
。明道の時代

ヒムカの国。

大広間と正風殿を結ぶ二階の渡り廊下の屋根の上で、二羽の小鳥が青い翼を広げ新緑の香りを楽しんでいる。

渡り廊下は屋外にあり、屋根を覆い尽くすほど大きな桜の木が鮮やかな花びらを、ゆらゆらと舞い散らせていた。

その優美さとは裏腹に今、小鳥たちの下では途切れることなく、豪勢に盛られた料理や酒を急ぎ足で運ぶ人の姿があった。

（はやく終わらないかなあ）

「今日は晴天にも恵まれ、実にめでたい日になりましたな」

（めでたくないっ！）

「これで貴国との絆も深まり安泰ですな」

（なんで、このおじさんおばさんたちは、飽きずに同じことをしゃべってられるのかしら？ 大人ってつまないわね）

米松の白い床から漂う上品な木の香りが爽やかな風につて、大広間で執り行われている宴を静かに演出していた。

ブナの木で作られた大きなテーブルの上には色鮮やかな料理が、所せましと並べられている。

大人たちは談笑を交えつつ、美味しそうに舌鼓を打っていたが、少女が食べられそうなものはそれほど多くはない。

特別な日とはいえ、その事も少女の機嫌を損ねさせる原因となっていた。

今年一二歳を迎えるヒムカ国の王女、木沙羅は大小たくさんの寶石をちりばめた礼装に身をつつみ、豪勢なテーブルの下で手をぶらぶらさせていた。

結婚式のまっ最中である。

隣に目をやると、少し年上の男の子が緊張した面持ちで座っている。

（たしか、名前をイナメと言ったっけ。漢字で書くと稲に馬だったよね？ 私より四つ上だから、佳世よりも二つ年上かあ。これが終わったなら、狗奴の国に行かないといけないんだよね。楽しいのかなあ？ うゝん、行きたくないな……）心の中でため息を一つ。

じつと見られていたのに気付いたのか稲馬が、ぎこちなくこちらを振り向く。

「はは、大丈夫……ですか？」

不安だ。

そう思いながらも木沙羅は、口元を固くし微笑んでから、稲馬からすぐに目を離し正面を見た。

木沙羅は佳世を探した。佳世は木沙羅に長年仕えている侍女で、木沙羅にとっては姉のような存在だ。

カッと目を見開いて動かし、

「いない……」

今度は細めてみて、

「どこだあゝ」

きよろきよろと壁伝いに視線を漂わせる。しかし、その視界は突然あらわれた影に遮られてしまった。

（あれ……？）

「木沙羅さま、本日はおめでとございます」

見上げると一人の口髭を生やした男が、にこやかな顔をしながら丁寧におじぎしていた。

「私は綾羅木国の西蔵と申します。お父上とは公私ともに親しくさせて頂いておる者です。本日は我が王、蒙徳になり代わりまして、

綾羅木国を代表して馳せ参じました」

木沙羅は顔を赤らめながら、姿勢を正すと、

「そうだったのですね。それは遠路はるばるご苦労さまでした。でも、あなたがあの西藏さまだったのですね。父からよくお話をうかがっております。西藏さまはお酒を飲むと変なしゃべり方をするって」

「木沙羅はいたずらっぽく微笑んだ。

「えっ！ 月森げっしんさまはそんなことを？ いや、これは実にお恥ずかしい……」

「ふふっ、でも、西藏さまのような立派な方は、なかなか、いないとも仰っていました」

「木沙羅さまはお話が上手ですな。何か困ったことなどあれば、私めにご相談ください。きっと、お役に立ってみせますぞ」

しばらくして西藏がその場を離れると、木沙羅は近くにあった甘い果実で喉を潤し、さきほどの続きを再開した。

今度は誰にも邪魔されずに見つけることができた。藍色の服に、腰のあたりまで伸びた黒髪の少女が、狗奴国のおじさんおばさんたちと話している。

（いた！）

木沙羅はキョロキョロと目だけを動かして確認すると、

（お〜い）

ちよっとだけ手を上げて、すぐに降ろす……気付いた様子はない。

（きづけ〜）

今度は少し手を振ってみる。

佳世は木沙羅の様子に気付くと、周りに分からないように首を少し傾げ微笑みながら手を振ってきた。

すると、佳世の隣にいた大婆のおうなが、佳世の手をはたく。

おうなの目を盗むようにして、木沙羅と佳世はちらつと、互にくすりと笑いながら目配せする。

（はやく、そっちに行きたい！）

同じ頃。

宴の会場から離れた薄暗い謁見の間に、ヒム力国と狗奴国の重臣たちが集まっていた。

「さて……」

壁際や中央のテーブルに置かれた蠟燭の炎がゆらめく中、狗奴国の王、ヒルコが重臣たちを目の前にして口を開く。

「皆も承知の通り、伊都国をはじめとする周辺諸国の脅威から身を守るため、我々は雛の国へ侵攻し、月の社と光明ノ書を手に入れなければならぬ。問題の鍵だが四つのうち二つが雛の国にあるのは、諸侯も知つての通りだろう」

「しかし、残り二つはどこにあるというのです？　鍵は長年の争いで行方が、わからなくなったものがいくつもあると聞きます」

「ここにある」

狗奴国の重臣の問いに月森はそう答えながら、黒い棒状の形をしたものを懐から取り出すと、その場にいる者たちによく見えるようにテーブルの上に、それを置く。

鉄とも鉱石ともいえないそれは、まるで蛭のように、ほのかな玉虫色の光を全身から発していた。それが今の時代の技術で作りだせるような代物でないことは誰の目から見てもあきらかだった。

「そして、ここにもう一つ」

ヒルコがもう一つの鍵をテーブルに並べる。

「なんと！　鍵が四つ揃うことになるのか！」

テーブルを囲っていた全員が一点から目を外すことなく、驚きを声にしていた。

「ついに、誰も成しえなかった偉業をわれわれがやり遂げるのだ！　この戦に勝利すれば両国に、より一層の繁栄が約束されるだろう！」

月森が力強くそう言い終えると、謁見の間は二人の王を前に志気盛んに腕を振り上げた。

その夜。

月森と木沙羅は中庭にいた。ここ数日の忙しさを癒すかのように夜風が気持ち良い。

「明日、狗奴の王と王子は帰られる。姫は一〇日後、出発しなければならんな」

「はい、とうさま。とうさまは明日、出陣されるのですよね」

そう言くと、木沙羅は掛襟に手を通しそこから小さな袋を取り出す。そして大事そうに両手で握り締めると、隣に並んで立っていた月森の方へ体を向けた。

「これは、佳世と一緒に少しずつ集めた桜石が入ったお守りです」
そのお守りはこの地方では、よく作られるものであった。

月森は木沙羅から手作りのお守りを受け取ると、大きな手で優しく木沙羅の頭を撫でた。

「母が死んで一〇年経ったが、姫は母に似て美しくなった……では、父からはこれを姫にあげよう」

月森は懷から縦長の袋を取りだし、木沙羅の手の上に置いた。

「姫がこれから行く狗奴国には、太陽の社があるのは知っておるな？」

「はい」

「これはその太陽の社に関わるものだがよいか、これを肌身離さず持つていなさい。中身を決して人には見せてはいけない。特に狗奴の王と王子には絶対にだ」

「え？ それほどまでに大事なものでしたら、とうさまがお持ちになられた方が……」と、言いかけて言葉を止めた。

木沙羅は気付いた。それは父でなく王の声だった。これが何かはわからないが、王は他の誰でもなく自分にこれを託したのだと。

ヒム力国は政略結婚で狗奴国と同盟を結び、これから雛国と戦争をする。国民がもつと幸せになるために、祖国のために戦って……結果、二度と父とは会えなくなるかもしれない。今は同盟関係であっても、いつ敵同士になるかもわからない。

今はそういう時代であり、この状況になつて初めて木沙羅は自分が王族であることを実感していた。

木沙羅は王の目をしっかりと見た。

「姫は母に似て賢い。よいか、それを持っている限り、姫は安全だ」
「……はい」

「戦が終わつたら、姫のところにお茶でも飲みに行くかの。次に会うのが楽しみだ」

次……。一瞬、不安が頭をよぎる。木沙羅は必死に笑顔を作り、月森を見上げた。笑っている父親の背後に見える白く淡い月が、木沙羅の今の心境を表しているようだった。

2

およそ二ヶ月後。

雛国軍の抵抗は近隣諸国や部族の支援もあつて予想以上に激しく、戦闘は雛国全土に広がっていた。

両軍ともに兵力の損害は大きかったが、狗奴国とヒムカ国の連合軍は徐々に雛国軍を追い詰めていた。

月森は数名の兵士とともに、月の社の中にいた。

そこは各地に点在する遺跡でよく見る、泥まみれで古びた箱のようなものが並んでいた。ただ他の遺跡と違い、ここにあるものはどれも新しく、光を発しながら唸り声を上げている。

「月森、気が触れたか！ 光明ノ書はわれら人の手に負えるものではないぞ」

「黙れテナイ。カムイなんぞおらぬではないか！ お前たち守人の末裔の言葉は聞き飽きたわ」

月森は倒れている雛国の王テナイに向かって言葉を吐き捨て、透明の箱へと近づいて行く。

テナイは身動きできないほどに、全身に傷を深く負っていた。今

も腰と両脚の大腿部から血が、床へと血溜まりを広げている。

「おお、これが光明ノ書か。何とも不思議な……」

箱の中で、古い厚手の本のようなものが宙に浮いていた。月森の手の中にある四つの鍵が強く光り輝き始めると、箱の周りに四つのくぼみが現れた。

「やめるのだ！ 貴様のやろうとしている事は、世を戦乱へと招くことになるのだぞ」テナイの声も空しく、月森は鍵をくぼみにあてはめていく。

すべての鍵をはめたその時、

光と音が消え本殿全体が闇に包まれた。

「どうしたというのだ」月森を護衛していた兵士が、刀を構えながら周囲を見回す。

《エイチティ・イチ・ゼロ・二・サン・エイエス起動確認》

突然、なめらかな女性の声が屋内に響き渡った。同時に、天井が青空のように明るく輝き出し、壁一面に文字や人体の形をした絵が次々と映しだされていく。光輝く文字 月森たちにとってこの光景は、神の仕業としか説明しようがないほど衝撃的で、なかば強制的に夢を見せられているようだった。

「なんだこれは？ 誰かいるのか？ 返事をしろ！」月森は叫んだ。
《エイチティ・イチ・ゼロ・二・サン・エイエスよりデータ転送…
…脳を再構築中……大気組成確認中……異常なし……警告、起動予定日時二四××年×月×日×時×分×秒より、三四 五年と一三三日経過しています……プロセス変更、継続します……言語解析プロセスを実行します……脳を再構成中……体細胞組成開始……バックアッププロセス開始……最終プロセス開始……》

室内に響き渡る声の中、複数の足音が混ざる。

「月森殿、これは……どうしたことだ？」ヒルコだった。息子の稲馬と数人の兵士を引き連れていた。

「いや、私にも一体何が起きているのかわからん」

《最終プロセス完了……エイチティ・イチ・ゼロ・二・サン・エイ
エス、シールド解除します》

声が止むと同時に、光明ノ書が置かれている台座のそばで、黒い棺のようなものが床下から音も無く現れる。

月森たちが茫然と見つめている中、その箱の上面が音も無くすう
つと開くと、箱の中から一人の青年が上半身を起こし床に降り立つ
た。

大人びた顔立ちに、黒い服の上からでもわかるほど胸板が厚く、
背の高い勇ましいその青年の姿は、文献に出てくるカムイそのもの
だった。

「おお、月のカムイ様」

「お前は……」

目覚めたばかりの青年は、目の前で展開されている状況に少し混
乱していた。身体感覚もまだ眠りから覚めていないようだった。

だが、はつきりしていることもあった。たとえば、今は西暦二三
××年でもなく、目覚める予定であった二四××年でもなく、五八
××年であること。「お前は誰だ！」月森が叫んだ。

青年がこの施設で眠りにつく時も戦争のまっ只中だったが、今も
似たような状況にいること。このことに違和感はなかったし、動揺
を感じることも無かった。

そんなことよりも違和感を覚えたのは、目の前にいる人間の格好
だ。皆、歴史の本で見たような格好をしていた。室町時代だろうか、
いや平安時代？ いや、どうやらそうではない。様々な時代のもの
が混ざっているようだった。とにかく遊園地のアトラクションか、
あるいは、はるか昔の時代に投げだされた気分だった。

（ここは未来ではないのか？ 実はまだデバイスの中で夢を見てい
る？）

青年はもう一度テナイを見た。テナイの背中には黒い血が広がっ
ていた。床の血だまりが、目の前で起きている事が現実だと訴えて
くる。

「お前は誰だと聞いている！ カムイなのか？」

月森の声に青年は我に返った。と同時に、危機感が頭を支配していく。これは現実だ。大きく息を吸い込む。

「キアラ。俺の名前は、千曲キアラだ」

感覚が戻ってくる。変異細胞。眠りにつく前、研究者である両親に組み込まれた世界を狂わせた技術。

「彼をやったのは、お前か？」

「そうだ。貴様がカムイなら話は早い。我らには月の社と光明ノ書が必要なのだ。たとえ一国を滅ぼしてでもな」

その言葉にキアラは嫌悪感を覚えた。

「なぜ、そこまでして書を求める？」

「繁栄のためだ。人智を超えた力……その力があれば、他国からの侵略、妖怪どもとの争い、疫病、飢饉など何百いや何千年とずっと続いてきた苦しみから解放されるのだ」

（妖怪？ もしかして、人工種のことか？）

「光明ノ書は何も、もたらさない。この施設も単なる軍事目的で作られた研究施設だ。それに俺は人間だ」

「何を言っておるのだ？ カムイよ。今、目の前で起きていることが神のしわざでなく何と説明する？」

「あんたこそ、何を言ってるんだ。これは科学の力で……」

キアラは言葉を止めた。この状況で真実を語っても、彼らは何も理解できないだろうし、信じもしないだろう。

未知の自然現象に対して恐れを抱いていた時代、人は自ら納得あるいは説明するために神や妖精、昔話や伝説といったものを作りだし、それらを信じてきた。

今、目の前にいる人間もそうなのだ。彼らにとって、ここは研究施設でなく伝説で彩られた奇跡の場所であり、地球上のあらゆる情報と脳を分子化し保存しておくための光明ノ書を人々に幸福と繁栄、奇跡をもたらす神聖な物と信じ込んでいるのだ。だが、どうする？ 「カムイよ……」月森は言った。「我らに力を貸して欲しい」

「ならん」テナイは言った。「月森、人の手に負えない力は自ら滅びを招く。同じ過ちを犯さないためにも、自然の摂理に従い生きて行くべきなのだ。この月の社と光明ノ書は、触れてはいけないものだったのだ。それを……お前たちは、同じ過ちを犯そうとしているのが、わからないのか」

「テナイ、お前こそわかっていない。人は戦いながら前へ進むものだ。過ちかどうかは神が決めるのではなく、各々の信念のもと人が選択するのだ」

月森は剣を鞘から抜き取る。

「そして、これがヒムカ王の信念だ！」

月森は倒れているテナイの背中に剣を突き刺した。

テナイの顔が苦痛に歪む。テナイの叫びは血へどにかき消された。

「テナイ！」

キアラはテナイを抱きかかえた。

「私は、もう持ちませぬ。カムイ様。私の刀を……もともとはあなた様のです」

「何もしゃべるな！ 今、助けてやるぞ」

血に染まったテナイの手がキアラの腕を掴む。

「私は知っています。永遠の命はカムイ様しか持つ事ができない力であると。私どものような人間には効果がないということ」

テナイの言うとおりだ。正確には永遠の命というのは存在しない。カプセルの中で得た知識によれば、カムイの変異細胞を埋め込まれた者は、社と書が存在する限り、死に至りさえしなければ肉体を再生できる。

「カムイ様……英知を失った人間は、はじめから同じ過ちを……繰り返さないといけないのでしょうか……私にはそれがとてもくやし……しい……」テナイの手がずり落ちる。キアラの腕に命が消えていく感触が伝わる。

キアラはテナイの顔を閉じ、腰にささっている刀を手にとると立ち上がった。

刀を構え、周囲を確認する。

「月森、お前は……許さん！」

キアラは月森に向かって斬りかかった。目の前に護衛が立ち塞がり、剣で受け止める。キアラは間合いを取り直しもう一度、月森へと斬り込む。これも受け止められた。

キアラは眠っている間、様々な戦闘技術、経験を植え付けられていた。その戦い方は経験豊富な武人そのものだったが、相手もかなりの熟練者だった。しかも相手は五人。その後ろには、ヒルコと稲馬、護衛が一〇名ほど立っていた。しかし、なぜかヒルコは戦いに加勢せず静観している。

キアラには実戦経験が無かった。そして、先ほどのテナイの無残な姿、血、鉄のようなにおい、苦悶に満ちた表情、叫び、命が消えていく感触……。

キアラはテナイの姿を自分に重ねていた。立ち止っていると心も体も恐怖に包みこまれそうだった。震えを抑えようと必死に斬りかかった。

相手が攻撃を受け止めるたびに、あせりが大きくなる。

攻撃が利かない？

あせりは隙を生む。護衛が徐々に詰め寄る。

ここで終わるのか？ 箱の中で何を習っていた。あきらめるな。

そうだ。そういえば、さっきのあの感覚……あれは何だったんだ？

護衛の一人が斬りかかってきた。

キアラは後ろに下がり受け流そうとしたが間に合わなかった。剣の切っ先がキアラの右腕を斬り刻む。

キアラは右腕をかばい後へ下がる。

壁にぶつかり、床に血が滴り落ちる。

右腕の脈打つ鼓動と壁の冷たさが、絶望を強く感じさせる。

三人が一斉に斬りかかろうとしていた。

右腕の感覚が無くなっていく。
喉が渇く。

視野が狭くなり、頭の中で心臓の鼓動がこだまする。
感覚だ。思い出せ 変異細胞 眠りにつく前、研究者である
両親に組み込まれた世界を狂わせた技術。

三本の刃がキアラを襲う。

感覚 変異細胞 能力

そう、能力だ！

腰と脚に力を入れる。

次の瞬間、キアラは上空から見下ろしていた。斬りかかった三人
の後頭部と背中が見えた。空を飛んでいる感覚だった。

感覚はすぐに消え、三人の二メートル背後に着地した。

「な、飛んだ」それは月森の声だった。月森はすぐに我に返り、キ
アラを取り囲んだ。キアラの目の前には月森と護衛二人、背後に三
人立っていた。互いに次の攻撃をうかがいつつ、一步一步、ゆっく
りと足を動かしていく。

もう一度！

キアラは念じた。だが、今度は何も感じなかった なぜ思い通
りにならない！

目の前の一人が斬りかかってきた。キアラは左腕に力を入れ、剣
をはじき返し刀を振り下ろす。

キアラの手に相手の肉と骨を斬る感触が伝わってきた。キアラは
生まれて初めて人を斬った感覚に一瞬、身ぶるいした。

しかし、その震えは一筋の冷たい感触にかき消された。

背後の護衛がキアラの背中を襲ったのだ。キアラはひざまずいた。
間髪入れず、護衛はとどめを刺そうと襲いかかる。

それは死ぬと感じたと同時に、「死にたくない」と強く思った瞬間だった。

先ほどとは異なる感覚が突然、キアラの全身を満たした。

キアラはひざまずいたまま、襲いかかってくる背後の護衛へ身体を向けた。敵意に満ちた護衛と目を合わせる　護衛の動きが止まり瞳孔が開く。護衛はそのまま、意味不明な言葉を発しながら、ふらふらと歩いて少し離れたところで床に倒れ込み、のたうちまわり始めた。

「お前、何をした？」他の護衛がキアラを見た。「お前のその目のい……ろあぐうえばお……」

護衛二人はキアラの目を見た瞬間、あきらかに発狂したようだった。

キアラは月森の方へ身体を向けた。

「目を合わせるな！」月森はそう言うと、キアラと目を合わせないように対峙した。

その時だった。

「月森殿、加勢いたそう」それは、今まで静観していたヒルコだった。続けて、数名の兵士が吹き矢をキアラに向けて放った。

数本の矢がキアラに突き刺さった。すぐさまキアラは強烈な目眩に襲われ、床に倒れ込んだ。意識が朦朧とし始め、目の前がスローモーションのように映る。視界には誰も映っていなかった。感じるのは、心臓の鼓動と呼吸だけ。

（俺はどうなる？　背中が熱い……このまま、死ぬのか……）

全身の力が抜け、今にも気を失いそうな頭の中に、争う声が響いてきた。

「ヒルコ！　貴様何のつもりだ！」

「最初から、こうするつもりだったのだ！」

剣と剣のぶつかる音が徐々に近づいてくるが、キアラは目を向け

る事ができなかった。

音が止む。

静寂。

空気が張り詰める。

瞬間、どさつという音とともに、キアラの目の前に月森の顔が飛び込んできた。

目と目が合い、少し遅れて、床に沿って流れてくる赤い液体が視界に入ってくる。

もう一度、キアラは相手の双眸を見て理解した。瞳孔が開いていた。

（月森！……なぜ？）

月森の顔の前に、いくつもの桜石が転がってきた。まるで桜の花が舞っているようだった。

（俺……は……まだ……）

キアラは左腕に力を込め花弁を一つ掴むと強く握り締め、そのまま気を失った。

「二人の王は丁重に葬ってやれ。光明ノ書と鍵を忘れるな！ カムイを連れて行け！」

兵たちがあわただしく動きだす中、刀を鞘に収めたヒルコは稲馬に声をかけた。

稲馬は一步も動かなかった。と、いうよりも動けずにいたというのが正しいだろう。稲馬は困惑した表情を隠しきれないでいた。ヒルコは稲馬を促し一緒に社の外へ出て行った。

外は粉塵にまみれ、遠くで煙が曇り空に向かって、いくつも立ち上っている。

何か色々なものが混じって燃えている匂いが、どこかしこから漂

つてくる。近くには死体が転がり、風の音にまぎれ悲鳴のような唸るような音が聞こえてくる。

「稲馬、しっかりするのだ。これが戦だ」

「しかし、父上……木沙羅王女は……」

「よいか、ヒムカ王はカムイに殺されたのだ。どのみち、ヒムカは滅ぶ運命にあるのだ。王女に王位を継承させるわけにもいかん。これが何を意味するかわかっているな」

「……はい」

「お前はまだ若い。王女のこととは残念だが、いたしかたあるまい。この雛国と月の社を手に入れた今、次は太陽の社を手に入れなければならん。誰かが手に入れない限り、争いは終わらないのだからな」
稲馬には綺麗ごとのように聞こえた。違う……単に力が欲しいからではないのか？ なぜ、自分まで血塗られた道を進まなければならないのか。稲馬は木沙羅王女の無垢な笑顔を思い浮かべた。しかし、それは目の前の現実すぐに打ち消された。
ヒルコは稲馬の様子を黙って見ていたが、それ以上は何も語ることなく体を翻すと、灰色に染まった戦場の中を歩きだした。

3

キアラは目を覚ました。

天井の木目が、ぼんやりと蠟燭の灯りに合わせゆらいでいた。恐らく今は夜なのだろう。

体を起こそうとした瞬間、全身に激痛が走った。痛みがキアラの頭に今までの出来事を思い出させる。体には包帯が巻かれていた。

（俺は助かったのか？ ここはどこだ？）

「あなたが月のカムイ、キアラですね」

キアラの全身に寒気が走った。

部屋の入り口に一人の少女が立っていた。艶やかな唇から発せられた低く澄んだ声は、その姿に似つかわしく無いほどに冷酷だった。

「君は？ え、……」少女が乱暴に駆け出す。

次の瞬間、少女はキアラの腹の上に跨っていた。白い脚が剥き出しになり、髪の毛が逆立つほどに顔は怒りに満ち、逆手に持った短刀が今にもキアラの心臓へと突き刺さらんとしていた。

「私は木沙羅。ヒム力王、月森の娘と言えはわかるか？」怒気が少女の口から漏れる。

「なんだって……」

「父の仇だ！」

すかさず、キアラは胸と頭を防ごうと両腕を前に出す。
痛みは無かった。相手の様子は手に隠れ見えなかった。

数秒間の沈黙。

「なぜ……」

（なぜ……？）

「なぜ、お前がそれを持っている？」キアラの腹部に少女の身体の重みと震えが伝わってくる。

（持っている……）

そう言われ初めて、左手の中に何かを握り締めていることに気付いた。桜石だった。意識を失っていた間もずっと握っていたせいだろう、持っている感覚が無くなっていたのだ。

キアラは左手の甲に熱く濡れた感触を感じた。

左手を少しずらす。

手の先には少女の顔。唇をかすかに歪め、大粒の涙を流していた。ぐしゃぐしゃになりながらも、大声で泣きそうなのを必死にこらえていた。

「月森を殺したのは、俺じゃない」

「嘘だ！」

泣き叫ぶ声が胸に突き刺さる。

「嘘ではない。きみのお父さんはヒルコに殺されたんだ。俺と光明

ノ書を手に入れるために」

「誰が信じるものか！　とうさまはカムイに殺された。ヒルコさまと稲馬さまから、そう聞いたんだ！」

「落ち着くんだ」

感情むき出しに興奮していた相手の隙を見逃さなかった。短刀を取り上げ両腕を掴んだ。

「あ！」木沙羅は抵抗するがそれ以上、何もできなかった。

「放せ！　このッ！」

「いいから、話を聞いてくれ」痛みを堪えながら上半身を起こす。

「お前の言うことなんか、信じるものか！　あっ！」

キアラは暴れる木沙羅を強く抱きしめ、彼女の頭を自分の胸に押し当てた。その勢いのせいか、背中の傷口から激痛がキアラを襲う。

「んむむ！　放せ！　無礼者！」

「お願いだ……聞いてくれ」

「んっ、んぐむう！　誰がお前なんか！」

腕の中でもがく木沙羅の手がキアラの背中に当たる。

「ぐっ！」

思わずキアラが声を漏らす。

「っ！？」

木沙羅は自分の手を見た。

「血……。お前……」

きつく締められた腕の中で木沙羅が顔を上げる。少し落ち着きを取り戻していたようだった。

「話を……聞いてくれ」

木沙羅は黙って、顔を伏せた。

「お……前、血が……」

「いいんだ……大丈夫だから、まずは話を聞いて欲しい」

そう言われ、木沙羅は自分の手とキアラの顔を見比べながら押し黙ってしまっていた。

キアラは腕の力を緩め、今までの経緯を話した。

「わからない……わからないよ」

力の抜けた少女の腕からは、もう殺意は感じられなかった。互いにそれ以上何も話せないでいた時、遠くから数人の足音が近づいてくる。

足音は部屋の前で止まった。

「木沙羅さま」

現れたのは佳世だった。後ろに二人の護衛が立っていた。護衛はそれぞれ、桶と白い布の束を持っていた。

佳世はうなだれている木沙羅の手を取り身なりを整えると護衛に、「先に行ってください」と伝えた。

部屋には佳世だけが残っていた。

キアラは、何も言わず佳世の言葉を待った。

佳世は箆筭に近寄ると、先ほどの護衛が置いて行った白い布とお湯の入った桶を手にし、

「お体は大丈夫ですか？ 傷口を塞いで新しい包帯に替えますね」
そう言って、手慣れたように傷口を塞いで新しい包帯に替えている。

一通りの事を終わると、佳世はキアラと目を合わせた。

「私は木沙羅さまの侍女で佳世と申します。ヒルコさまのご命令で、ずっとあなたを看病していました」

キアラよりも少し年下だろうか。綺麗な弧を描いた二重瞼に漆黒の瞳が凜と輝いて、すらっと伸びた眉と一本一本丁寧に描き込まれたようなまつ毛が白雪の肌によく映えていた。藍色の服に漆黒の髪が艶やかに垂れている。

「そうか、まずは礼を言うよ。ありがとう」

キアラは安堵するとともに、いつもと違う緊張を感じていた。

佳世はキアラを寝かせると、今までの経緯を話し始めた。

キアラは捕まってからここ狗奴国の城でおよそ一週間、軟禁され

ていること。木沙羅と佳世は政略結婚のため、一か月ほど前からこの国で暮らしていること。

佳世の口調は優しくだったが、瞳は強く輝いていた。そこに媚びるような感じは一切ない。それは彼女自身の性格でもあり、木沙羅に対する想いの表れかもしれないと、キアラは思った。

「木沙羅さまが、キアラさまに何をしたのかはわかっております。でも、責めないで欲しいのです」

「どうか、責めないで」佳世はもう一度言った。

「どうして？」

「木沙羅さまは一人になってしまい、誰を信じれば良いのか、わからないのです」

佳世の言うとおりかもしれない。身も心もまだ成熟していない少女にとつて、肉親を失い、異国の地にただ一人残された気持ちは計り知れないものがある。しかも王族として、国や民の未来を背負わなければならない。

思えばキアラも木沙羅と同じだった。キアラ自身、これからどうすれば良いのか、わからなかった。ただ木沙羅と佳世、この二人にこれ以上、辛い思いをさせたくはない。

キアラは天井を見上げてから、佳世に振り向くと、

「佳世は、強くて優しいお姉さんなんだな」

「はい」

佳世はキアラの顔を覗き込むようにして、優しく微笑んだ。

4

数日後。

木沙羅と佳世は数人の侍女を従え、屋敷の外に出ていた。

先日の一件以来、木沙羅が悲しみに暮れないようにと佳世の配慮だった。

木沙羅と佳世は身分こそ違えども、幼少の頃からずっと一緒に育

つてきた仲である。はた目から見ても本当の姉妹のようでもあり、一緒にいる姿はよく間違われたりもしていた。この狗奴国に来てからも、すでに三回は間違われていた。

佳世は面倒見が良く、人の応対に関しても立派なもので、ヒムカ王の世話を取り仕切っていた大婆のおうなも一目置くほどだった。飾らない性格もあつて、歳の差関係なく他の侍女たちからの信頼も厚い。

一方の木沙羅はというと、礼儀正しい清楚なお姫様で通っている。しかし、佳世と大婆のおうなの前では話が別だ。かなりのやんちゃ姫であつた。佳世と二人っきりの時はそれこそ、大変な時もあり、大婆のおうなに「そんなに大声で笑うとは何事ですか……」と長い説教が始まることもしばしばだ。

だが、今の二人にそのような様子は垣間見ることはできない。

木沙羅たちの背後で砂地を削る音が聞こえたかと思いきや、兵士が数人、内門から城へと走り去って行くのが見えた。それに続くようにして、周囲が急にあわただしくなる。

「一体、何事でしょう？」侍女の一人が言った。

佳世は侍女に声をかけ、調べに行かせた。

五分も経たないうちに今度は、立派な身なりをした集団が佳世たちの前を通り過ぎようとしていた。

総勢二十名ほどだったが、その中にひととき大きな男が三人いた。その男たちは今まで見た事のない人間『鬼』だった。

鬼たちは皆、屈強な体格でまわりの人間を圧倒していた。あまりの威圧さに木沙羅たちは、目が釘付けになっていた。

佳世は鬼の後ろを歩く人間に着目する。その風貌から一人は王のようだった。立派な顎鬚をたくわえ、丸まると太ってはいたが、それがただ食べて寝て作られた脂肪の塊ではなく、隆起に満ちた腕の筋肉からわかるように戦士の姿だった。

戦士が顔を向けること無く無表情のまま、こちらに片目を向ける。佳世は思わず木沙羅を自分の背後に隠した。

戦士は顎鬚を撫でながら佳世と木沙羅をじっと見ていたが、視線を戻すと、そのまま通り過ぎて行った。

異国の集団が通り去った後、入れ替わるようにして侍女が血相を変え戻ってきた。

「どうでしたか？」

不安そうな面持ちで佳世が尋ねると、

「はい、今は伊都国の方たちのようです」

と言い、侍女は木沙羅の方に、ちらつと目をやる。

「あと、その……」

「どうしたのです？」

「……、ヒム力が減んだそうです」

「え？」

しばしの沈黙。佳世と木沙羅は絶句していた。

佳世は隣で凝固している木沙羅を見てから、続けて、と促す。

「詳細はわかりませんが、ヒム力を減ぼしたのは……その……伊都らしいのです」

「それは、どういうことでしょうか？」

「申し訳ありません。詳しい事はわかりません。本来、敵対するはずの伊都が……王みずからなぜ、ここに参られたのか」

佳世は先程の顎鬚の男の顔を思い出していた。

あの男が減ぼした。

木沙羅は佳世の服をぎゅっと力強く握り締め、わなわなと全身を震わせていた。

その日の夜。

伊都の人間が帰った後、木沙羅と佳世はヒルコに事の次第を確認した。

結果は昼間、侍女が話した通りだった。

木沙羅は、なぜ援軍を出さなかったのかヒルコに詰め寄ったが、それ以上は相手にされず何も得られなかった。

木沙羅は部屋に戻ると食事もとらずにずっと、蝋燭の灯りを見つめていた。

隣には佳世が座っている。

父を亡くし、故郷を失った。何もかも無くした。

今まで、

何もできなくとも、誰かが代わりにやってくれた。

何も言わなくとも、誰かが優しく声を掛けてくれた。

何も言わなくとも、何でも手に入った。

何も言わなくとも、好きな時に好きなことをしていれば良かった。

何もしなくとも、好きな時に好きなことを考えていれば良かった。

何もしなくとも、笑っていれば良かった。

何もしていなかった。

何も言っていなかった。

何もできていなかった。

何も。

だけど今は、

憎むことしか、できない。

木沙羅は腹立たしさが込み上げてくるとともに、反吐が出そうだった。膝の上で両拳を強く握り締める。

「苦しいよ……」

しばしの沈黙　二人の目の前で揺らいでいる紅い炎を見つめながら、佳世が口を開く。

「私が木沙羅さまの所に来たのは、九年前でした」
え。

「私は目の前で親を殺され、戦場で月森さまに拾われました」

「それって……まさか、とうさまが佳世のお父さんとお母さんを？」

佳世は遠い目をして頷いた。

「拾われた当時、月森さまは幼かった私に、何度も何度もすまないと
言っていました……だけど私は許せませんでした……ひたすら憎
みました」

「……」

「それからしばらくして、月森さまは、三歳になったばかりの木沙
羅さまを私に会わせてくださいました。どうか、面倒を見て欲しい
と」

佳世はここで目を閉じ、息を深く吸い込んだ。そして、再び目を
開く。木沙羅の瞳には、蠟燭のゆらめきが映っていた。

「憎しみに支配されていた私は、これを良い機会に自分の命と引き
替えてでも、同じ思いを味あわせようと決心しました。この方法で
しか、当時の私にできることはないと思ったのです」

「そして、私は毒薬の入った瓶を握り締め……木沙羅さまを……だ
けど、できませんでした」

「どうして？」

木沙羅は蠟燭から目を離さず呟くように言った。今の木沙羅には、
その気持ちが痛いほどわかった。今の自分なら容赦なく手をかけて
いたに違いない。だけど、なぜ？

「微笑んでくれたから……」

「え？」

「私に微笑んでくれたから。こうやって……」

木沙羅の小指を手のひらで包みこむようにして、佳世がそつと握
ってくる。

蠟燭から目を離す 佳世の目からは大粒の涙がこぼれていた。

佳世の涙で濡れた微笑みが、怒りや憎しみで冷たく染まりかけてい
た心を溶かすようだった。

「愚かで惨めでした。憎むべきは、月森さまでも木沙羅さまでも無

く、私自身の心だったのです。木沙羅さまは暗闇から私を、救ってくださいましたのです」

佳世はもう片方の腕で木沙羅を抱きしめた。

「だから……、今度は私が木沙羅さまを救う番……」

「佳世……」

その晩、木沙羅と佳世はがむしやりに泣いた。

5

翌日の午後、空は曇っていた。

木沙羅と佳世は屋敷の縁側で静かに座って、稲馬が来るのを待っていた。

なぜ稲馬を待っているのかと言うと、早朝、稲馬の使者から木沙羅の見舞いに訪れたい旨の手紙を受け取っていたからだ。木沙羅としては会う気は無かったが、真相を聞きだせるかもしれない考えもあり、会うことにした。

しばらくして稲馬が現れた。数名の武官を引き連れていた。

「木沙羅、元気そうだね。ちょっと、太陽の社まで行かないか。そこで君に珍しいものを見せたいんだ。きっと、気に入ってもらえると思うよ」

（太陽の社） 木沙羅は亡き父の言葉を思い出していた。

『これはその太陽の社に関わるものだがよいか、これを肌身離さず持っていないさい。中身を決して人には見せてはいけない。特に匈奴の王と王子には絶対にだ』

（何かある）とても嫌な予感がした。木沙羅は俯いたまま、はい、とだけ言った。

「良かった。そうだ、佳世はここに残ってもらえないかな。すまないが、木沙羅と二人で行きたいんだ。いいよね？」

「佳世、私なら大丈夫だから」

「……、わかりました。木沙羅さま、どうかお氣をつけて」

佳世は木沙羅を見送ると、屋敷に戻ることなく歩きだした。

佳世は木沙羅の身に何か不吉なことが、起こりそうな気がしてならなかった。しかし、ここで不審に思われたら木沙羅の身が危うくなる可能性がある。もはやこの国にとって、祖国を失った自分たちは何も意味をなさない人間なのだから。

今、自分にできることをやろう。佳世は焦る気持ちを抑えつつ、キアラのいる監視塔へ向かった。

6

稲馬と木沙羅は太陽の社にいた。

太陽の社は、城から森を抜けて徒歩一時間ばかりの場所にあつた。外見はどこにでもある、ごく普通の社で、ひっそりと佇んでいた。稲馬たちは本殿に上がり部屋の奥へと進む。

部屋の奥の階段を下りると、目の前に大きな空間が広がる。奥には大きさにして五メートル四方の門が構えていた。

「木沙羅、もうすぐだよ。そういえば、木沙羅は社のことは知っているよね？ 書のこととか」

「はい……」

「そうだよ、それに実際にカムイに会ってもいるんだよね。実は僕、あの人苦手なんだよね。木沙羅はどうなんだい？」

「……、えっと、それは……」

木沙羅はあの夜の出来事の後、佳世の言葉を思い出していた。月のカムイ、キアラも木沙羅と同じであると……誰を信じ、何をすべきか悩んでいる、と。

「落ち着いていて、およそ本に書かれているようなカムイという感じはしませんでした。私たちと同じ血の通った人間だと思えます」
「そうかなあ、僕にはそう思えなかったよ。何というか……怖かつ

た。さあ、この中だ入ろう」

重い扉が開き稲馬たちは中に入った。部屋は広く天井までの高さも一〇メートルはあった。部屋の奥には月の社にあったものとは形が異なるが台座があり、その上に創生ノ書があった。台座の奥には人がすっぽりと入るくらい大きな水槽らしきものが見えた。

「あそこだ、木沙羅。君に見せたいものって、あの創生ノ書なんだ」稲馬は指差しながら、真っ直ぐ目的の場所へと進む。

それは台座のそばまで来た時だった。

木沙羅の衣服から光が漏れだす。

突然のことに木沙羅は動揺したが、何事も無かったかのように、すぐに冷静を装うと視線を元に戻す。

そして、稲馬を見て更に驚く。

いや、正確には稲馬に驚いたのではない。稲馬の後ろから現れた者たちを見て驚いたのだ。予感が的中した。

「やはりな」

初めて聞く太い男の声　　二二ギだった。

（あれが伊都国の……なぜ、伊都の王がここに？）

二二ギの隣には先日見た鬼の一人と、どこことなく人間に近いが木沙羅は初めて目にする人種の人間が一人。そしてもう一人、ヒルコだった。

二二ギは言った。「姫はご存じないだろうが、ここの封印を解く鍵は、わしとヒルコ殿あわせて三つ持っていてな。残りの一つがヒム力にある事は知っておった。月森はまさか情報が漏れていたとは夢にも思わなかっただろうがのう」

木沙羅は服の上から鍵を握り締めた。緊張と不安、恐怖が体の中で蠢き始める。

大人たちを目の前にし、木沙羅は覚悟を決めると、
「お前たちは、初めから私たちを騙していたのか？」

「これは人聞きが悪い。姫、あなたの国もつい先日、同じようなことをしたのではないかな？　そう、雛の国を」ヒルコは話し続けた。「そして、父を亡くし何もかも失ったあなたを、我々は助けようとしているのだ。おとなしく鍵を渡しこれからは、平穏に我らと暮らすがよい」

「馬鹿にするな！　私は何も失ってなどいない。お前たちと違って、王としての誇りを持っている。我が祖国を奪い、父を冒涇したことを決して許さない！」

「あきれた……本当に子供だな。わしはもう、そのような事を言う奴には飽き飽きしているのだよ。まずは鍵だ、ゴズ」

二ニギは、顎鬚を撫でながら鬼に声をかけた。

鬼は無表情のまま、じつと震え立ち止まっている木沙羅の方へ真正面から歩み寄る。

木沙羅は鬼の腰に佩いている刀より上を見ることができなかった。恐怖で目を動かすこともできない。

身体を驚掴みにされる。

「ぐうっ！　……うえっ」

恐怖が強烈な痛みに変わる。気を抜けば気絶してしまいそうだった。思わずくじけそうになる。

「木沙羅王女よ」

ヒルコは真実を語り始めた。

狗奴と伊都は最初から画策し、ヒムカとの同盟は偽装であったこと。ヒムカに雛国を攻めさせ力が弱まったところで、伊都がヒムカを攻め滅ぼし、太陽の社を狗奴が、月の社を伊都が支配することになったていたこと。そして、月森を殺したのはキアラでなくヒルコだったことを。

木沙羅の目からは涙が溢れ出ていた。鬼の手が濡れる。

「ゴズ、力を緩めるな」

二ニギの声にゴズは、力を入れ直した。

木沙羅は後悔の念にかられていた。キアラの言葉をなぜ、今まで

信じようとしなかったのか。キアラだけでは無い。自分のことだけ考えて誰も信じようとしなかった。すべてを憎んだ結果が今の姿だった。

あの時の佳世の言葉を思い出す　『愚かで惨めでした。憎むべきは、月森さまでも木沙羅さまでも無く、私自身の心だったのです』
(とうさま……佳世……キアラ……ごめんなさい)

「太陽のカムイを復活させよう。ニニギ殿」

ヒルコは木沙羅から鍵を奪い取り、台座の前に立った。

ニニギは頷くと、もう一人に命令した。

「蟬丸、お前は外へ出て見張っている」

蟬丸と言われた黒い装束に身を包んだ人工種は、音も無く消えるように去って行った。

ヒルコとニニギが台座の前で、すべての鍵をあてはめると、部屋全体が暗くなった。

しかし、すぐに壁一面に見た事の無い文字や絵の塊が次々に浮かび上がり、声があたり一面に響き渡る。

《エイチティ・イチ・ゼロ・二・二・イーエス起動確認……エイチティ・イチ・ゼロ・二・サン・エイエスとの接続確認》

「前回のよう、生き残りがいると面倒なことになる」ヒルコは言った。

「雛のテナイのことか、ふむ、仕方ないな。ゴズ、殺せ！」

「かはっ」

肺が押しつぶされ呼吸できない。骨がきしみ、体中から汗が吹きだし苦悶の表情になる。

「待って！」

「稲馬……何を言いだす」ヒルコが驚いて稲馬を見た。

「かまわんゴズ、続ける！」ニニギの指示に従い、ゴズが手に力を入れる。

「木沙羅！」

全員が声のした方へ振り向いた。

「キ……アラ」

木沙羅は声にならないほどかすれた声で名前を呼んだ。　どうして？　涙が溢れだす。

キアラが息を切らしながら立っていた。

「むう、おまえはカムイ。兵は何をやっていたのだ」

ヒルコが出口の方に目をやる。

（落ち着け、まずは考える）

周りを確認する。相手は……ヒルコ、稲馬、ゴズ、ニニギ、その他に兵士が六人いた。

《エイチティ・イチ・ゼロ・二・二・イーエスよりデータ転送……
脳を再構築中……エイチティ・イチ・ゼロ・二・サン・エイエスより異常を検出……システムチェックおよびログ検証を開始します……》

（カムイ？　起動している！　姉さん！）

キアラは台座、流れるようにして、その奥にあるカプセルに視線を向けていく。

（こいつらは復活させたら自分と同じように利用するつもりだろう。創生ノ書までは遠すぎる。復活まで時間が無い　やるしかない）
キアラは手を頭に当てて意識を集中させた。目の色が変わっていく。

「目を合わせるな！」

ヒルコの叫びもむなしく、兵士たちは刀を振り回しながら暴れ始めた。

他の者がその様子に目を奪われているうちに、キアラは稲馬の懐

に飛び込む。稲馬はキアラのあまりにも素早い動きに目が追いついて行けず、ただ茫然と立っていた。

「これは、おれの刀だ。返してもらおう」

キアラは腰に差している黒い鞘を稲馬から取り上げ、稲馬を蹴り飛ばす。

稲馬はぶざまな格好で、ごろごろと転がった。

「稲馬！」ヒルコが叫ぶ。キアラは鞘から刀を抜き、ゴズの方へ駆け出す。

その動きは疾風だった。

ゴズは拳をキアラに打ち放つが、キアラは速度を落とすことなく素早く避け間合いに入り込む。

刀を振り上げる。

キアラの瞳は静かにゴズの顔面を捉えていた。

ゴズは剣先を見た。

一気に振り下ろす！

ゴズは叫び声を上げ、木沙羅を手放し両手で顔面を覆った。顔を压えた指の間から赤い血が滴り落ちる。

「げほっげほっ！」

激しく咳きこみながら、地面に倒れ込んだ木沙羅を打ち抱えると、キアラは正面を向きながらゴズから離れる。

《言語解析プロセスを実行します……脳を再構成中……体細胞組成開始……》

キアラはカプセルを見た。カプセルの中は液体で満たされ、女性の体がぼんやりと浮かび上がっていた。

（体ができあがっている）

「早く、止めなければ……」キアラは悔しそうにつぶやいた。

そのときだった。ゴズが狂ったように雄叫びを上げ、キアラに突進してきた。

「木沙羅、離れるんだ！」

木沙羅を押しつけゴズに立ち向かう。

しかし、今度はキアラの動きが遅かった。ゴズの腕がキアラの全身を薙ぎ払う。まるで小さな人形が投げ捨てられたかのように、キアラは壁に打ち付けられた。

《バックアッププロセス開始……》

気絶はしていなかった。すぐに上半身を起こし辺りを見る。カプセルの傍だった。少し離れた場所で二二ギとヒルコが、武器を構えていた。

ゴズがキアラにまっすぐ近づいて行く。

キアラは全身の力を奮い起し、立ち上がるとすぐさま創生ノ書へ駆けだした。地面を蹴る。蹴る。手を伸ばす。鍵だ！

巨軀から放たれる力まかせの一撃。

手は鍵を掴んでいなかった。地面を蹴っていたはずの足が空に浮いていた。

「うがあっ！」

キアラは元いた場所に吹き飛ばされていた。あばらと背中に激痛が走る。

「くたばれ、小僧」キアラが今さっきいた場所に、ゴズが怒気を吐きながら見下ろしていた。

《最終プロセス開始……》

キアラは必死に上半身を起こそうとするが、顔を上げることしかできなかった。

「もうすぐ、カムイが復活するぞ。ゴズ、早く止めを刺せ！」

見えないところから二二ギの叫び声。

ゴズは倒れているキアラの前まで来ると、大木のような足を上げ

た。

「この野郎、顔を踏みつぶしてやる」

《システム異常発生……》

突然、部屋の中が警告を知らせるように赤く照らし始めた。

「な？ どうした？」全員が驚いていた。

（そんなはずは……システムが異常を起こすなんてことは無いはず……）

キアラはゴズの背後に立っていた小さな人影に目を止めた　木沙羅だった。

木沙羅は脚を震わせ、顔を強ばらせながらいた。

両手の中に握られた一つの光が何であるかは、その場にいた全員が、すぐに理解した。

「これはとんでもないことをしてくれましたな。姫さま」

ニニギの顔は怒りに満ちていた。木沙羅に全員の目が向く。

「ゴズ、お前は早くカムイをやれ」

ニニギとヒルコは、木沙羅の方へゆっくりと近づいて行った。

「木沙羅！」

叫べども体が言う事をきかない。目の前の少女は恐怖におののき、一歩も動けないでいる。

「死ね！」

ゴズが足を上げたときだった。カプセルから一筋の太い光がゴズの足を貫く。光は、そのままニニギとヒルコの足へと向かって行った。

三人は苦痛の叫び声を上げ、倒れ込む。

キアラは全身の力を込めた　足が動く。キアラは床を這うようにして立ち上がると、がむしゃらに足を動かした。

《エイチティ・イチ・ゼロ・ニ・ニ・イーエスは中断プロセスを開

始します……」

「木沙羅！」キアラは木沙羅を抱き上げ後ろを振り返った。カプセルの中の影が消えていくのが映った。

「愛耶愛……ごめん……木沙羅と佳世を助けるのが先だ」

キアラは出口へ走りだすと、目の前で稲馬が震えながら武器を構えていた。

キアラは目もくれず、そのまま走り去った。

「大丈夫か？」

キアラの問いに黙って頷く。木沙羅はキアラの腕の中で、キアラが去り際につぶやいた言葉を思い返していた。

（愛耶愛……さっきのカムイはキアラの……）

木沙羅は尋ねたい衝動に駆られた。だが、ぎゅっとキアラの服を握り締める。今はただ、腕の中で温もりを感じていたかった。

キアラたちが立ち去った後、兵と一緒に蝉丸が社に姿を現した。

「王、これは一体？」

蝉丸たちは二ニギとゴズが負傷しているのを見て驚いた。

「蝉丸か、ちょうどいい所に来た。わが軍は動き出したか？」

「はっ、仰せの通りに作戦は順調に進んでおります」

「二ニギ殿、作戦とは？」

稲馬に抱きかかえられながら、負傷したヒルコが尋ねる。

だが、二ニギは返事することなくゴズと蝉丸に、

「書の方は失敗したが、こちらは予定通り進めるぞ」

ヒルコと稲馬を睨めつける二ニギの視線に合わせ蝉丸は、静かに刀に手を伸ばした。

キアラたちがタヤみの中、城に戻った時、兵たちは皆あわただし

かった。

「伊都のヤツら、裏切りやがって」

一人の兵がキアラに近づき、「おい、そこで何をしている？ 伊都の兵に城を包囲されているんだぞ。ん……？」と言うと、キアラの隣に立っていた少女を見て姿勢を正した。

「お妃様ではありませんか！ 大変、失礼いたしました！ しかしこれは一体……、どうなされましたか？」

キアラはその場をごまかし、佳世の所へ連れて行くところだと話した。

「どうやらヒルコや太陽の社のことは、公にされていないようだが、いつばれるかわからないな。急ごう」

キアラと木沙羅は、木沙羅の住む屋敷へと向かったが、そこに佳世の姿は無かった。他に城内をあちこち探し回ったがどこにもいない。

伊都の攻撃に備え、どこもかしこも兵があわただしく動き回っていた。

「やばいぞ、完全に包囲されている。ヒルコ様はどこへ行ったんだ」「そう言えば昼間、太陽の社へ向かったのを見たと言った誰かが言っていた。あれはお忍びだったようだとも言っていたぞ」

「もしかしたら、そこで何かあったのかもしれない。よし、社の方へ何人か向かわせよう」

兵士たちの話を聞き、「もう時間がないな。急ごう」とキアラは言う、城の上階へと向かった。

「おい！ 何人か来てくれ！ ヒム力の侍女が書と鍵を持ちだして逃げた。やつら、伊都と内通してるかもしれないぞ」

「きつと、佳世だわ」

木沙羅が希望を込めて、強い口調で言った。

数名の兵が走り去って行くのを見届け、キアラと木沙羅は見つからないよう、後を付けて行った。

そこは、本丸から断崖の上にせり出したように作られた屋根の無い部屋だった。部屋は一〇メートル四方の広さで、中央には宴席が並んでいた。

宴席の向こう、部屋の奥に兵が五人、キアラたちに背中を向けて立っていた。

キアラと木沙羅は身を隠しながら、宴席まで近づいた。声が聞こえてくる。

「これはカムイ様のものです。返せません！」

「何を言っている。死にたいのか？ 大人しくしろ」

キアラは自分の上着を木沙羅に被せ、身を潜めるよう身振りすると、更に兵士の方へと近づいて行った。

その先に佳世がいた。

佳世は腰の高さほどの手すりに背中をぴたりと付け、立っていた。手すりの先はもちろん何も無い。落ちれば確実に死ぬ高さだった。

佳世は手に光明ノ書と袋を持っていた。袋の中には鍵が入っている。しかし、キアラと木沙羅からは佳世が持っているものが何かはわからない。

兵たちも迂闊に動けないようだった。

「お前は、伊都と内通していたのだな」

「伊都なんか知りません」

「近づかないで……」手すりがぎりりと音を立てる。

兵が飛びかかるうとしたその時。

「あ！」

ばきつ、と木の割れる音とともに佳世が叫ぶ。

キアラは飛びだした。

（佳世！）

目が合う 手を伸ばす。

しかし遅かった。佳世の体は消えた。

キアラは衛兵を押し退け、壊れていない手すり部分から上半身を乗りだし下を見た……目を凝らす人影らしきものは無かった。

手すりから下は城壁が底なしのように続いていた。

なんだ、コイツは？　と言いたげな顔をしながら突然現れたキアラを横目に、衛兵たちも覗き込む。

「おい、誰もいないぞ」

その間にキアラは、そばに落ちていた補修作業で使う鉤の付いた縄を拾い上げ、素早く縄を手すりの支柱に巻き付けた。

最後に鉤を固定し、木沙羅に目で合図を送る。

木沙羅が腰を屈めながら走りだす。黒い上着がばたばたと舞う。

キアラはさきほど縄と一緒に拾った布で両手を巻きつけ手袋の代わりになると、腰を落とし縄を握った。木沙羅がキアラの背中に飛び乗る。木沙羅の細い腕がキアラの首にからみつく。

木沙羅がしっかりと抱きついたのを確認すると、キアラは佳世が今、落ちた場所から飛び降りた。

「あ！」突然の出来事に兵が驚いた。「おい、あんたどこへ行く？」

「俺は下を見てくる。もし、生きていたら俺が回収する」キアラは叫んだ。

「それより王が太陽の社で大変なことになっているぞ！　王の援軍を頼む！」

「なに、王が！」

「やはりそうか。よし、行くぞ！」

衛兵たちは全員、部屋を出て行った。今のは新兵だったのだろう。防具に傷は一つもなく新品同様で、城の中で一度も見た事が無い顔だった。とにかく、身元がばれずに済んだのは不幸中の幸いだった。

「木沙羅、しっかり掴まっているんだ」

キアラは矢の雨が降りそそぐ中、滑り降りて行く。攻城戦が始まっていた。

縄から手を放し地面に着地するとキアラと木沙羅は、佳世が落ち

たと思われる場所を探した。

それは、すぐ見つかった　わずかに血糊の付いた草。

木沙羅は地面にぼつぼつと落ちている血痕を見て、顔を両手で覆った。涙が溢れる。

そばには落下した衝撃で付いたものだろうか、草葉が折れ曲がっていた場所があった。

「これは……」

泣きべそを掻きながら木沙羅は言った。

「どうした？　何か見つけたのか」

「これは、佳世のお守り……」

そう言つて懷から自分のお守りを出した。二つとも同じだった。

「一緒に作つた桜石の入つたお守りなの」

（そうか、あの桜石……月森も……）

その時だった。

ぶんつ、と宵闇を裂く音とともに、横風に舞う雨のように火矢が降り注いだ。

キアラと木沙羅が矢の飛んできた方に目を向けると、遠くに伊都国の旗が見えた。城に火が付き、火の粉が舞い始めている。

「ここにいては危険だ……大丈夫。きつとどこかへ逃げているはずだ」

小さい体が震えている。キアラは屈むと木沙羅の目と合わせ、

「木沙羅、俺たちがまず生き延びなければ、誰にも会えなくなるぞ。自分の命を大切にするんだ」

少女が見つめ返す。

「大丈夫！　これからはずっと俺と一緒にいる。佳世が姉さんなら、俺が兄さんになる。だから……な？」　そう言つて、キアラは木沙羅に手を差し出す。

木沙羅は涙を拭い、キアラの手に自分の手を重ねる。

「うん……行きましよう」

キアラは木沙羅の手を握りしめると、二人は森の中へと走りだし

た。

佳世

1

キアラの部屋は監視塔の三階にあった。佳世は両手に包みを持ちながら、ドアの前に立っている衛兵に会釈すると、いつも通りキアラの部屋に入った。

ドアを閉め中に入ると、キアラは窓越しに外を眺めていた。あれだけ深手を負っておきながら、歩き回れるほどに回復していた。

「佳世か、昨日は……」

「どうか木沙羅さまと一緒に、この国からお逃げください」

「え？」

「木沙羅さまが、太陽の社へ連れて行かれました。何か嫌な予感があるのです」

佳世は手短に、前日知った事実をキアラに話して聞かせた。

「わかった。だけど、なぜ木沙羅が太陽の社へ連れて行かれるんだ？」

「それは……わかりません。キアラさまは、太陽の社のこと何かご存知ではないのですか？」

「俺が知っていることと言えば、太陽の社には愛耶愛が眠っていることだけだ。まさか、太陽の社がこの国にあるとは思わなかったけどね。信じられないだろうけど、三五〇〇年前……当時は戦争中だった。そんな中、研究者である両親がカムイとして社で眠るはずだった。しかし、両親はそうしなかった。俺と双子の姉である愛耶愛を助けるため、自分たちの代わりに俺たちをカプセルに入れたんだ」

「かぶ、せる？」

「カプセルというのは人を眠らせる大きな箱とさえいいかな。本来なら眠ってから百年後に起こされるはずが、なぜかそうならなか

った」

「冬眠みたいですね。でもなぜ、起こされなかったのですか？」

「父から聞いたのは、カムイ、天と地が起こしにくるということだけだった。だが、彼らは来なかった」

「すると太陽のカムイさまも、まだ目覚めてはいない……」

「恐らくは……まずは鍵を揃えないといけないしね。何にしても太陽の社には行くつもりだった」そう言つてキアラは、部屋の中を見まわし、「問題は、この部屋からどうやって抜けだすか……」

「これをお使いください。幸いにもこの搭周辺の警備は手薄です」

佳世は先程から両手に抱えていた布で覆われた大きな包みを紐解いた。中から出てきたのは長縄だった。キアラは縄を手に取った。

「そろそろ兵に怪しまれます。お急ぎください」

「佳世、君はどうするんだ？」キアラは縄を近くの柱に固定した。

「私には、まだやる事が残っています。ですがご心配には及びません。終わり次第、追いつきますから」

「わかった」キアラは窓越しに周囲に誰もいないことを確認すると縄を垂らし、窓際に立った。

「キアラさま」

「ん？」

「先程の話……私は信じます」

「佳世……」少し間をおいて、キアラは小指を差し出した。

「はい？」佳世は小首を傾げた。

「木沙羅を助けたら迎えに行く。一緒にこの国を出ような」

「はい。私も木沙羅さまに約束しました。『今度は私が木沙羅さまを助ける』と。だから」

佳世がほんのり顔を赤らめながら小指を出すと、キアラは自分の小指を絡めた。

お互いに頑張ろう、と励ましの表情を見せるとキアラは窓から身を乗りだす。

キアラが地上に降り立つのを見届けた後、佳世は縄を包みにしま

い、何事も無かったかのように部屋を出た。

2

外はまだ明るかった。佳世は両手に先ほどとは異なる包みを手にし、城の入り口前に立っていた。

入り口には衛兵が二人、槍を持って立っていた。陽の光を浴びて槍の穂が輝いていた。

（今、私にできること）

佳世は何かを決意したかのように腕に力を込めると、入り口を通り王の私室へと向かった。

（光明の書と鍵はきつと、ヒルコ王の部屋にあるはず。あの部屋が最も保管場所に適している……）

王の私室入口には、衛兵二人と武将らしき人物がいた。別の表現で言えば、人間二人と烏のような黒い羽を背中から生やした天狗がいた。

先日のおもそうだったが、天狗を見るのも佳世にとっては初めてだった。

人間といわゆる妖怪と呼んでいる人種が共存していることは、八国の地をはじめ全国的には当たり前らしいのだが、ヒムカの国はほとんど人間で占められていた。

また妖怪と言っても、遺跡から発見された文献によれば、元は人間でありカムイと同じ時期に生まれたものらしい。

事実、鬼も天狗も肌といい、顔や体つきだけ見れば人間とさして変わりはない。角や翼が付いていたり、鬼に至っては体の大きさが違うだけであった。しかし、その身体的特徴が戦いにおいては、彼らの強みとなるのは間違いなかった。彼らは戦うために生みだされたのである。

衛兵は、じっと立っていた。

入り口のドアは開いているはずだ。

佳世は心臓の高鳴りを抑えつつ、深呼吸すると入り口の前へ進んだ。

「止まりなさい。王はご不在です。お妃さまの近侍とはいえ、許可無く入らせるわけにはいきませんぞ」呼び止めたのは天狗だった。

「今日は、王さまに御用があつて参つたわけではありません」

「では、なんですか？」

「王さまの侍女が来れなくなったので、急きよ、私が身のまわりを世話することになったのです」

「はて？ そのようなことは聞いておりませんが……」

「だから、急きよと言いました。それとも、あなた方が代わりにしてくださいのですか？」佳世は手に持つている包みを上げて見せた。「いえ、そのようなことは……大変、失礼いたしました」

そう言つと天狗は、素直に佳世を部屋へ通した。

佳世は部屋の中を見まわした。私室は三つの部屋に分かれていた。一番奥に執務室があつた。

恐らくまだ、あの執務室にあるだろう。

佳世には確信があつた。なぜなら、つい先日木沙羅と一緒にこの部屋に訪れていたからだ。あの時、木沙羅が援軍を送らなかつた理由を王に何度も問いていたのを覚えている。

佳世は執務室に入った。部屋には机が置かれ、その隣に真鍮製の南京錠が二つ付けられた木箱が置かれていた。王の私室ということだけあつて、厳重に保管する必要がないのか、とにかく目的のものはその中であつた。

佳世は腰の高さまであるその木箱の前にひざまずくと、包みを広げ木槌とくなくないを取り出した。

くなくないの柄に布を巻き付け、錠前の取り付け部分にくなくないの刃をあてる。

（ここからであれば、音は入り口まで届かないはず……）

木槌を振り下ろす。鈍い音がした後、じつとしたまま耳を澄ます……大丈夫のようだ。

何度か振り下ろし取り付け部分が緩むと、佳世はくなくいを使って、なかば強引に取り付け部分を取り外す。額から汗が滴り落ちる。
（これで見つかるのも時間の問題ね。結構、時間も経っているし、これ以上、長居しては怪しまれてしまう……）

箱を開けると、中に光明ノ書と袋があった。

佳世は、袋の紐を解いて鍵が四つ入っているのを確認すると、書と壊れた錠前と一緒に包みにしまい執務室から出た。

その時だった。

入り口に向かおうと体の向きを変えた瞬間、佳世は何かに激しくぶつかった。何かが落ちる。

ぶつかったのは先ほどの天狗だ。その姿を見て、佳世の心臓は今にも叫び声を上げそうだった。脈が早まる。

「これは大変、失礼いたしました。なかなか出てこれないので、心配しましたぞ」

「いえ、私の方こそ。王さまの身のまわりを片付けるのは初めてでしたので、思っていた以上に手間取りました」
「なるほど、そうでしたか……」

天狗はしばしの間、佳世の顔を覗き込んでいた。

佳世も黙っていた。もはや、木箱が壊れているのは誰の目から見てもあきらかだった。

包みを支えている両腕が、小刻みに震える。

顔を逸らしてはいけない。

天狗は黙って体を反転させると、入り口に向かって歩きだした。

佳世は静かに息を吐き出す。

佳世は衛兵に会釈すると、階下へと向かった。

階段おどり場で、佳世は一人の侍女が階段を昇ってくるのが見えた。佳世は会釈しながら、侍女の衿元を見た。

（あの衿の色は……王さまの侍女だわ）

佳世は、侍女が通り過ぎると足早に階段を下りて行った。

周囲に怪しまれぬよう、速足で歩く。途中、走ろうか走ろうかと

何度思ったことか。動悸が早まっていく。

（早く、この城から出ないと！）

ついに、佳世は一階の出口前まで来た。

出口の両脇には衛兵が立っていたが、特に怪しまれる様子は無かった。

しかし佳世は気付いていなかった。あの部屋で天狗とぶつかった時、錠前を落としてしまったことを……。

突然、城内に甲高い笛の音が響き渡った。佳世の足が止まった。衛兵が槍を交差させ出口を塞いだ。

（これは……）佳世の心臓は、はちきれそうだった。

（ここで向きを変えたら、怪しまれるわ）進み続ける。

「お止まりください。この音が聞こえませんか？」衛兵は言った。

「……、これは何でしょうか？」

「佳世さまは、まだこちらに来て日が浅いのでご存知無いかと思われますが、この音は賊が侵入した時のものです」

佳世はそう、と頷いた。

「ここは危険ですので、お部屋にお戻りください」

あと数歩進めば外に出られるというのに、目の前の出口が遠くに感じられた。

今やこの城は監獄と化した。

あれだけの物を盗られたのだ。あの天狗は今頃、兵を総動員して自分を必死に探しているだろう。捕まれば自分はもちろん、木沙羅さまも無事では済まされない　恐らく待っているのは死。

恐怖が脳裏をかすめる。

（どこかに隠れる？）浅はかな考えだった。立ち止まれば、捕まるのは時間の問題。

（恐れるな。立ち止ってはいけない　）

「わかりました。すぐに戻りましょう」と、少し驚いた表情で答え

ると佳世は足早にその場を去った。だけど一体、どこに行けば？

一階は人が多い。佳世は窓を見た。ふと、立ち止まりすぐに、佳世は階段おどり場を目指した。

（二階の窓から屋根を伝って外に出よう）

そう考えた矢先だった。

「いたぞー！ ヒム力の侍女だー！」遠くから複数の兵たちが走ってくるのが見えた。捕まるわけにはいかない。

佳世は二階に駆け上がると近くにあったドアを押して、部屋に飛び込んだ。兵たちは背後の廊下に迫っていた。

佳世は窓に駆け寄った。

身乗りだし下を覗き込むと、窓の下には片流れの屋根が壁から突き出ていた。

佳世は屋根へ飛び降りた。

だが、屋根から地上へ飛び降りることはできなかった。たとえば、できたとしても、すぐに捕まってしまうだろう。地上では、兵たちがあわただしく叫びまわっていた。だが、その叫び声は佳世に向けたものでは無いようだ。

「伊都だー！ 伊都に包囲されているぞ！ 戦の準備を急げー！」遠くに黒煙が何本も立ち上っているのが見えた。

（まさか、伊都がこの城を攻めているの？）

「おい、いたぞー！ 屋根の上だ！」部屋の中からだった。

部屋の中を見ると、兵たちが部屋の中になだれ込むように入ってきていた。

佳世はスカートの裾を手で引きちぎり、太ももまで切れ目を入れた。

兵は窓に身乗りだし手をのばした。佳世の腕を掴む。

佳世は手を振りほどこうと暴れ、前に倒れ込んだ。一人の兵が屋根に飛び降りる。

兵は倒れている佳世の足首を掴み、引っ張り込む。

佳世は体をひねって上半身を起こすと両手で踏ん張り、片足を金

槌のように振り上げる。

そのまま、足首にからみついた兵の手首に踵をぶつける。

兵は悲痛の声を上げ手を離れた。

佳世は這うようにして立ち上がると、別の屋根へと飛び移った。

背後では更に、数名の兵が部屋から屋根に出ようとしていた。

佳世はもう一つ先の屋根へ飛び移った。

もう一つ。

落ちたらおしまいだ。

背後を確認してもう一つ。

窓だ！

佳世は窓から厨房に飛び込んだ。

厨房には誰もいなかった。

武器になりそうなものと縄を探した。

兵たちが窓に迫っていた。

だめだ。捕まる。

佳世は廊下に面したドアに駆け寄り、さっと開けて飛びだした。

その瞬間、入れ替わるようにして兵たちが、今開けたドアから押し寄せるように入ってきた。

佳世は腰を屈め兵たちの間をすり抜け、階段おどり場へと走った。下の階から兵たちが駆け上がってくるのが見えた。背後からも声を荒げながら兵たちが迫っていた。

佳世は階段を駆け上がった。

腕に抱えている包みが重い。ふくらはぎが、はちきれそうだった。捕まるのはいや。

天守から外に出るしかない。

佳世は一気に天守のある階まで階段を駆け上がった。

天守には宴席用の屋外スペースがあった。

佳世は納戸を探した。

あった！

佳世は納戸の開き戸を開け、中に入った。開き戸の向こうから声

がした。耳を澄ます。

「おい、聞いたか？ 伊都の人間が城内に紛れ込んでいるらしいぞ。今、下の階が大変なことになっているようだ」

「なに？ 相手はどんなやつなんだ？」

「大柄な戦士のような男と背の高い女の二人だ。男は大剣を振り回し、女は長巻と弓を持っている。こいつらに、かなりやられているらしいぞ」

「それって、まずいんじゃないか？ 俺たちも急いで加勢しよう」
ドタドタと足音が去って行った。

（大柄な戦士の男と背の高い女……伊都の人間だとすれば、その二人もこの書を狙っているのかしら？）

しかし、今はどうでも良いことだった。

暗闇の中、佳世は這いつくばるように、がさごと手探りで縄を探し始めた。

遅かれ早かれ、見つかるのも時間の問題だ。少し音を発しようが、もう気にしてはいられない。

柵の感触 手を滑らせていく あった！ 縄だ。縄の先には鉤が付いていた。それは、城壁を伝うための補修作業用の縄だった。

佳世は縄を手に取り、戸を開けようとしたその時。

佳世は誰かにはじき飛ばされ尻餅をついた。

包みに入っていた光明ノ書と鍵、木槌、くないが飛びだし、音を立て床に落ちてしまった。

「ここにいたのですか？ お妃さまの近侍といえど、王のものを盗むとは許されませんな。万死に値しますぞ」

聞き覚えのある声だった。開き戸から差し込む光の中に烏のような黒い影 王の私室前で見た天狗だった。天狗の背後には数人の兵士の姿もあった。

殺される。

佳世は天狗から目を離さず手探りで武器を探した。伸ばした手に鉄の感触 指をすかさず動かす。暗闇に見えるのは天狗の革靴。

天狗は槍を頭上で振りかざし、腰を深く落とした。

「大丈夫です。心臓を破裂させますので痛みはありません」

又メリを伴い厚い刃が妖しく光る。

それを目にした瞬間、思わず佳世は悲鳴をあげていた。

佳世は腕を振り上げ、天狗の足めかけ、手にしたそいつを思いっきり刺し込んだ。

天狗はあまりの痛みにもだえ、ひざまずいた。天狗の足には、くないが突き刺さっていた。

佳世は縄を拾うと肩に掛け、光明ノ書と鍵を左腕に抱えた。そして、余った右手で天狗の腰に差さっている刀を鞘から抜き取ると、納戸を飛びだした。

佳世の動きは鮮やかだった。

五人の若い兵たちは、まさかこんな少女が？ と言いたげな顔で口をぽかんと開け、佳世の姿をただ目で追っていた。

佳世は剣先を兵たちに向けながら、後ずさりしていく。

「何をしている。早く捕まえなさい！」眉間に力を集めた天狗が檄を飛ばす。

その怒声に兵たちは、目を覚ましたように一斉に我に返ると、目の前の少女を捕らえようとするかの如く身構えた。

佳世は刀を兵たちに投げ捨てた。

兵たちがひるんだ瞬間、佳世は体を反転させ目的の場所へと走りだした。

途中、何度も転びそうになるが、それでも必死に走った。

廊下を駆け抜けた所で景色が突然、変わった。

佳世の眼前に屋根の無い空間が広がっていた。

着いた！

兵たちは背後に迫っていた。

うなじに汗が流れる感触。心音が激しく佳世の頭の中で鳴り響き、深呼吸する暇も無い。

佳世は外に面している奥の手すりに駆け寄ると、縄を床に放り投

げた。

前を見た。手すりから向こうは地平線が広がり、山が波のように連なっていた。

下を見た。城壁に沿って地面は、はるか遠くにあった。

ここで佳世は呼吸を整えた。首筋から胸元にかけて幾重もの汗が滴り落ちる。

「そこまでだ！ 大人しくしろ！」

佳世は手すりを背にして振り向き、両腕で光明ノ書と袋を抱きかかた。

「これはカムイ様のものです。返せません！」

五人に囲まれていた。

「何を言っている。死にたいのか？ 大人しくしろ！」

「お前、伊都と内通していたな！」

「伊都なんか知りません」

「近づかないで……」手すりがぎりりと音を立てる。

『今度は私が木沙羅さまを救う番』

『木沙羅を助けたら、迎えに行く。一緒にこの国を出ような』

約束した。ここで死ぬわけにはいかない。

兵たちが一斉に飛び掛かった。

瞬間、ばきつと木の割れる音とともに佳世は空中に放りだされた。

「あ！」

佳世は自分の身に何が起こったのか理解できなかった。目の前にキアラの姿が映っていた。そして、キアラの背後には木沙羅の姿が

これは夢？

キアラが手を伸ばしてきた。

佳世も手を伸ばしキアラの手を掴む。

何も掴んでいなかった。手の先にあるのは夜空。
どうして……。

どうして……やっと、会えたのに……。

私は……約束を……。

木沙羅さまを助けることができなかった……。

今、立っていた場所は、はるか上にあった。

佳世は目を閉じた。

風が体突き抜け、涙が舞い散る。

風が止む。

痛みはまったく感じなかった。全身が何かに包まれている感じがした。

目を開けると空が見えた。目を閉じる前と同じ空だった。

するとどこからともなく、白銀に輝くオーロラが煌めきながら舞い降りてくる。

これが本で読んだ天の世界なのかなと思った。

「大丈夫？」

（この声は？）

「落ちて死ぬところだったよ。本当に大丈夫？」

彼女は茶色の瞳を大きく見開き、心配そうに佳世の顔を覗き込んでいた。白銀の髪が優しく佳世の顔を撫でる。

彼女は白い翼を羽ばたかせながら、地面へ舞い降りていた。

だが、

「うっ！」彼女は目を見開いた。

突然、佳世の体がすうっと浮いたかと思うと、周りの景色が急速に夜空へと吸い込まれていった。

二人は地面に叩きつけられた。彼女は落下したのだ。

彼女は苦しそうな声を漏らしながらも佳世を抱き上げると、林の中へと走った。

林を抜けた所で、彼女は倒れそうになった。本当に倒れる前に、佳世は両腕に抱えていたものを放り出しながら彼女から飛び降り、彼女の身体を正面から受け止めた。彼女の上半身が佳世の小さな体にのしかかる。

「あ……」

見ると、彼女のふくらはぎから血が地面に滴り落ちていた。

佳世はすぐさま彼女を座らせると、傷口に唇をあて血を吸いだし、自分の裾を破いて傷口に巻いていく。

「あの、ありがとう」「ありがとうございます」二人は顔を見合わせた。

佳世は照れくさそうに俯いて、巻き続けた。

彼女はふつと笑みを浮かべ、「矢がかすったみたい。でも大丈夫だよ」と言った。「すぐに追手がくるし、早く立ち去ろう」

佳世が巻き終わるのを見届けると、彼女は翼をばさつと広げ立ち上がった。

と、その時。

彼女の背後で声がした。佳世はその声と姿に覚えがあった。

「おやおや、これはこれは、梟を射ったかと思えば、またあなたにお会いできるとは……佳世さま」

あの天狗だった。漆黒の鎖かたびらを身にまとい、黒い翼をバサつと広げ、ゆっくりたたむ姿は、不気味以外のなにものでもなかった。

「あんたさつきから、しつこいよ。それに私の名前は十真だ。梟じゃない」十真は佳世に背中を向けた。

十真の背中中は美しかった。真つ青の衣に、梟のような白い翼と腰のあたりまで伸びた髪がそよ風に揺られるさまは、ここが戦場である事を忘れさせるほどであった。

十真は腰に下げていた短弓と矢筒を外し、「持っていてね」と佳世に手渡した。

矢筒の下に隠れていた十真の腰に、湾曲した短刀が鞘におさめら

れていた。

佳世は十真から離れた。

「やっと立ち向かう気になったかな。私の名は鞍丸」そう言うと、鞍丸は腰を落とし片眉をあげながら槍を大上段に構えた。「いざ」相手の声と同時に十真は走りだした。

鞍丸は浅く素早く踏み込み、十真の怪我している足を狙い　突く。が、見せかけだった。槍の穂が突きから払いに転じる。反対の足を狙ったものだった。

しかし、それを予測していたかのように十真は鞍丸に向かって跳びあがる。身体をひねりながら右手を自分の腰に回す　翼を広げ身体のひねりを止める　身体の正面が鞍丸の左肩に合わさる。

一閃。

がきん、という音が夜空に突き刺さる。鞍丸の首を狙った十真の湾曲した刃は、赤い槍の柄に喰い込んでいた。

両者の目が激しく、ぶつかる。

十真は鞍丸の背後に降り立つと、後方に跳びはね間合いを取った。
「面白いね、あんた」十真は言った。

「あなたですよ。梟とは初めて戦いますが、なかなかどうして、素早い。だが」

「だが、なに？」

「この地にいるはずのない梟がなぜいるのでしょうか？　ヒムカの人間がよそ者とするんでいたとは、とても思えません？」

「何が言いたい？」

「よそ者は邪魔しないで頂きたい。私は王の持ち物を返して頂ければ良いのですからな」

「持ち物？」

「それは……渡せません！　これは月のカムイ様のものです！」佳

世は叫んだ。

「月のカムイ？　じゃあ、あの子が大事そうに抱えているものが…」

十真は佳世の両腕に抱えているものを、ちらつと見た。

そして、鞍丸に視線を戻すと、にやつと笑った。

「邪魔する」そう言葉を吐きながら、十真は鞍丸に飛び掛かった。

お互いの刃がぶつかるたびに閃光がほとばしる。

決着はつきそうもない。

十真の足には限界が来ていた。鞍丸の重い槍の攻撃を受けるのは、体格的にも力でも劣る十真にとって、かなりの負担だった。

「鞍丸さま！」

騒々しい足音と同時に声が響く。

佳世の背後、林の中から騎馬武者と兵士が現れた。

「佳世！」十真が間合いをとりながら呼ぶ。佳世はあわてて、十真の背後へと走った。

鞍丸と兵が二人を囲むようにして、じりじりと距離を詰める。

「さあ、おとなしく渡してもらいましょうか？」鞍丸は言った。

「これは、あんたたちが持つていても意味がないよ」

「それは、あとで考えるとしましょうか。やれ！」

佳世は息をのんだ。

「十真！」

声と同時に、武者が馬から崩れ落ちた。周りの兵は驚いて嘶きをあげる馬に目を奪われていた。

その間に声の主は、馬上を飛び越え十真の横に並んだ。十真と同じ姿をしていた。

「十夜！　私たちを追ってきたの？」十真は言った。

十夜と呼ばれた女性は、そうね、と頷きながら肩まで伸びた髪をばさっとかきわけた。

十夜は左腕に固定された円盾を持ち、右手に真つすぐ伸びた両刃の剣を握っていた。

佳世は二人の背後に立っていたので、十夜の顔はわからなかったが、二人の姿はうり二つだった。髪の高さと手にしている武器を除けば。

十夜は十真の怪我に気付くと、落ち着いた口調で「跳べる？」と小声で言った。

「うん、一人なら跳べる。十夜、佳世をお願い。あとは私が”とかん”とやるから」十真の茶色の瞳に佳世が映る。

十夜も佳世を見た。紺青色の瞳が優しく佳世に微笑む。

「佳世、弓矢を」そう言つて十真は、佳世から弓と矢筒を受け取ると、「佳世、合図と一緒に十夜にしがみついて。いい？」

佳世は頷いた。

十夜たち三人は道なりに後ずさりを始める。背後には木々が立ち並び、およそ五メートル幅の道が深い森へと続いていた。

「これはこれは、またまたどうして。もう一人、いたとは」

「あなたには関係ないこと。それよりもあなたたち、こんな所で遊んでいないで、伊都の相手はしなくて良いのですか？」十夜が鞍丸に言い返す。

「ふつ、こちらでも重要ですから」獲物を追い込むのごとく、鞍丸は前へ進む。

「十夜、その子は私たちが探していた書を持っている」十真はささやいた。

十夜は少しばかり驚いたが、黙つてうなずいた。

十夜は足を止めると、鞍丸に言った。「でも、こちらに来たのは間違いだったよね」

その言葉が合図だった。

十真が立膝をつきながらしゃがむ スカートのスリットから棒

手裏剣を巻いた太もがのぞく。

「佳世！」十夜の呼び声に、佳世が十夜に抱きつく。

十真の放った棒手裏剣が二頭の馬に突き刺さる。二人は翼を広げ跳んだ。

「あ！」兵たちが叫んだ時にはもう三人は、手の届かない所にいた。十夜と十真が跳んだ先は、道に沿って左右に立ち並ぶ木だった。二人は木の幹に足を付けると、それを土台にして更に高く跳び上がり、兵たちから離れるように翼を大きく羽ばたかせた。

佳世は眼下に混乱している兵たちの姿を見た。十真の放った棒手裏剣の刃には、痛みを増幅させる薬か何かが塗ってあったのだろう。馬は狂ったようにその場で暴れていた。

横を見ると十真が弓で狙いを定めていた。矢は通常のものとは異なっていた。狙っている先はもちろん眼下の敵。矢が放たれる。

矢が敵の中心地点に突き刺さると同時に、雷鳴のような爆発音が響いた。大気が震える。

先に着地した十夜が佳世を降ろす。つづいて十真が二本目の矢を取りだしながら地面に降り立った。

「先に行つて！」十真は、弓矢を持った両拳を上を持ち上げた。

佳世の両脚は鉛のように重かった。目の前に立ち並ぶ木と木までの間隔が長く感じられた。それでも、走り続けなければならない。はるか後方で爆発音がしたかと思うと、あっという間にその音は佳世の目の前を通り、そのまま森の奥深くへ消えて行った。それが何回か繰り返された。

「佳世、それを私に。両手に抱えていては走りにくいでしょう？」十夜は言った。

（助けてもらったけど、私はまだこの人たちの素生を知らない。だけど、この人たちなら奪おうと思えば、すぐに奪えるだろうし……どのみち、今の私はこの人たちを信じるしかない……）

佳世は十夜に包みを渡した。

しばらくして、佳世と十夜は後から追いついた十真と合流していた。

月夜の中、佳世たちは崖沿いの道を歩いていた。左手の崖から下は森が広がり、柵といえ、ところどころに古い時代に作られたと思われる錆びた柵の残骸があるのみだった。

こういった道の傍には、遺跡が近くにあることを佳世は知っていた。だが、それらしいものは今のところ見つかっていない。

「もう敵は追ってこないよ」十真は言った。

「十真、足は大丈夫なの？」十夜は十真の足を心配そうに見た。

「ん、何とか大丈夫だよ……全力で走るのはきついけど、櫛たちとの合流地点まであと少しだし、頑張る」

「くし、たち……？」佳世は言った。

「櫛と官兵衛がね、この先で待つてるんだよ。二人とも人間だけど、櫛は十夜と私のお姉さんって感じかな。子供のころからずっと一緒だし。官兵衛はね、頼れるお兄さん……？　ん？　おじさん？」

佳世の方が困った顔をしていた。

「おじさんにしょ」十夜は笑いながら話をまとめた。

峠にさしかかった時、佳世は高さ一〇メートルはあるかと思われる建造物を前方に見つけた。それはまるで柵だけを残した扉のようだった。

「あの扉の無い大きな門は、天罪門と言って制裁者が私たちを裁くために、その門から軍隊を送ってくるんだって」十真は言った。

「本当かどうか疑わしいけど、一〇〇〇年前に、その制裁者が何千もの軍隊を引き連れて、とある国を滅ぼしたそうよ」

「あ、そのお話は聞いたことがあります。たしか、全国各地に同じような門がいくつもあって国が繁栄してくると、滅ぼしに現れるという伝説が明道記に書かれていますよね」十夜の説明に佳世が答えた。

「そうね、この辺の話は官兵衛が詳しいから、興味あれば会った時

に聞いてみると良いかもね。さあ、着いたわよ」十夜はそう言いながら、先を歩いて行った。十夜の向かっていた先には、焚火の明りに二つの人影があった。

「十夜、十真。二人とも無事だったか」

「遅いから心配していたのよ」

「ごめん、心配かけて。でもみんな大丈夫だよ」十真がそう言うと、二人は安堵した。

「それで、その可愛い嬢ちゃんは、どちら様かな？」大剣を岩場に置きながら、少し無精髭を生やした短髪の大柄な戦士は言った。

「本当、可愛らしいわね。どちらの国の侍女さまなのかしら？」

佳世は、いきなり身分を言い当てられたことに驚きを隠せなかったが、二人の方へ一歩、前へ出た。

「私はヒムカ国の王女、木沙羅さまの侍女で佳世と申します。あの、助けて頂いてありがとうございます」佳世は深々と頭を下げた。

「佳世と言うのね。私は櫛と言います。こちらは官兵衛。お互い、話したい事もあると思うけど、疲れたでしょう？　まずはお食事にでもしましょうか」櫛は笑顔で言った。「でも、食事の前に傷を治すから、十真は私のところに来て。佳世も念のため怪我などしていないか診るから、こちらにいらつしやい」

十夜は剣と盾を岩場に置きに行く。岩場には大剣以外にも、弓矢と長巻きが置かれていた。

「料理はできているし、水もたくさんあるぞ。十夜、手伝ってくれ」官兵衛と十夜は、櫛の木で作られた皿に料理を盛りつけていった。

4

食事をとった後、佳世たちは焚火のまわりを囲むように岩や草むらに腰かけていた。

「三五〇〇年前か……なるほど。月のカムイ、キアラは天と地が一

〇〇年後、迎えに来ると……そんなことを言っていたか」佳世が話し終わると、官兵衛が切り出した。

「はい」

「ふむ、カムイ地とは俺のことだ」

官兵衛の突然の発言に、佳世は目を丸くした。

「それでは、もしかして櫛さんが天ですか？ さっき、傷を癒した力だって……」

「いや、確かに櫛もカムイだが天ではない。天は見つかってもいいし、初めからどこにいるかもわからない」

「え？ 初めからいないとは、どういうことですか？」

「順を追って説明しようか」そう言うと官兵衛は水を一口飲み、「まず佳世が今、手にしている光明ノ書だが、それが何かは知っているかな？」

「人々に幸福と繁栄、奇跡をもたらすものと聞いています。また永遠の命をもたらすと」

「それは、後世の人間が書いた本の受け売りだ。実際は違う。こいつには、三五〇〇年前までに人類が発明した技術や文明知識が詰まっている」

佳世には何を言っているのか、さっぱりわからなかった。

「わかりやすく言えば、そいつには何千、何百万もの本が入っているんだ。そして、カムイと社があれば好きな本を取り出していつでも読む事ができる」

「そうなのですか……全く知りませんでした」明道記をはじめ、今まで読んできた本の内容と事実の違いの大きさに、佳世は啞然とした。

「それはそうだろう。およそ三五〇〇年前からその後、数百年の間に地球上にあるほとんどの建築物は崩壊し、人類は築き上げてきた文明を失ってしまった。だから、その時代の記録が残っていないのは当然といえば、当然だな」

「次はカムイだ。これも簡単に説明するとカムイというのは、書を

危険人物や敵対する国家などから守ったり、書の知識を伝えるのが主な役目だ。この役目を担うカムイのことを伝道者と呼ぶ。カムイは書を守るために、人とは異なる能力を施されてはいるが、あくまで人間だ。死んだらそれまでだし、普通の人より回復は早いが病気や怪我もする」

佳世はその話を聞いて、キアラが背中に深い傷を負っていたにも関わらず、一週間ほどで回復していたのを思い出していた。官兵衛が話を続ける。

「そして、カムイには審判者、滅罪者と呼ばれる伝道者を監視する者もいる。審判者と滅罪者の違いは今には気にしなくていい。まあ、審判者が天で滅罪者が地というわけだ。ここまではいいかな？」官兵衛はここで、一旦、話を区切ると水をぐいぐいと飲みほした。

佳世は頭の中で整理すると頷いた。

「よしよし。これでやっと質問に答えられるわけだ。続けるぞ」

少し間をおいて、「およそ三五〇〇年前に起きた戦争をきっかけに、文明知識が失われるのを恐れた人類は、書を作りカムイを生み出した。そして、一〇〇年後にカムイと書を復活させることで、人類の歴史が巻き戻るのを防ごうとしたわけだ」

佳世は頷いた。

「たしかに俺は一〇〇年後、目覚めた。しかし、天のカムイはいつまで待っても現れなかった。そこで俺は天の社へ向かい、カムイ、柊 将人を探した」

（柊……）

「そこでわかった事は、彼は最初から眠りにつかずに、どこかに行方をくらませたということだった。彼が何を考え、どうしてそのような行動をとったのかはわからない。その後、俺は天を探し続けながら月や太陽など社を廻ったが、どの社も鍵が消え復活させることができなかった。しかし、それは当然と言えた。なぜなら書を守るため誰かによって、鍵が持ち出された可能性はある。それに、一〇〇年経っても戦争は続いていたらからな。むしろ、一〇〇年後の方が

ひどかった……この頃になると、様々な人工種も現れるようになり、戦乱に乗じて盗られた可能性もある」

「人工種……？」佳世は言った。

「人工種とは十夜や十真、鬼たちのことだな。カムイと同じ技術で生まれた、おもに戦闘に特化した人間のことだ」

「そうだったのですね。本にはただ一括りに妖怪と書かれているだけで、その生い立ちは全く知りませんでした」

官兵衛は、そうだな、と相づちを打った。

「話がそれってしまったが、カムイと書について、わかってもらえたかな？」

「はい。そうすると、今までのお話から官兵衛さんたちは、今も天のカムイと鍵を探し続けているのですか？」

「まあ、そういうことになるかな」

「……？」佳世はどこか釈然としなかった。

「俺たちは、どの国に属することもなく旅を続けている。旅の目的は、佳世が質問した内容も目的の一つと言えるかもしれない。しかし、本来の目的は別にある」

「本来の目的……」

「そうだ。それじゃあ、今度は俺が佳世に質問しよう」

「はい」

「佳世は、書を手に入れたら何をしたい？」

「え……？」

「何のために使いたい？」

佳世は今まで考えもしなかった問いかけに答えられないでいた。

「訊き方を変えようか？例えば、ヒルコが書を手に入れたら、何をするだろうか？何のために使うだろうか？」

「それは、過去の文明の力を復活させて、三五〇〇年前のように国を繁栄させることでしょうか……」

「じゃあ、テナイならどうしていただろうか？他の人間は？」

官兵衛が言わんとしていることが、何となく分かってくる。

「もしかして、私たち人間がこれからどう歩んで行けば良いか見定めようとしている。それが本来の目的でしょうか？」

話を聞いていた全員、驚いた様子で佳世を見つめた。

「そうだ。よく気付いたな。世の中には、色々な考えを持ったやつがいる。古代文明を復活させ力を得ようとする者。これは二二ギヤヒルコなんかが当てはまるな。逆に古代文明の力を頼らずに現状を受け入れ、今のまま生きようとする者。これは雛国のテナイがそうだろう。他にも書に頼らず自分の力で文明を発展させようと考えている者もいる」

官兵衛はここで一呼吸入れ、

「そして、書の復活や文明の発展を阻止しようと考えている者もいる」

「制裁者……」佳世は天罪門を思い出していた。

「そうだ。まあ、制裁者に関しては、今はいいだろう。俺が言いたいののは、人類は過去、自らの文明を滅ぼしてしまった。そして、今一度、歴史を再び歩み始めようとしている。二度と失敗しないためにもどう進むべきか、カムイとして、一人の人間として見定めたいと思っている。無謀なのかもしれんがね」

焚火の燃える音、虫の音、草木の揺れる音だけが聞こえる。

「話が長くなってしまったな。今日はもう遅いし、そろそろ寝るとしようか」官兵衛は言った。

佳世は草むらの上に敷いた布の上に横たわっていた。

櫛の笛の音が聞こえてくる。佳世は目を閉じた。身体が沈むように重い。

今日はたくさんの事が起こり過ぎて、今はもうただ子犬のようにひたすら眠りたかった。しかし、そんな心配をしなくとも笛の音が遠のき、すぐにその瞬間は訪れた。

焚火の炎がゆらりと揺れる。

深い眠りにについている佳世を除いて、少し離れた場所で官兵衛たちは岩場に腰かけていた。皆が官兵衛を見ていた。

「あの子はカムイだ。間違いない……」官兵衛は言った。

「でもあの子、能力は無い感じだったよ」十真は十夜と目を合わせながら答えた。

「そうね、私が十真の治癒を施している時も、初めて能力を目にするような顔をしていたわ……」櫛も人差し指を顎にちょこんとせながら言った。

「だけど間違いない。俺の能力は知っているだろう？ 今日も城に侵入していた時、上階の方に存在を感じていた」

「そういえば官兵衛、言っていたわね。『もしかするとこの気配は、月のカムイかもしれない』って」櫛は言った。

「そうだな。だが、城で感じた気配と佳世の気配は同じだった」

「ということは、城にいたのは月のカムイでは無かった……じゃあ、彼女は一体、何者なの？」十夜は佳世を見た。

「能力を見てみないことには、なんとも言えない。それにしばらくの間、このことは本人に黙っておこうと思うんだが、みんなはどうかな？」

反対する者はいなかった。話がまとまると全員、眠りについた。

5

気づくと佳世は、燃えさかる炎に囲まれていた。

じっとしていれば焼け死んでしまいそうなほど、炎の勢いは激しかった。

佳世は走った。あちこちから泣き声や悲鳴が聞こえる。

こ……だ……。

ばちばちと焼け崩れる音にまぎれ、誰かを呼ぶ声が聞こえる。

こ……だ……ま……。

見えない誰かは誰かをもう一度、呼んだ。

こだま。

今度は、はつきり聞こえた。こだまという人を探しているようだった。

佳世は声のする方へと歩いた。

いつの間にか紅蓮の炎は雨にかき消され、黒い地面から灰色の煙が立ち昇っていた。

ずぶ濡れになりながら、佳世は誰かの前に立っていた。目の前の誰かは、仰向けに倒れていた。

こだま。

目の前の誰かは誰かを呼んだ。

佳世は倒れている目の前の誰かの手を握った。知っている大きな手だった。

こだま。

懐かしかった……。

こだま……。

悲しかった……。

こだま……。

悔しかった……。

か……よ……。

佳世。

「佳世！」

佳世は目を開けると、陽は高く昇り緑草が頬を撫でていた。

「佳世、すごく疲れていたんだね。起きれる？」朝の陽光を浴びて白銀のような淡い栗色のような十真の髪が、佳世の目覚めを祝福する。

佳世は十真の顔をじっと見つめ、次に自分の手に視線を移して何かを思い出そうとした。

ふと昨晚のことを思い出すと、佳世は起き上がり挨拶を交わした。「大丈夫そうだね。今日もたくさん歩くと思うから、しっかり食べ

ないよね」そう言うと、十真は食事の準備をしている十夜と櫛の所へ小走りで走り去った。少し離れた所で官兵衛が火をおこしていた。なんとなく、気が重い。

朝食の時間、一足先に食べ終えた官兵衛が話を切り出した。

「追手から逃れるためにも、八国の地を離れ、長州五国に向かおうと思う」

「それが賢明のようね。もう狗奴が伊都の支配下に置かれるのは時間の問題。長州五国の方へ行けば、木沙羅王女に会えるかもしれないわね」櫛は言った。全員が櫛の言葉に頷いた。

「佳世。これからの旅はきつと長くなる。でも、木沙羅王女やキアラに会えると良いな」官兵衛は言った。

「はい、早く昔のように一緒に暮らしたいです」本心だった。昨晚は、カムイや世界のことで頭の中はいっぱいだったが、佳世は何よりも木沙羅に早く会いたかった。早く会って、心の底から一緒に笑い合いたい。

食事を終え、すべての準備を整えると一同は出発した。

「ねえねえ、佳世は長州五国は行ったことあるのかな？」十真が後ろから、佳世の顔を覗き込む。

「いえ、ありません……どんな所なのですか？」佳世の両隣りに十夜と十真が並ぶ。

「美味しいものがたくさん、あるのよね。ちょっと楽しみ」十夜の目は、すでに何かを狙っているように見えた。一瞬、ばさつと翼が開いて閉じた。

「佳世」佳世の肩に手をおきながら、十真は見つめる。

「……はい」佳世は十真をちらつと見るが、すぐにまた俯きながら前を向いた。

「元気、出しなよ。大丈夫だよ！絶対、木沙羅王女に会えるし、キアラっていうカムイにも会えるよ」

「そうね。私たちもいるし、元気だして行きましょうね」十夜は言った。

「あれ？ 十夜、今のお姉さんみたい」

「みたいじゃなくて、実際、あなたのお姉さんでしょ」十夜が十真の頬に人差し指を押し付ける。

佳世は十真を見ると、手の甲を口にあて、くすつと笑った。

十真も「ははっ」と苦笑いした。十夜も笑う。

「ありがとうございます。でも、大丈夫です」佳世は片腕を上げ自分の顔の前で拳を握ると、「こう見えても、私はいつまでも落ち込むような子ではありません」と、元気よく答えた。

「佳世……そうだね！ でも、さみしくなったり辛くなったらいつでも言ってね」十夜は佳世の頭を優しく撫でた。

「はい。ありがとうございます」

佳世と十夜がいい雰囲気話している間、十真は瞳を潤ませていた。

その様子に気付いた十夜が、「十真、どうしたの？」と訊いてみる。

返事がない。もう一度。

「十真？」

「……いい」

「ん？」

「かわいい」

「……？」佳世も十真を見た……少し嫌な予感がした。

「なんて健気なんだろ、ああもう！ 可愛いなあ佳世は！」

「わっ」翼を大きく広げた十真に抱きつかれ佳世は頬を赤らめた。

「ちよつと、十真さん……恥ずかしいです」

しかし、十真はぎゅつと抱きしめた腕を離さない。頬を擦り寄せてくる。城の中で、こんな風に人と接することなんてなかった。なんとなく照れくさい。

「十夜さん、見ていないで助けてください」

十夜は、ぱたぱたと翼を動かしていた。

「あれ？ 十夜さん、もしかして楽しんでますか？」

「これから賑やかになりそうね」前を楽しそうに歩く三人を見ながら櫛は言った。

「まったくだ」

ふん、と腰に手を当て鼻息を鳴らしながら、官兵衛は目を細めた。官兵衛の横顔を楽しそうに覗き込んでいる櫛に気付くと、官兵衛は目をそらして咳払いをした。

「長州五国は遠いな……」

「まったくね」

櫛は後ろに手を組みながら、くすつと微笑んだ。

覚醒

1

八国地方の村久野国と長州五国地方の綾羅木国は、海峡を挟んで西と東に隣接している。その海峡の名前は関門海峡と呼ばれ、旧時代の名前がそのまま使われていた。

海上はもちろんのこと、陸上交通も整備され、旧時代から使われ続けている橋梁「綾村大橋」によって互いの国はつながっている。

両国は長年の同盟関係によって、交易も盛んで他国との大きな争いも無く内政は安定していた。

佳世たち一行が狗奴国を出発してから一か月。

一行は綾村大橋を渡り、綾羅木国に入っていた。

「うう……、今日も、王女たちの手掛かりはなしか……」

重苦しそうに官兵衛は言った。

武具や食器、寝装具など旅道具一式を背中に担いでいた。自分の武器だけでなく櫛の長巻きや杖、十真の弓といった大型の装備品を持つのも彼の役目である。なぜだか、わからないがいつの間にか、そうなっている。

どこでこうなった？

「そうだ！　ねえ、官兵衛。櫛」

十真が前を歩く二人に声をかける。

「ん？」

官兵衛が少し疲れた面持ちで後ろを振り向いた。

「なあに？　その顔？　それじゃ、まるで私たちが『赤間竜宮』に寄って行くのに反対しているみたいだよ」

「赤間……、え？　いやいやいや、そんなの初めて聞いたぞ」

「あ、それいいかも」

官兵衛の辟易した横顔をよそに、女性陣は賛同していた。

官兵衛は、ふう、とため息をつく。佳世を見てから、

「仕方ないな。すぐそこだし、もしかすると木沙羅王女とキアラに会えるかもしれないしな。うし、行ってみるか」

女性陣が元氣よく歩きだす。

追い抜かれざま、官兵衛は一人一人に声をかけるように言った。

できるだけ失礼のないように　彼なりに。

「そうだ。少しの間だけでも、自分の荷物を持ってみないか？」

佳世だけが心配そうに振り向いてくれた。しかし、佳世の両腕には梟の手が絡みつき、官兵衛との距離は遠のいていくばかりだった。

赤間竜宮は、綾村大橋からそれほど離れていない場所にある神社だった。歴史ある建造物でもあり、それは旧時代にまで遡ることができる。

白壁に朱塗りの大きな門が一行を出迎える。

門をくぐり手口を清め、人が行き交う中、本殿へと続く階段を昇る。朱塗りの大きな鳥居が見えてくる。

昇りきると境内が四方に広がり、旅人や行商人など多くの人で賑わっていた。

「人でいっぱいですね」

「ここは、参拝以外にも旅人や商人の情報交換の場だったり、商いの場だったりするからね」

珍しそうに辺りを見回している佳世に、十夜が答える。

「俺は情報を集めてくるから、みんなは先に行つててくれ」

「わかったわ。じゃあ、私たちは参拝してから願掛けに行きましよう」

そう言つて、櫛は皆を連れ官兵衛と別れた。

夕暮れ近い空に、蝉の鳴き声が境内に響き渡っていた。

「すごい絵馬の数ですね。それに絵馬と一緒に色々と結び付けているものがありますね。これは何ですか？」

「これは無事に旅から帰ってこれますように、そして、大切な人と再びこの場所で会えますように、って自分の大切なものを絵馬と一緒に結び付けているんだよ」

佳世の問いに十真が答える。

「それにね、この絵馬を見て」十真に続いて、十夜が二枚一組になっっている絵馬を指差す。

佳世が手にとって見ると、一枚は無事に旅から帰って来て欲しいという願いが書かれたものだった。そして、もう一枚にはそれに対する返事が書かれていた。

「ここに結び付けられた絵馬はね、ずっと残るの。再会を果たすまでね。今見た二枚の絵馬のように、たとえお互いこの地の人でなくとも、ここに来れば帰ってきた事が確認できるから、伝言の代わりとして使われていたりもするわね」

「そうなんですね」

櫛を見てそう答えると、佳世は他の絵馬を熱心に見始めた。

櫛、十夜、十真の三人はしばらくの間、佳世の様子を見ていたが、目を合わせると、

「佳世……」

不意に背後から両肩に手を置かれ、甘い香りが鼻腔をくすぐる。

佳世が見上げると、櫛が微笑んでいた。

そして佳世を挟むようにして、十夜と十真の二人が熱心に絵馬を見ていた。

櫛は、にこやかに言った。

「私たちも王女の絵馬を探すわね」

しばらくして、

「やはり、見つからなかったですね。うまい話って、そうあるものじゃないですよ」

「でも、何もしなかったより良かったと思うよ」

「はい。それに無ければ、私が絵馬を奉納すれば良いだけ」

そう言つて、佳世は絵馬に祈願の内容と日付け、名前を書き入れていく。

書き終えると、佳世は髪を結ぶための紐を手を取った。

「紐？ 紐なんかどうするの？」

佳世は少し照れたように十真に微笑むと、腰のあたりまで伸びた髪を手で束ね紐で括る。

そして、

護身用の小刀を手につくと髪をばさつと切り落とした。切り落とされた髪束の長さは佳世の手の大きさほどだった。

三人は驚いた。しかし、佳世の真剣な眼差しを見ると何も言えず、ただ見守るしかなかった。

佳世は髪束を絵馬に結び付け、奉納した。

佳世は絵馬をじつと見つめていた。その後ろに三人が立ち並ぶ。

櫛は佳世の両肩に手をのせると、

「会えると、いいわね」

「櫛さん……」

「あとで、揃えてあげるわね」櫛は佳世の髪の毛先を撫でた。

2

一行は赤間竜宮を離れ、海沿いの大きな街道を歩いていた。

街道は海と緑豊かな山に挟まれ、人、鬼、天狗といった様々な人、荷馬車などが行き交い賑わっていた。

官兵衛が言うには、このあたりの景色は江戸時代の絵巻物に描かれている風景に近いものがあるとのことだった。ただ、佳世にはそれがどういった感じのものなのか、わからなかった。この時代、残っている最も古い文献は一〇〇〇年前のものである。

「もうそろそろ、今日の宿を決めないかね」

両腕を軽く振りながら、櫛の軽快な声。

「そうだな。なんと言つても、早くこの荷物を……」

「頑張つてね」

「……」官兵衛は愛情に満ちた櫛の笑顔を見つめた……が、なぜか心に響くものが何もなくった。

すると、目の前に通り過ぎて行く一台の荷馬車　心に響くものがあつた。

更に道なりに沿って進むと、林の方からひぐらしの声が聞こえてくる。

官兵衛と櫛の後ろでは、佳世を挟むようにして十夜と十真が海を見ながら歩いてた。

「海といえば、佳世は聞いたことある？　海の向こうの話しなんだけど」十真は言った。

「海の向こうの話ですか？　どういったものなのですか？」

「官兵衛の話では昔、日本と呼ばれる一つの大きな国だった時代、日本以外にも世界にはたくさんの国があつたんだって」

「初めて聞きました。海の向こうかぁ」興味深そうに海を見つめる。

「だけど、今は誰も海の向こうに行けないんだって」

「どうということなのでしょう？」

「どこまで行っても果てしなく、海は続くばかりで、陸地に辿り着けた人はいないらしいよ。しかも不思議なのは何日もかけて船を走らせたはずなのに、なぜか帰りは一日か二日しか、かからないんだって」

「不思議な話ですね。でもそうすると、この国は閉じ込められているみたいですよ」

「それが佳世の言うとおりなんだよね。官兵衛が言うには三五〇〇年前にそうならしいけど」

「私たちの国しかないなんて、なんか寂しいですね。世界があるのなら他の国も見たい気がします」

道のいたる所で行商人が荷台の上に魚、果物、団子といった食べ

物や履き物を並べ、道行く人に声をかけていた。

佳世は通り過ぎていく人の足元を見た。

佳世たちと同じように革製の靴を履いている者はほとんどなく、多くが草履やわらじを履いていた。

あきらかに佳世たちの格好は裕福な部類に属していた。

城で暮らしていた時、佳世は庶民の暮らしはかなり質素なものと聞いていた。しかし、目の前の人々は活気にあふれ、とにかく笑っている印象が強い。

質素で貧しくとも、明るく前向きに暮らしている姿に佳世は元気づけられる思いだった。

佳世にはもう一つ気付いた事があった。時々、すれ違う若い天狗の男たちの事だ。彼らはすれ違いざま、十夜と十真をちらちらと見ていた。どうやら、顔だけでなく翼も見ているようだった。同じ天狗と言っても、十夜たちの真っ白に透き通った雪のような翼を持った者はいない。誰の目から見ても十夜と十真の翼は、彼らと見比べても立派だった。

佳世は思った。恐らく天狗にとって、翼は魅力の一つなんだろう。そのような様子を眺めながら更に道を進むと、やがて大きな島が右手に見えてきた。

「あの島は何ですか？ 人が住んでいそうですけど」五〇〇メートルほど先に見える島を指差しながら、佳世が尋ねた。

「あの島は田霧島ね。たしか、あの島は大規模な遺跡があって発掘が盛んに行われてるんだって。でもね……」

十夜がそう答えたところで、

「あの島には誰も近づかないよ。あそこは罪人と奴隷しかいない。あの島は呪われてるさね」

そう答えたのは見知らぬ中年の女性だった。後ろ髪を結いあげ、着物を着たその女性は、自分は宿屋の女将であると言い、すぐ後ろに建っている木造二階建ての大きな宿屋を指差した。

「田霧村……」櫛は小声で言った。

「おや、あんた村のこと知ってるのかい？」

「いえ……名前だけは聞いたことがあります」

「ほう、そうかい。とにかく、ここは観光地としては景色も良くてね。温泉もあつていいんだけどねえ。あそこは物騒さね」

女将は相手を気遣う様子もなく、はきはきと話し続ける。

「そうそう、あんたがた宿を探してるんだろ？　ウチを使いなよ。最近、この辺も物騒になつてね。人がさらわれるって話だよ。なんでも、あの島に奴隷として連れて行かれるってさ。特に、あんたみたいな子がね」

佳世は少し怯えた様子で十真の背後に隠れた。

「女将、あんまりウチの子を脅かさないでくれよ。それで、その話は本当なのか？」

「おお、これはすまないね。脅かすつもりは無かった。話は本当だよ。つい先日も近くで旅の若い娘が行方不明になつて見つからずじまいさね。とにかく、昼夜関係なく一人で出歩かない方がいいよ。ウチの宿にいれば安心さね。旨い酒に近海でとれた海の幸も用意してるよ」

「どうする？　櫛」官兵衛が無精髭をさすりながら、問いかける。

櫛は佳世を見た。佳世はこういつた話が苦手なのか、早くどこか安心できる場所に行きたそうだった。

「今日は、ここにお世話になりましたようか？」櫛は後ろの女性三人を見た。

「私はいいよ。佳世は？」十真の問いかけに、「はい、大丈夫です」と佳世は答えた。

何が大丈夫なのだろうと思いつつ、十真は十夜にあなたはどのような、と問うように目線を送る。

「ね、あなごつてあるのかな。美味しいよね」十夜はすでに泊まる気だった。

「よし、じゃあ決まりだな。今日はここにしよう。十真の好きな酒もたくさんありそうだしな」

「失礼だなあ。官兵衛に言われたくないよ。佳世も飲むよね？」

「まあ、ほんの少しなら……」

「みんな、ほどほどにね」櫛は優しく微笑みながら言った。

「どうやら、話がついたようだね。それじゃご案内さね。さあさあ！ 五名様ご案内だよー！」

その晩、佳世たちはゆっくり体を休めた。

翌朝。

一行はテーブルを囲んで脚を崩しながら、食後の一時を過ごしていた。二階角部屋の窓から入ってくる風が清々しい。

「昨日の夜も話したが今日、俺と櫛は馬車を見に行く」

「私たちは木沙羅王女とキアラの搜索ね」十真は十夜の顔を見る。

「佳世、一人になるけど、昨日の女将さんが言っていたように、宿にいてもらうのが最も安全だと思うの。夕方前には十夜と十真も帰ってくるしね」櫛は言った。

「はい。私は外に出ないよう気をつけますので、皆さん安心して行ってくるください」

皆を送り出した後、佳世は一人で部屋に残って窓から外を眺めていた。

油蝉がひとしきり鳴いている中、街道は今日も賑わっていた。この様子だと一人で外出しても大丈夫かな、と出歩きたい衝動に少し駆られたが約束を優先することにした。

「おや、佳世ちゃん一人かい？」振り向くと部屋に入ってきたのは、女将だった。

佳世が他の者は外出していることを話すと、

「そうなんだね。一人で留守番は寂しいだろうから、他の部屋の掃除も終わったら、あとでお茶とお菓子を持ってきてあげるよ。そうそう、お菓子なんだけだね。この辺りでもめったに手に入らない『西都』のお菓子があるんだよ。みんなには内緒だよ」

佳世がお礼を言うと、女将は部屋を出て行った。

佳世はもう一度、外を見た。街道の先、少し離れた所に島が見える。

「田霧島……」

改めて見ると、島全体が森に覆われているようだった。だが、あきらかに人が住んでいる事は明白だった。なぜなら、昨日もそうだったが、白煙と黒煙が何本も立ち昇っていたからだ。恐らく、遺跡の発掘に関係しているのだろう。

佳世は光明ノ書を手にして、木沙羅とキアラのことを考える。

（今、どこにいるの？ 早く会いたい……）

佳世が物思いに耽っていると、いつの間にか時間が経っていたらしい。

「佳世ちゃん、いるかい？ お菓子を持って来たさね」女将がお茶とお菓子を持って部屋に入ってきた。「ほらほら、早くこつちに来るさね」

佳世は書を懐に入れ女将の所へ行くと、座布団の上に座り足を崩した。

「はい、どうぞ。まずはじめに、お菓子を食べてみると良いさね。その後にお茶を飲むと格別なんだよ」

「そうなんですネ。美味しそう。十夜さんたちにも食べさせたかったな」

三日月のような目を浮かべながら、竹へらでお菓子を切って口に運ぶ。

「どうだい？」

「甘いし、さわやかですね」

「そうだろう？ 佳世ちゃんに喜んでもらえて良かったさね。さ、お茶をどうぞ」

そう言って女将は、佳世の目の前に置かれたお茶に手を伸ばし、差し出す。

「……いただきます」

佳世は戸惑いながらもお茶を口に運ぶ。甘くなった喉を潤している。

「……？　どうかしましたか？」

佳世はじつと見ている女将に気付くと、照れくさそうに言った。

「いや、あまりにも美味しそうに食べているからね。ついつい、見とれとつたさね」

「そうな……んです……か……」

佳世は強烈な眠気を感じた。目眩もする。女将が何か言っているみたいだが、声は遠のくばかりだった。

湯のみがテーブルに転がり、テーブルの上で行き場を失った茶の湯が床へ雫を垂らす。

女将は佳世の頬をぺちぺちと叩いた。

「眠っちまったさね。さあ、早く連れて行きな」

入り口から男が黙って入ってくる。男は佳世を抱きかかえると、すぐさま部屋の外へと消えた。

男が立ち去ると、女将はテーブルの上を拭いて、お菓子と湯のみを盆にのせ部屋を出て行った。

3

佳世は夢を見ていた。あの晩と同じ夢。

しかし、夢は強制的に中断されてしまった。

誰かに身体を揺さぶられて、佳世は目を覚ました。

目の前に見知らぬ男の顔があった。男は佳世が起きた事を確認すると、佳世の視界から消えた。

佳世は土まみれの床に横たわっていた。石畳のような床はひんやりとして冷たかった。

顔を手で拭いながら上半身を起こし、周りを見渡すと数メートル離れた所に、男が数人並んで立っていた。男たちは皆、みすばらし

い格好をしていた。

佳世はその男たちに違和感を覚えた。なぜならその男たちは皆、目の部分を覆った黒い仮面をつけていたからだ。仮面の中央には白い文字が大きく描かれていた。ある者には【一】、別の者には【二】や【六】といった数字が。その他にも【重】や【死】が描かれていた。最も奇妙だったのはその仮面には目の穴が無かった。

彼らは見えているのだろうか。佳世がそう考えた時。
ぎよつとした。

全員が佳世を見ていた。顔を向けていたと言った方が正確な表現かもしれないが、確かに彼らは佳世を見ている。

周囲の静けさと暗さも相まって、恐怖が体の中を蹂躪していた。心臓が高鳴っていく。

しかし、それ以上のことは何も起こらず、すぐに男たちは佳世から目を外すと前に向き直った。

佳世は、ほつとして気を取り直すと再び、周りを見渡した。
男たちの後ろには、この場所を取り囲むようにして崩れた壁が並んでいた。壁の向こうに竹林が見える。

ここは昔、何かの部屋だったのだろうか。
上を見ると天井は無く木々が空まで伸びていた。その先には遠く夕暮れの空があった。

陽の光が差し込まないこの場所は、薄暗く寂しい雰囲気醸し出していた。笹の葉がこすれ合い、油蟬に混じって寄せては打ち返す波のように、ひぐらしが鳴いていた。

後ろを振り返ると、鳥居が立っていた。つたや土にまみれた壁と見比べても、その鳥居は最近になって建てられたものようだった。佳世は思った。ここは何か儀式をするための場所であると。
首筋から胸の谷間へと冷たい汗が、一滴また一滴と伝っていくのがわかる。

早くこの場所から立ち去りたかった。

「目を覚ましたか？」

硬直。

佳世は振り向いた。

いなかったはずの場所に、初老の男が立っていた。

「わしはバド。ここは田霧村、と言えばわかるかな？ わしはこの

村の長をしておる」

白髪交じりの髭が揺れ動く。

「田霧村……じゃ、私はあの人に騙されて……」

「あの宿の女将のことか。そうだな。だが、そんなことはどうでもよい。ぬしはここで一生、奴隷として生きることになるのだからな」
そう言つとバドは、懷から何かを取り出す。

「っ！」

それは佳世が持っていた光明ノ書だった。

「これをどうして持っている？ ぬしは八国の者であらう？ 正直に話せ。ここで嘘を言つても何もならんぞ」

佳世は疑いの目でバドを見たが、抵抗は無駄と悟つたのか、

「それは月のカムイ様のものです。捕まっていたカムイ様に代わつて、私が狗奴国から取り返しました。どうぞ、返してください」

「月のカムイ……そうか、ならばこれは光明ノ書だな。八国争乱の話は本当のようだな。すると、ぬしはヒム力の王女か？」

「いえ……私は……」

「私は？ どうした？」バドが問い詰める。

「その子はヒム力の侍女ね」

佳世は驚いて声のした方を振り向いた。声に驚いたのではない。

（櫛、さん……？）

「麗か……」

「私も同席してよろしいかしら？」

何のとまどいもなく、身分を言い当てられたせいかもしれないが、佳世はその場に櫛がいるような錯覚を覚えた。それほどまでに、麗の雰囲気は櫛に似たものがあつた。

しかし、容姿は櫛のそれとは違っていた。絹のように滑らかな金色の髪と透明感のある翡翠色の大きな瞳が可憐さを演出している。櫛を初めて目にした時もそうであったが、麗の美しさは一度目にしたら、忘れることができないほどの輝きを放っていた。

「かまわん。それで、ぬしはヒム力の侍女なのか？」麗はバドの隣に立った。

「……はい」

「ならば、月のカムイと王女はどこにいる？」

「わかりません」

「名前は？」

「佳世です」

「姓は？」

「……みさとむらさきです」

「聞かない姓だな。漢字でどう書く？」佳世は、差し出された紙に書いた。

「美郷紫 佳世か。ところで、ぬしは今まで何をしていた？ 王女を探していたのか？」

「そうです……あの……」

「何だ？」

「私はここにいない必要も理由がありません。みんなの所へ帰してください」

「理由？ ぬしは奴隷として売られたのだ。だから、ここにいます」

「それにぬしは書を持っていた。これは大罪に値する」

「それは違う！ さつきから、あなたは勝手なことを言っています」

「ぬしは気が強く賢そうだ。だが、周りをよく見よ。自分の置かれている状況を見失っては命がいくらあっても足りんぞ」

佳世は唇を噛みしめた。

「話を続けようか。あの卑しい女将の話では、ぬしには連れがいるな。天狗の女が二人。少し年齢の高い男が一人。そして、背の高い美しい女が一人と聞いている。天狗はいい。残り二人はカムイか？

男は地のカムイではないのか？」

「女の名は櫛と言いませんか？」

佳世は確信した。明らかにこの二人はこちらの素生を知っているようだった。

バドは尋ねているのではない　確認している。

「ぬし、『なぜ、そのような事を知っているのか？』って顔をしているぞ」

バドは一旦、目を閉じてから口を開いた。

「制裁者」

「え？」

「わしらは、制裁者だ。制裁者のことは何か聞いているか？　地のカムイや櫛は何か言っていなかったか？」

「……いえ……何も」

「まあ、そうだろうな。ぬしが知っている事といえば、せいぜい明道記に書かれている事であろう。だが、あれに書かれている事は間違っておる」

（まただ。また間違っている……官兵衛さんもそう言っていた……いったい過去に何があったの？）

バドは話し始めた。

「かつて人類は、戦争によって自ら滅びを招いた。それが三五〇〇年前だ。制裁者の当時の役目は、戦争を終わらせることだった。そして、制裁者は終わらせることに成功した。力でもってな」バドは一呼吸入れた。「戦争が終わった時、書を残して人類は何もかも失っていた。人類が再び同じ道を歩まないよう、制裁者はある手段を講じることにした。それは絶対的な力による制御。力によって、地上の文明が発展していくのを抑え込んだ」

「そうして一〇〇〇年前、国を滅ぼした？」佳世は言った。

「明道記か。違うな。滅ぼしたのではない。わしらは脅威を取り除いたのだ」

「脅威……？」

「一〇〇〇年前、弓や剣しか持っていなかった人間がある日、書を手に入れた。だが、彼らは書からは何も学ぼうとしなかった。一部を除いてな」

「……」

「彼らが書から学んだもの……それは遺跡から掘り起こした古の武器と道具の使い方だった。より大きな富と力を求め、彼らは軍事力を急速に発達、強大化させて行った。そして他国を侵略し、古の道具を使い国を大きくしていった。たしかに国は豊かになった。しかし、その豊かさは支配者のものだった。彼らはそれを文明発展と言った」

バドは佳世の目を見た。「これが、何を意味するかわかるか？」

佳世は何も言えなかった。

「彼らもまた滅びの道を歩み始めたのだ」

「我々は学んだ……人類は書を手に入れても滅びの道を選ぶと。だから、わしらは脅威となる者を排除した」

「わからない……」

「何がだね？」

「人が書を求めることは、わかりきっていたはず。だけどなぜ、そのまま手の届く所に置いていたのか」

「それは簡単なことだ。人は書を求めて常に争い続ける。そうならば、国は疲弊する。あとはどうなるかわかるだろう？」

「ますます、わからない。一体、何がしたいの？ たとえ、書が無くても文明は発展していくと思う。だけど、あなたたちはそれを否定するだけでなく、力で……命を奪うことで歴史そのものを支配しようとしている」

「その通りだよ！ よくわかったねえ！」バドは満面の笑みを浮かべ興奮したように言った。「人間は愚かだ。だから、わしら制裁者が直接、手をくだすことで滅びを事前に防がなければならない」

「なぜ、そう言い切れるの？ 発展したからといって滅ぶとは限らない。あなたたちは、そういった可能性まで捨てている」

「都合の良い解釈だ。わしらの使命は滅びを事前に防ぐこと。そのためには、どこかで線引きしないといけないだろう？」

「愚かな……」

「それは、ぬしの物差しで測ったゆえの発言だな。わしらから見れば、ぬしが否定していることに違和感を覚える」

「バド」麗が呼びかけると、バドは頷いた。

「話が長くなったな。これでわしら制裁者というものがわかっただろう。ぬしは賛同できぬようだがな」

「私にはあなた方の考えは、受け入れられない」

「佳世と言いましたか？」佳世は黙って麗を見た。

「あなたは知っているのかしら？ あなたと一緒にいる櫛は、私たちと同じ制裁者であることを」

「……え？」佳世は、「そんなはずはない」と付け足したかった。しかし驚きが勝る。

「櫛こそ制裁者の名にふさわしいカムイよ。彼女の力は一瞬で多くの命を奪えるのですから」

「嘘です！ 櫛さんはそんな力は持っていません。命を奪うなんて

……櫛さんは私の傷を癒してくれた……」

「また都合の良い解釈ですね。カムイの能力は一つだけではありませんよ。治癒能力は彼女の能力の一つにすぎません。彼女は滅ぼすために力を与えられた存在なのですよ」

佳世は信じられなかった。あの櫛が、そのような力を持っている事を。心が踏みにじられていくようだった。

だが、

「たとえ……そうだとしても、櫛さんはそんな非道なことはいしあなたたちとは違う」

麗とバドは一笑した。

「あなたは、どこまでもお人好しのようね。どうしたら会って間もない人に対して、そこまで信じることができるようになるのかしら？」

「それに、ぬしがそう信じていても櫛はどう思っているか、わかっているのか？ 櫛だけではない。ぬしの仲間全員、ぬしと同じような考えを持っているわけではないぞ」

「そんなことは……」

「決してないと言い切れるのか？ 木沙羅王女はどうだ？」

「な…… 木沙羅さまは関係ない！」

「いや、あるな。ぬしは王女と再会したいのであろう？ かつてのようになんかに暮らしたいと」

バドが言うことに間違いはなかった。佳世は拳を強く握り締めていた。

「ぬしに一つ忠告しておこう。今、ぬしが王女と再会できたとしても、決して王女は心の底から喜ばないだろう。一生、心の中のどこかに闇を抱え込むことになる」

「そんなことはない！ 私たちは家族のように暮らしてきた。会えば嬉しいに決まってる。あなたにそんな事、言われる筋合いはない！」

「今のぬしには何を言っても、理解できないだろう。話は終わりだ」「勝手なことを……」 佳世はバドを睨みつけた。

激昂した佳世をよそに、バドは平然として、「さて、はじめにも言ったが、ぬしは大罪を犯している」と言い、佳世の目の前に奇妙な形をした仮面を置いた。

その仮面は男たちがつけているものと似ていた。一見、スウェード調の黒い革生地のようなだが、見たことの無い素材だった。中央には、はみ出るくらい大きく【天】と白色で文字が描かれていた。目の穴は無かった。

「これは天罪ノ面。最も罪深き者につけられる仮面だ。この仮面をつけて無事に外せた者は一人。他はつけたと同時に、もしくは、一週間ともたず心の闇に蝕まれ死んだ。つけるつけないは、ぬしの自由ひとたびつけられ、王女の心に真の光が差し込むまで外れることはない。つけなければ、ぬしは永遠に王女の真意を知らぬまま一生を

過ごすことになる」

王女の心に真の光が差し込むまで外れることはない

佳世は油汗をかいていた。バドのこの言葉は、佳世の心を激しく揺さぶったからだ。まるで、佳世の心の奥底を見透かしているかのようだった。

（しっかりしろ。そんなものに頼る必要なんてない。木沙羅さまも会えば嬉しいに決まっている。当然ではないか）

そう、会えば……再会を果たした瞬間、嬉しさに決まっている……。

そうだ。決まっている……はずだ。だけど、……。

心の中で引つかかるものがあつた。
（会ったその後は？）

「ちなみに天罪ノ面をつけない場合は、別の仮面を用意している。まあ人間、知らないことの方が楽で幸せだな。それに、ぬしは可能性を信じているのだろう？　ここから出られる可能性を」

（くっ、……私の中に入り込むな！）

「さあ、選ぶんだ。逃げることは死を意味する」バドがそう言うのと、周りに立っていた男たちが短剣を手にした。

佳世は天罪ノ面をじっと見つめた。

（彼の言うことを信じていいのか……会った後……木沙羅さまとの再会を果たしたその後は……木沙羅さまの本当の想い……望み。私にとつて一人の家族。そして、それは木沙羅さまと同じ……私は……）

きつと同じはずだ……私は……。

仮面の両端を汗ばんだ手で掴む。

いつの間にかひぐらしの声は消え、油蟬の声に変わっていた。

十夜と十真、官兵衛と櫛が宿に戻ったのは夕方より少し前だった。ほぼ同時刻に戻った彼らは、佳世がいなことに気付くのにそれほど時間はかからなかった。

官兵衛と櫛は一階の玄関口にいた。

「女将、本当の事を言え」官兵衛は女将に詰め寄った。

「だから、知らないって言っているだろう！　なんで、あんたにそんな事、言われないといけないんだい？」

「部屋の床に睡眠薬の入った茶が染み込んでいたぞ。それに、こいつらが吐いた。十夜、十真！」

十夜と十真が二人の男の腕を掴みながら、廊下の角から現れた。

「あ、お前たち！？」

「まさか、宿の人間が人さらいをしているとはな。これが世間に知れてしまつてはもう、お天道さまも拝めねえな」

「くつ、わかつたよ。ただ、あいつらに言われていたんだ。あんたらのような五人組か、身分の高そうな若い男女の二人組を見かけたら、誰でもいいから絶対、連れて来いつて。まさか本当に現れるとはね……だから一番、小さい子を狙つたんだよ」

「なんてこと……、制裁者は私たちの動きを把握していた……彼らがここまで介入してくるなんて」櫛は言った。「官兵衛。私、行くわ。あそこは、佳世の行くべき場所ではない。それに、あの男の真の目的は私だから」

「わかつた。俺たちは後で追いつく」

櫛が出て行くと、

「さて、女将はでかい船を手配してくれ。あの馬車と俺たちが乗れるくらいのな。あと……」

女将はしぶしぶと、官兵衛の要求に従った。

5

佳世は仮面を手にとっていた。

私は……。

手が震えていた。

私は卑怯だ

。

（だけど私は知りたい。木沙羅さまの本当の想いを、望みを。たとえ知ったところで、木沙羅さまの心に光を灯せるかどうかまでは、わからない。だけど、バドは木沙羅さまの心に光が灯った時、この仮面が外れると言った……）

佳世は仮面を裏返した。裏面には金色の目が閉じた状態で描かれていた。

え？

佳世は目を疑った。閉じていたはずの金色の双眸が佳世を見つめていた。形といい大きさといい、それは佳世とそっくりだった。

思わず佳世は仮面を遠のけた。しかし、金色の瞳はまわりつくように視線を佳世の瞳に縫いつけていた。

「開眼したか。ぬしは天罪ノ面を選択した。さあ、今ぬしができることは何だ？」

バドの口が歪む。

（……本当に心を読んでいる？ まさか、バドの能力って……？）
額に汗が滲む。

「どうやら気付いたようだな。そう、わしは人の心を読める。だが、勘違いするなよ。天罪ノ面を選択したのは、ぬしだ」

佳世は心を弄ばれた事に怒りと悔しさを強く抱いた。そして、バドに対して何もできない自分自身をこれほど呪ったことはなかった。

が、佳世は感情を抑え込み冷静になろうとした。

（ここで終わるわけにはいかない。私は……私はぜったい生き抜く！そして、木沙羅さまを救ってみせる）

佳世は唾を飲み込むと、仮面を顔にあてた。

するとまるで生き物のように、仮面は佳世の顔にぴったりと付着した。不思議なことに、手にしていた時は重みがあったにも関わらず、身につけている実感は全くなかった。

佳世は仮面の中で目を開けた。当然、穴の無い仮面から外を見ることはできなかった。

闇。そして、

突然の衝撃。

心臓の鼓動にも似た、しかし、それとは比べ物にならないほど大地を震わせるような衝撃が全身に走る。

佳世は本当に地面が揺れたのかと思い、倒れないよう両腕を伸ばしバランスを取ったが、それが違うと気付くのに時間は掛からなかった。衝撃が佳世の身体で急速に変化する。

自分の意思に関係なく、どうしようもないほどの怒りが込み上がってくる。脳みそに熱い血が煉り込んでくる。

かつて経験したことの無いほどの怒りだ。怒りで何も考えられない。何に対しての怒りなのか、もはやそれが何なのかさえわからない。

「あ、あ……あ……や」

頭の中に見える得体の知れないものが渦を巻く。自分の身に一体何が起きたのか考える時間は与えられなかった。今度は空から叩きつけるようにして、衝撃が雷となって佳世の身体を突き抜ける。

渦から憎しみが溢れだす。

抑えられない。耳鳴りとともに肋骨がきしみ声をあげ、胸と背中に圧迫するような激痛が絶え間なく襲う。鼓動が速くなっていく。

何も考えられない。

「い……や……やめ……ああ、がつ……」

今度の衝撃は重く、ゆっくり伝わるような大きな波だった。

波が胸から身体先端へと広がっていく。波が脳へ到達したとき、悲しみがどろりと溢れだす。

何も見えない状態がさらなる不安と恐怖を呼び起こし、佳世の思考を引き裂いていく。

痛み、怒り、憎しみ、悲しみ、不安、恐怖が、らせん状に絡み合い、頭の中を引っかきまわす。

何千匹もの蟬の狂った鳴き声が、頭の中で煮えたぎるようにこだまする。

追い打ちをかけるように、胴体から頭、腕、脚が引き千切られそうになるほどの激痛が襲ってくる。

佳世はあまりの痛みに呼吸の仕方を忘れてしまっていた。吐くことはできても、吸うことができない。

全身、汗だくになりながらひざまずく。自分で何をしているのかわからないほどに床を這ったりかきむしったり、頭を痙攣した手で押さえたりしている。

男たちはその狂気に震え、麗もまた、わずかに目を逸らしていた。闇の中の狂気。

痛ましいほどの叫び声をあげ、
うええっ。

佳世はあまりの気持ち悪さに吐いた。吐いた勢いで空気を吸い込む。

「イ……たいよオ」

やっと声に出したものの心、体、頭、内臓、何が痛いのかわからなかった。とにかく何でもいいから言いたかった。涙が床に落ちていく。

幸いなことに、これを境に緩やかにではあるが、感情も痛みも徐々に治まっていった。

不安と恐怖だけが体に残っていた。佳世はすっかり怯えきつていた。開きばなっしの目からは涙が溢れ続け、手足を縮こませ口元から唾液が漏れていた。

「これで仮面は定着したようだが、このぶんでは一日と持たぬな」

バドが満足そうに、そう言った時、

「通しなさい」

鳥居の方からだった。

「佳世！ どこ？」

佳世は耳を疑った。それは聞き覚えのある声だった。

「この姿は……佳世なの？ 佳世！」

佳世は体を丸め震わせていた。

「佳世、こつちを向いて！ 佳世！」

暗闇の中で聞こえてくる音と声は恐怖だった。それでも、勇気を振り絞って佳世は、怖々とした表情で声のした方へ顔を向けた。が、すぐに俯いた。

「まさか天罪ノ面？ なんてことを……」櫛は恨めしそうにバドを睨めつけ、佳世に声をかけた。「佳世、私が見える？」

佳世が首を横に振ると櫛は落ち着かせるように、

「ゆっくり呼吸を整えて。そうすれば気持ちが落ち着いて平常心を取り戻せる。動揺しては何も見えないわ。いい？ あなたならできる」

佳世は櫛の言葉に従った。小さく息を吸い込み、気持ちを落ち着かせる。

すると仮面の中に小さい白い光が現れた。それは蛍のように儚いものだったが、長く暗い洞窟をさ迷ってきた佳世には希望の光だった。

視界が広がって行くようだった。

佳世は恐る恐る顔を上げてみた。

さっき声がした方へ　櫛以外の人間を見ないように鳥居の方へ目を向ける。

櫛はそこに立っていた。手に長巻を持ち、櫛の目は佳世をしつかり見ている。

佳世は櫛の元へ近づこうと立ち上がり、「……櫛さん」片手を伸ばし名前を呼んだ。

っ！

佳世は硬直した。それは自分の腕ではなかった。

いや、自分の腕であることは確かだが、あきらかに肌の色が違っていた。褐色だった。

佳世はまさかと思いつつ下を向いた。胸の下あたりまで伸びた髪が前に垂れる。意識して先に足を見た。褐色だ。そして、視線を移す。

（髪まで！？）

佳世は髪を掴んだ。これも自分の髪だった。佳世は手に掴んだ金色の髪を茫然と見ていた。

「ああ……」視界がまた閉ざされて行く。

「佳世！ 今は落ち着くことに集中して！」

櫛はまるで佳世の心境がわかっていているかのようだった。震える佳世に駆け寄り、手を握り締めた。佳世の手は指先まで冷たく弱々しかった。

佳世は櫛の手の温もりに救われる思いだった。暖かな光に感じられた。視界が元に戻って行く。

櫛は佳世を自分の方に向かせ強く抱き締めると、バドと麗を見た。バドと麗は言った。

「久しぶりだな、櫛。一〇〇〇年ぶりとはいえ、よっぽどわしらは運がいいとみえる。なあ麗よ」

「そうね。仲間なのに顔を見せないなんて、寂しかったわ」

「バド。麗まで……。なぜあなたが、ここにいるの？」

「それはあなたが一番、わかっているでしょう？」

「櫛、さん……」佳世が弱った声で言った。「櫛さんは、あの人た

「ちと同じ制裁者なのですか？」

「それは……」

「そうだと言ったかどうかしら？ 裏切り者の制裁者さん」

（裏切り者？）

「その女、櫛はな。一〇〇〇年前、わしらを裏切り逃げた。ぬしと同じ仮面をつけてな」

「この、仮面を？」

櫛は佳世を見た。「彼の言うとおりね。私は制裁者だった。制裁者の実体は月の都、アトウイに住むカムイを中心とした組織……国家と言ってもいいわね」

「え？ 月って？」

「昔、人間は月にも住んでいたのよ。今も制裁者の統治のもと、アトウイは三五〇〇年間、変わらず国家として存続している」

佳世にはとうてい信じられない話だった。そんなことが本当にあるのだろうか？ いったい三五〇〇年前というのは、どのような世界だったのか。それより気になったのは櫛が制裁者だったこと。櫛は話しを続ける。

「一〇〇〇年前を境に私は月を去り、地上に降りた。そこで私は官兵衛に会った。それから彼とは腐れ縁ね」そう言うと、櫛は少しだけ微笑んで見せた。

「櫛、あなたはどこに逃げても無駄なのが、わかっているのかしら？ 天罪ノ面は外れたようでも、私はあなたを許さないわ」

「私も許されようとは思っていない。だからと言って、佳世を巻き込む必要はなかった。ましてや、この仮面をつける必要はなかったはず」長巻の刀身を制裁者に向ける。

バドは笑い飛ばした。

「何がおかしいのです？」

「天罪ノ面をつけたのは佳世本人だ。王女を救いたい一心でな。なんとも美談ではないか。わしは仮面を差しだしたにすぎん。その子は真っすぐな心を持っておったぞ。その呪われた仮面を自分で身に

つけ、心が壊れて行くさま、ぬしにも見せたかった」バドは満悦の笑みを浮かべた。

「櫛……」バドは名前を呼ぶと口元を歪め、腹の底からえぐり出すように言った。「まるで昔のぬしにそっくりではないか」

長巻の刀身が青白く光り出す。佳世がまばたきをした時にはもう、目の前に櫛の姿はなかった。

鋼のぶつかり合う音が鳴り響く。

佳世は青白い光の筋を目で追った。

麗の短刀が櫛の刃を受け止めていた。

「あなたの相手は私ですよ」麗の足が高く舞い上がり、櫛を襲う。櫛は体を回転させながら、麗から離れる。

「どきなさい、麗。あなたの相手は後からしてあげるわ」

「見くびらないで欲しいわね。それとも、この私の体に傷をつけるのが怖い？」

佳世は耳を疑った。しかし、麗は自分の胸に手を当ててもう一度、言う。

「このあなたの体を」

「それはあなたも同じことでしょう？」

（櫛さんまで、何を言いだすの？）

「私が？ なぜ？ 私は望み通りあなたの体を手に入れた。それに」

麗は櫛の懷に素早く入り込むと、下手から短刀を振り上げた。櫛は半歩下がリ麗の刃を受け止める。

麗はお互いの唇が重なるくらい、そのままぐいっとな顔を近づけ、甘えた声で囁く。

「もうこの体は元に戻せないのよ」

「くっ！」櫛が相手を押し退けようとする前に、麗は後方へ跳び退いた。

「ふふっ、惨めね」

「私のことは何とでも言えはい。でも、佳世に対するこの仕打ちだけは絶対に許さない」

櫛の長巻が青白い線を幾重にも描き、麗に襲いかかる。斬撃が鳴り響く。

「麗、そろそろ他のやつらが来るやもしれん。早く終わらせる。わしはターミナルを起動する」そう言つて、バドは少し後ろへ下がった。

床下から高さ一メートルほどの台座が現れる。バドは台座のそばに立ち何やら手を動かし始める。

「ふむ、動くようだな」

バドは男たちを見て、「ぬしたちは、その女を押さえている」

佳世は抵抗するも二人の男に羽交い絞めにされ、身動きできなかった。

「佳世！」

「よそ見るな！」麗が櫛の懐に入り込み、拳を脇腹に打ち込む。櫛は脇腹を押さえつつよろめきながらも、素早く間合いを取る。

「くつくつ、『プロジェクトKAMUI』の遺産が、まさか我らに使われるとは皮肉なものだな」バドは光明ノ書を台座の上に置いた。「バド！ 何をする気！？」

「決まっておろう。ぬしはここが島と思っていたのか？ ここは度重なる戦乱を生き残った、数少ない巨大武器庫の一つ。ここにある武器が、地上の人間どもに使われる事があつては我らの脅威となる。そうなる前に、月に持ち帰るのよ」

《エスエル・ゼロ・ゼロ・ゴ・ブイエス起動確認》

初めて聞く声に、まわりの男たちは動揺し、あたりを見まわした。「ぬしたち、あわてるな。すぐに終わる」そう言つとバドは台座から離れた。「こっちは終わった。麗、加勢してやろう」

櫛の目の前に、短刀を持った麗とバドが立ち塞がった。バドは素

手だった。

「よもや我らにここまで逆らうとは。ぬしには罰を与えようぞ」バドは指先を伸ばしてから、ぐっと拳を固めた。

「あなたたちから罰を受けるいわれはないわ」

櫛がバドに斬りかかる。バドが避けると同時に麗が横から櫛を襲った。

《エイチティ・イチ・ゼロ・二・サン・エイエスとの接続確認中……》

避けきれず麗の攻撃を受け止めたその時、

バドは足払いで櫛の両脚を宙に浮かせ、櫛の上半身を押し倒す。櫛はその場で回転するように床に倒れた。

「櫛さん！」佳世は身悶えた。

《認証完了……全体数量確認中……各フロア武器リスト確認中……ウォーチーフ稼働状況確認中……》

バドは間髪入れず、倒れた櫛の体をおこす。左手で櫛の首を力強く締めつけ、もう片方の手で頭を掴む。

「あくまでも、ぬしは能力を使わないのか？ 使えばわしら全員、たちどころに殺せるものを」

櫛は何も答えず睨みつけた。

「そうか、ならば狂って死ぬがよい」

バドが右手に力を入れると、櫛は目を見開いて苦しみの声を上げる。

「いい声だ。もっと、狂うがよい」

「櫛さん！ はなして！」佳世は抵抗するも男たちに押さえつけられる。

《各フロア武器リスト異常なし……各フロア、ロック解除します》

「ふむ、使えるようになったか。ウォーチーフ　鉄蜘蛛まであるとはな。麗、兵に鉄蜘蛛と武器を回収させる」櫛を押さえ付けながらバドは言った。

佳世は悔しかった。その悔しさが佳世の頭から不安と恐怖を打ち消していく。

（櫛さんは私を助けるために戦っている……それなのに、ただ見ている事しかできないなんて……）

佳世の目に櫛の苦しんでいる姿が映っていた。それはさっきの自分と同じ……ではなかった。

苦しみながらも、櫛の目は諦めていなかった。活路を見出そうとしていた。

（そうだ……私はぜったい生き抜くと、木沙羅さまを救うと、さっき誓った……）

佳世は全身に力を入れ、必死に抵抗した。

（このまま終わるなんて、イヤだ！）

その時だった。

鈍い音と同時に、佳世を押さえていた男二人の腕の力が緩んだ。

佳世はその瞬間を逃さず、振りほどいて後ろを見た。男二人は床に倒れ気絶していた。

佳世は静かに一言、「官兵衛……」と言うと、前を向いて駆け出した。

その動きは速かった。両拳が青白い光に包まれていた。

佳世はバドに横から勢いよく飛び掛かった。

バドは佳世から身を守ろうと、櫛から手を離すが遅く、佳世と一緒に床に倒れる。

佳世は両手でバドの首を絞めていた。

「お前は！　よくも……許さない！」青白い光が輝く。

「ぐえ……何だ？　この光は？」

バドは眼前の光に驚くも、自分の身に何も起きていない事を確認すると平常心を取り戻し、

「くくつ、ぬしに一つ面白いことを教えてやる。ぬしはもう、生き人形と同じよ」

「何を言い出す」

「人形だ。わからぬか？　ぬしはもう、笑うことも怒ることも悲しむことも出来ぬ体になったのよ。そのような体でどうやって王女を救う？　どのような顔して会うというのだ」

バドの歪んだ口が佳世を挑発する。

「うるさい！　私の心を覗くな！　お前はぜったい許さない！　絶対にだ！」

「佳世！　怒りに身を任せては駄目！」

櫛が叫ぶよりも一足早く、佳世は怒声を上げ、バドの首を締めた。しかし次の瞬間、怒りは苦しみが変わり、

「ぐああっ！」

佳世は両手で頭を押さえていた。

苦しみから解放されたバドの表情がにやける。

「だから、言つたろう？　ぬしの感情が高ぶったとき、それは苦痛に変わる。初めてそれを着けた時の痛みと同じだっただろう？　ん？」

満足そうにそう言うと、馬乗りになっている佳世の身体を掴み、乱暴に投げ飛ばした。

佳世は受身も取ること無く、悶え苦しんでいた。

「誰がヤツを放せと言った？」バドは苛立った声で、男たちが立っていた方を見た。しかし、そこには見知らぬ男が立っているだけだった。

その男は、二メートルはある棍棒を手に持っていた。

男は静かに言った。

「俺だよ」

その男は走り出し、棍棒を片手で大きく振り上げる。

バドの口元が歪む。

「そんな速さで、わしに当てられると思っておるのか？」

「そうか、見失うなよ」

男は表情一つ変えなかった。

刹那。

「何？」言葉は声にならず、バドは男でなく空を見ていた。

次の瞬間、バドは壁に叩きつけられ床にずり落ちた。口から血がごぼつと溢れだす。遅れて激痛が襲う。

血まみれの口で「ぬしは……」と言いかけたとたん、

「じいさん、あんたはもうしゃべる必要はない。今ので肋骨がほとんどイカれちまつてるしな。女、じつとしている。あんたも射程内に入ってるぞ」男は声色ひとつ変えず淡々と言った。

バドは苦悶の表情をしていた。

「これが、地……滅罪者……」

麗は声に出すのが精いっぱいだった。圧倒的な力の差を目の当たりにした彼女に、残っているのは恐怖。

この男の攻撃の速さはとても見切れるものではなかった。それ以上には恐ろしかったのは力だった。防御という行為そのものが無駄に思えた。

「櫛、佳世、立てるか？」

「官兵衛……私は大丈夫。それよりも佳世を」

佳世を抱き抱えながら櫛が答える。

官兵衛は頷くと、変わり果てた佳世の姿に躊躇することなく手を取った。

「佳世、よく頑張ったな。もう大丈夫だ」

「私を見て……驚かないのですか？」

「ああ、佳世に変わりはないからな。まずは、ここから出るぞ」

佳世はバドを見た。先程ほどまで自分を苦しめていた人間とは思

えないほど、憐れな姿だった。

そして佳世は向き直ると、こくりと頷いた。

櫛は光明ノ書をターミナルから取り出していた。

周りが騒々しくなってきた。

官兵衛の後を追ってきたのかそれとも、騒ぎを聞きつけてきたのか村人や兵が集まっていた。

「櫛。佳世を連れて先に行つててくれ」

官兵衛は立ち止まり、

「そういえば、じいさん。気がつかないか？」

バドは苦しそうな顔をしながら、官兵衛を睨んだ。

「あんたの能力によつて、ほとんどの村の人間が仮面をつけていたよな？　だが今はどうだ？　おかしくないか？」

バドは村人の顔を見渡した。誰一人として仮面をつけている者はいなかった。何が起きたのか、わからない表情で官兵衛を見た。

「わからないのか？」

バドには思い当たる節が見つからなかった。

「俺がお前たちのことを知らないとも思っているのか？　制裁者バド。貴様はカムイ、天によつて審判が下された。知っているよな？　審判者の能力」

「まさか、あの娘が？　それでは、わしの能力は……」

バドは顔を真つ青にして佳世を見た。

「貴様はもはやカムイではない。ここにいる村人と同じ普通の人間だ。そして貴様は大罪を犯してきた。心を弄んだ結果、どのような報いが待っているか、貴様が一番わかっているだろう？」

「あ？　おい、待ってくれ。わしは、どうなる？　どうなるんだ？」

官兵衛は鳥居の方へと歩き始めた。

麗もまわりの兵たちも皆、彼らを止めようとする者は誰一人としていなかった。

官兵衛たちが立ち去った後、村人の目つきは変わっていた。その

場にいた全員がバドを見ていた。

「ちょ、ちょっと待て。麗、何を見ている。こいつらを止める！ お前たちも何をしている！」

バドは麗と兵士に向かつてわめき散らす、彼らは静観していた。村人がバドを囲んでいく。手に石や棒を持っていた。

「麗、助けてくれ！ 立てないんだ」

「あなたはもう制裁者ではない。私にも彼らを止められないし、ここで争いを起こして兵を無駄に死なせるわけにはいきません」

「おい？ 見捨てるのか、わしを？」

「バド……正直、私はあのような狂乱をもつ見なくて済むかと思うと、ほっとしています」

「なん、だと？」

「あなたの悪趣味についていけないと言ったのです。勘違いしないでください。最後まで制裁者としての使命を果たそうとしたこと、アトウイには伝えておきます」

「おい！ 本当に見捨てるのか？ この武器はどうする？ おい？ 頼む！ 助けてくれ！ お願いだ！」

麗は何も言わず、兵とともに立ち去って行った。

バドの前には、かつて仮面をつけていた罪人と奴隷しか残っていなかった。

床上の土砂を踏み鳴らしながら、じりじりと近づいてくる。

目を閉じた瞬間、殺される。

今まで仮面の下に隠されていた殺意に満ちた憎しみと怒りが近づいてくるのを、ただバドは見ていることしかできなかった。

武器を握り締める音。

バドは発狂した。

蝉の鳴き声はいつの間にか消えていた。

櫛と佳世は官兵衛の後ろを歩いていった。官兵衛が言うには、この道を通つすぐ行けば小さな船着き場があり、そこで十夜と十真が待っているとのことだった。

佳世の足取りが重くなる。

「佳世、どうしたの？ 少し休む？」櫛は言った。

「いえ、そうではないんです」佳世は顔を伏せていた。

「十夜と十真が気になる？」

「……はい。罪人の仮面をつけて、こんなにも変わってしまった私を見て、嫌われるんじゃないかって……何て声をかければ良いのか……」

櫛は官兵衛と顔を見合わせて言った。

「二人のことなら心配しなくても大丈夫。嫌う理由なんてどこにも無いわ。それより元気な姿を見せないと、ね？」

「櫛の言うとおりだぞ！ 誰が何と言おうと、俺たちにとって佳世は家族のようなもんだ。それに姿が変わっても佳世は佳世だ。これだけは、どうやっても変わるもんじゃない」

「……うん……そう、ですね」

「おお、そうだと」

「ありがとうございます。少しだけ気持ちになりました」

櫛は黙って佳世を見た。その目に憐れみや同情といったものは無かった。

「佳世……あの二人に言葉はいらないわ……」櫛は呟くように言った。

佳世には櫛の言った意味がわからなかった。

船着き場に着くと、十夜と十真が出迎えた。

「櫛！ 官兵衛！ 佳世も無事だったようね」

十夜が笑顔で手を振る。

佳世は頭を伏せ、二人からなるべく見えないように官兵衛と櫛の

後ろに隠れた。

「ええ。十夜と十真は大丈夫だった？」

「こっちは誰も襲ってこなかったし、退屈だったよ」

そして、

「おかえり、佳世……」

十真は佳世のそばまで近づくと、自分の胸に佳世を抱き寄せた。

「おかえり」

十夜も少しかがむようにして、佳世を抱きしめる。

佳世は少し困惑していた。こんなにも変わってしまった自分を見て、しかも罪人の証である仮面を目にすれば、誰だって敬遠するはずだった。

なのに、

「十真さん、十夜さん……どうして？」

更に強く抱きしめられた。それが二人の返事だった。

佳世はゆっくりと目を閉じた。

佳世は木沙羅と泣き明かした、あの晩を思い出していた。あの時も言葉は必要なかった。

（櫛さんの言ったこと、わかった気がする……）

佳世は両腕を二人の体にまわすと、服をぎゅっと握り締めた。

次の日の夜。

一行は田霧島を離れ、山道から少し離れた所で休んでいた。

彼らが進んできた山道は人の往来も多く、佳世たち以外にも野宿のために夕飯の支度をしていたり、馬を休めている旅行者や行商人の姿がちらほらとあった。

官兵衛と櫛は、佳世の身に何があったのかを二人にはまだ話していなかった。

十夜と十真もその事に関しては触れないでいた。佳世を見ていればそれは十分、理解できたから。

食事の後、話を切り出したのは意外にも佳世だった。

佳世は天罪ノ面を自らつけた理由と心の内を語った。

木沙羅の心の内を知りたい卑怯な自分がいる。知らないまま一生を過ごす事を恐れる臆病な自分がいる。しかし、そうまでしても木沙羅の望みを叶え、昔のように木沙羅とまた一緒にになりたい自分がいる、と。

焚火の燃える音と虫の鳴き声が、夜空に響いては消えていた。

時折、夜風が佳世の髪を撫でるように吹き抜けていく。

「私、最近、同じ夢を見るんです。毎夜……。その夢の中で私は名前を呼ばれるんです」

佳世はゆらめく炎を見つめた。官兵衛を除いて他の者も炎を見つめた。官兵衛だけが佳世を見ていた。

佳世は言った。

「本当の名前で……」

皆が佳世を見た。薪の割れる音。

「私の本当の名前は木霊、……柊 木霊」

金色の髪がなびく。

佳世は木沙羅に打ち明けた時と同じように、九年前の出来事を話した。ただ一つ、木沙羅に話した時と異なる内容があった。

「私は生きるために、美郷紫 佳世という名を名乗りました。なぜそうしたかというと、当時の私は本当の名がばれたら、自分も殺されると考えていました。それに今にして思えば、辛い過去を忘れて生まれ変わりたいという願いもあったのかもしれませんが、だから、私は名前と一緒に自分自身を偽って生きる事を選択した……でも結局、佳世では木沙羅さまを救えなかった。そして、こんな姿になっってしまった。私は生まれ変わったのではなく偽っただけだった……私思うんです。この、今の姿が佳世の真実の姿なんだって」

皆、黙って聞いていた。しばしの沈黙のあと、佳世が再び口を開く。

「天罪ノ面が外れた時、私は本当の木沙羅さまに会えると信じています。その時は私も佳世ではなく本当の自分……木霊として会いた

い。だから……」

佳世は顔を上げた。

「今度こそ、私は生まれ変わりたい……柊 木霊として。そして、……」

カムイ天として。

7

火はほとんど消えていた。佳世は櫛の隣で寝ていた。

崖の方から夜風にのって笛の音が聞こえてくる。

櫛は手を伸ばし佳世の頭を撫でながら言った。

「今夜で佳世とはお別れね。朝、目が覚めたらあなたは木霊……」

「うん……」

佳世は小声で小さく頷いた。

「明日、あなたに渡したいものがあるわ」そう言って、櫛は目を閉じた。

十夜と十真。二人が掛け合いながら奏でる笛の音は木沙羅と佳世、あるいは佳世と木霊を表しているようだった。

「櫛さん……」

佳世が何か言おうとする前に、櫛は自分の胸に佳世を抱き寄せた。佳世は泣いていた。

そんな彼女を櫛はずっと、彼女が泣き疲れて眠りにつくまで、優しく彼女の頭を撫でていた。

官兵衛は皆が眠るまでずっと、星空を見上げていた。

翌朝、佳世が櫛から渡されたものは柄の末端に緒の付いた長巻田霧島で櫛が使った武器だった。その名前を天ノ羽衣と言った。櫛は言った。カムイとして、あなたにも武器が必要になる。そして、これからは修行しながらの辛い旅になる、と。

佳世にはもう一つ手渡されたものがあつた。それは黒い厚手の生地で作られた外套だった。この時代の人々にとって天罪ノ面とは、すなわち罪人がつける面。罪人に対する世間の風当たりは厳しいから、人前ではなるべく顔を見られないように、という櫛の配慮だった。

佳世は外套をまとい、天ノ羽衣を手に取り、ぐつと力を込める。旅がまた始まる。

皆が歩き始める中、官兵衛は後ろを振り向いた。

「行くぞ、木霊」

ススキが白い穂を風になびかせていた。陽の光を受けて、山肌に亜麻色の波が広がっている。

先ほどまで滞在していた村はもう、視界に全て収まるほど小さくなっていた。

外套を身に包んだ木霊は、荷馬車の後ろを歩いていた。

荷馬車の上では十夜と十真の二人が羽を休めている。

「はあ、楽だね。よかったあ、私たちの休む番が今で。山道はきついよ」

「十真、そんなこと言わない。もうすぐ交代なんだから」

「はは、ごめん。そういうば、どう？ 木霊は疲れてない？」

「はい。大丈夫です。ヒム力の国で山道は慣れていますから」 淡々と答えた。

「そっか。あの場所は確かに山ばかりだったからね」

木霊は、はいと返事すると、崖と反対側の道端に何かを見つける。

それは登山道沿いにいくつも置かれていた石仏だった。石仏の足元でトカゲが日向ぼっこをしている。

石仏の脇に立て札が立てられ、

「嘉穂国。狐狸の里まであと少しね」

十夜が立て札を見ながら、先頭で二頭の馬を引いている男女に声をかける。

「ああ、もうすぐだ十夜。でもなんだ？ 十夜はもう、お腹でも空いたのか？」

「そうね。否定はしないわ」

銀色の髪をかきわけながら、さらりと言う。

「花より団子だな。やっぱり十真も団子か？」

「は？ 何言ってるの？ 私まだお腹空いてないよ」

「ああ……ああいや、何でもない。聞いた俺が悪かった。すまん、忘れてくれ」

官兵衛の左隣では二頭の馬が頭を並べて闊歩していた。

すかさず、官兵衛は馬に語りかけるようにして

「なあ、櫛。あれか？ 十真って……」

すると、馬が答えてくる。

「官兵衛、余計なこと詮索しないで。あなたと違って私たちは純真なの」

そして、官兵衛のことをヒヒンとあざ笑う。

「はっはっは」空笑い。「櫛、もしかして今、自分を入れたか？

それはさすがに無理があるんじゃないかな」

ひゅん！ と官兵衛の後ろから何かが飛んでくる。

官兵衛は後ろを振り返ると空いている方の手でそれを掴み、すぐに確認する。眼前で受け止めたもの、それは 棒手裏剣だった。

棒手裏剣の指し示す方にそのまま視線を移すと

「しくじったか」

にやけている十真の隣で十夜が舌打ちしていた。官兵衛は今にも噛み付かんとばかりに、二人を睨めつけた。

「ふふん、櫛がそうしろだってえ。私たちにはわかるんだからね」

何を、といわんばかりに歯ぎしりしている男に向かって、十真が嬉しそうに答える。

後ろにいたはずの木霊もいつの間にか、てくてくと十夜のそばまで近寄ってきて、ハラハラした様子で見守っていた。今日もまた始まってしまった どうしよう。

「ほら官兵衛。木霊がまた心配そうに見てるわよ。気配りできない男は嫌われるわよ」

馬が いや、櫛が釘を差してくる。

これがいつもの光景だった。でも、それが返って心地良い。いつもの光景 いつもの笑顔。

木沙羅さまの笑顔。

木霊は少し頭を横に振ってから、官兵衛に訊く。

「あ、そういえば。今日は狐狸の里に泊まるんですね？」

「お、ああ、そうだな。狐狸の里は歴史ある、ちよつとした城下町だ」

「狐と狸って、面白い名前ですね。どうして、狐と狸なんでしょう？」

「それは昔、盗賊の住処だったからだよ。狐と狸といえば、人をだましたり悪戯したりするでしょ？」

十真が得意げに答える。

「だから狐狸の里……それじゃあ、そこって危険なんじゃ……」

「大丈夫よ。それは一〇〇年以上も前の話だから。悪事のし放題を見兼ねたこの地を治める領主が、狐狸の里から罪人を追い出し、今では旅芸人や歌人も集まる立派な町なんだから」

「そうなんですネ。旅芸人ですか。それは楽しそうですね」

十夜に向かって木霊は無表情のまま、淡々と答えていた。どこことなく感情もこもっていない。

本当は笑顔で答えたかった。しかし、心の底から楽しいとは言うことができない自分がいた。

なぜなら、それは、

木霊の目を覆っている仮面　天罪ノ面のせいだ。

感情が高ぶると、天罪ノ面は想像を絶する苦痛を木霊に与える。

嬉しいとか、楽しいとか、悲しいとか、悔しいとか、辛いとか、ほんの一瞬頭に描いただけでも、吐き気と頭痛に襲われてしまう。更に描けば描くほど、四肢が引きちぎられるほどの苦痛が木霊を襲う。そのため、木霊は常に感情を抑えていなければならなかった。気を許してはならない。とにかく、強い気持ちを抱いては駄目だ。そのせいか、木霊は心労がたまり、日に日に心が重くなっていくようだった。それに合わせて感情も消えていくようだった。

もうすぐ、私は笑わなくなるんだ……。

「ね、楽しそうよね。ああ、早くあの茶屋の柚餅子が食べたい」
そんな木霊をよそに、十夜は普段と变りなく嬉しそうに答えていた。十夜に限ったことではない。ここにいる全員がそう答えていたであろう。

なぜなら、木霊のそれを十分、理解していたから。
彼らにできることは、いつも通り接することだけだった。

天罪ノ面は外れない。切断して無理に外せば、立ちどころに絶命するだろう。過去、実際にそれをやった人間が何人もいた。何よりもこの仮面を外せない理由がある。それは木霊自身が望んで着けたという事だった。

そのため、木霊のために彼らにできることは限られてくる。だから、いつも通り十夜は偽りなく嬉しそうに答えた。途中から、食べ物に変わってはいたが。

そんなやり取りをしているうちに、ススキが広がる道の向こうから走ってくる一つの人影があった。

前を歩いていた櫛がその人影に気づくと、

「あら？ あの人……そう。もうそんな時期なのね」と意味ありげに言った。

「櫛さん、向こうから走ってくる人を知っているのですか？」

「そうね、木霊は初めて会うわね。ちよつと、元気な娘だけど、私たちにはとても大切な必要不可欠な存在よ」

「うわゝ、相変わらず元気だねー。あ、今の見た？ 十夜！ 転んじやったよ。痛そー」

「うん、痛そうね。包帯と太い枝を用意しない、とね」

「そんな大げさな……」

苦笑いしている十真に、十夜は「冗談よ」と言いながら道端に落ちている枝を拾い上げ選別し始めていた。

影が更に近づいて、はつきりしてくる。

影は一旦、立ち止まると、元気良く両腕を振り回し、飛び上がって、

「おーい！ お待たせー！」

また走りだす。

「やれやれ……」

頭を手で押さえながらそう言ったのは、官兵衛だ。

「お待たせしましたー！ 親方さま！ ご無沙汰しておりました！」

あ、皆様もこんにちわー！」

元気よく挨拶しながら、彼女は官兵衛の目の前で急停止した。その勢いで後頭部にまとも上げた短髪の尻尾が元気良く跳ねる。

「彩加。相変わらず元気そうだな」

「はい！ 元気ですよ！ はあはあ」

「久しぶりね彩加。はい、お水」

「あ！ 櫛姉さん。お久しぶりです！ お水いただきます！」

答えると同時に、法被を着た少女は水筒を受け取ると、水筒の底を真上に上げ、喰らいつくようにごくごくと飲み始める。

「す、ごい……」

木霊は思わず、息を呑んだ。

「ぶはあつ。うまい！ ありがとうございます！」

彩加は腕で口をぬぐい、水筒を櫛に返しぺこりと挨拶する。

「彩加ちゃん、元気だね。転んだところ大丈夫？」

「あ！ 十真。会いたかったよー！」と言って、喜び勇んで荷馬車に乗っかり十真に飛びつく。しかし、

「あ、こらー！」

飛びついた先は十真の翼だった。彩加は白い羽を手に取り頬を摺り寄せていた。

「うーん、気持ちいい。手入れ大変だね。今度、一緒にお風呂入ろうよ。あたしが洗ってあげるよ」

「いや、遠慮しとくよ」

困り顔で十真が十夜を見る。十夜は翼をぱたとさせていた。

「彩加。十真はいつでも大歓迎って顔をしているわ。良かったわね」

「あ！ やっぱいい。うんうん、そうじゃろそうじゃろっ」

「ところで彩加。転んだところ、本当に大丈夫なの？」十夜が確認する。

「え？ 大丈夫だよ！ ほらあ、って その包帯とその大きな枝はどうするの？」

「治してあげるのよ。遠慮しないで」

と言って、十夜は翼を広げ荷馬車に飛び乗ると、棍棒のような太い木の枝を真上から彩加の右肢めがけ、振り下ろす。

彩加はさっと、十真と十夜から跳び退くと、額から冷や汗を垂らしながら、

「十夜つてば、脚は大丈夫だよ。それに治してないよ。逆に悪くさせてるよ？ それは」

「仕方ないじゃない。これだけの包帯を用意したんですもの。まずは、それに見合うくらいの怪我をしてもらわないと」

「ひいつ」

彩加は荷馬車から飛び降り、さっと官兵衛の背後に隠れる。

「親方さま、十夜が前よりも更に怖くなってますよ」

「お前が十真を茶化すからだ。それに挨拶はもういいか？」

「あ、はい！ 皆様、元気そうでお会いできて嬉しかったです！」

「よし、ならいいか？ 彩加にもう一人、紹介したいのが、いるのだが」

「さ、木霊」

木霊の肩に手をのせた櫛が前へ促す。

木霊は自分より少しだけ背の高い少女の前に立つと、

「柊木霊です」と、言い外套を脱いだ。

すると、金色の髪がふあさっと腰まで落ち、褐色の顎と額が顕になる。

目は仮面に隠れて見えず、目の代わりに天という文字が彩加を見ていた。

さすがの彩加もこれには驚いた様子で、

「彩加……で、す」

そのまま瞼を閉じることなく、視線をぐりつと官兵衛の方へ向け、
「あ、の……親方様、これは一体……」

官兵衛が木霊について、ざっと経緯を説明する。

「そうだったんですね。わかりました！ これからどうぞ、よろしくお願いします！ 木霊ちゃん！」

「あ、はい。よろしく願います。彩加さん」

しかし、彩加は少し戸惑っているようだった。木霊の表情から何も汲み取れなかったからだ。

そのことは木霊自身もわかつている。嬉しいけど、抑えなければ。
。

「あの、それで彩加さんは」

「あ！ そうでした！ あたしが何者かまだ言ってませんでしたね。あたしは親方さまのお社 『地の社』を守る『守り人』の一人で、あたしの担当は、旅に必要な路銀の調達や文とか情報の伝達です！
「伝達ですか、一人で大丈夫なのですか？」

「あはは、なるほど。もちろん、一人ではないですよ。他にも四人いますよ。その辺にいるはずですよ。ただ、みんなで行動していると目立つので、こうしてあたしだけが表立って動いているわけです！
「威張って言うことじゃないわね」

十夜が釘を刺すように言う。木霊は苦笑いしていた。

「そう言えば、官兵衛さんの社ってどこにあるのですか？」

「木霊はカムイのそういった細かい事は、まだ知らなかったな」

官兵衛はふむ、と頷いてから、

「地の社は出雲伯耆という国にある。ここからそう遠くはないな。機会があれば行くこともあるだろうが、今は西都へ向かうのが先だろっな」

木霊は頷いた。官兵衛は彩加を見て文の束を取り出す。

「さて、じゃあ挨拶も済んだことだし、いいか？」

「あ、はい。親方さま！」

「この文を頼む。そしてこれもだ」

「わかりました。あたしからは、こちらになります」

彩加も文の束と路銀の入った袋を官兵衛に手渡す。為替手形というものも昔からあったが、各地で争いが絶えない今のご時世では、ほとんど意味を成していなかった。

「あと、最も大事なこちらですね。過去数百年に渡って、この地方にまつわる伝説や伝承をまとめたものです」

紐で綴じられた冊子を受け取ると、その場で目を通し始める。

「多いな。彩加、これから俺たちが向かう狐狸の里に関する話は無いのか？」

「残念ながら、目ぼしい物は無いようですよ。一〇〇年前に罪人が追い出されてからは何事もなく、平穏な町ですね。そう言えば、数日後に『雛おくり』があるみたいですよ」

「雛おくり？」

「雛おくりというのはね。雛人形のお祭りだよ。木霊ちゃん」

「彩加。そんなんじや、わからないぞ。いいか木霊。木霊の住んでいたヒム力には、流し雛はあったか？」

木霊は「見たこともありません」と答え、首を横に振った。

官兵衛は流し雛について説明し、

「まあ、その流し雛と同じように立ち姿のお雛さまを、川に流すんだ。雛人形の名産地である、狐狸の里ならではの行事だな」

そもそも、なぜそのような伝説や伝承を調べているのだろうか。

彩加は大事なことと言っていた。

「あ、あともう一つ。雛人形の『臍』は必見ですよ！すごい繊細な作りで思わず欲しくなってしまうですよ。機会あったら見てください！ それでは親方さま。皆様方！ ごきげんよう！ 失礼します！」

彩加は来た道とは逆、つまり、木霊たちが歩いてきた道に向かつて走り去って行った。

「彩加さん、凄かったですね。ああいう人もいるんですね。元氣をたくさん貰ったというか」

「あそこまで元気だと、こっちが疲れちゃうけどね」
十真はぐつたりとした様子だった。

田霧島での、あの出来事から二ヶ月が経とうとしていた。

木霊たち一行はこの二ヶ月もの間、木沙羅とキアラの搜索と木霊のカムイとしての鍛錬も兼ねて各地を旅していた。

今回の目的地の一つ、ここ狐狸の里は内陸部にあり水や豊かな土壌にも恵まれ、景勝地としても知られる場所であった。

商業も栄え、旧時代から伝わる柚餅子や五万石漬を取り扱っている老舗も軒を連ねていた。

また、この地は雛人形の産地でもあり、ここで作られた雛人形は、西都地方やここ長州五国地方、八国地方など各地に行き渡っていた。木霊たち一行が狐狸の里に到着したのは、夕陽が山肌に沈んでいく前だった。

宿の明かりがぼつぼつと灯り始めると、辺りは橙色に染まって行く。その様子はどこか懐かしい暖かさを感じさせた。

街中を進んでいくと、木霊が一件の宿屋の前で足を止める。

「ん？ どうした？」

官兵衛も馬を止め、木霊の視線に合わせた。

視線の先に、呼び込みをしている二人の少女の姿があった。

少し薄汚れた着物に身を包んでいたが二人とも、笑顔を振りまいて一人は笛を吹き、もう一人は短刀を四本、空に向けて放り投げ回していた。

「木霊、珍しいの？ お城でよく見ていたんじゃないの？」

「演奏会はよくありましたが、こういった曲芸は、なかなか見る機会がありませんでした」

「ふうん、そうなんだね」

「それにあの人たち、私と同じくらいの歳なのに頑張っているなつて」

十真は黙って頷いた。

「木霊。よかつたら、このお賽銭、渡してきたら？」

十夜が賽銭を木霊に手渡す。

木霊は、手に取るも、これをどうすればいいのか戸惑っていた。

「あの足元にある木箱の中に入れるの。ああして、この子たちは稼いでいるのよ」

と、十夜が更に補足する。

木霊は大きく頷いた。

笛の音が止み、周りで見ていた大人たちの拍手の後、木霊は二人に近づいた。

二人は見慣れない格好をした木霊を物珍しそうに見ていたが、特に気にする様子は無かった。

しかし、

「あの、楽しい芸を見せて頂いて、ありがとうございます」

顔はよく見えないが、黒い外套を頭からすっぽりと包んだ少女らしき者から、そう言われ驚いていた。

二人のうち、短刀を投げていた背の高い少女が、あたふたと答える。

「え？　ありがとうはあたしらだよ！　えーっと、初めてだよ。そんなこと言われたの。なんか照れるなあ」

腰まで伸びた黒髪を揺らしながら、その少女は鼻の周りを赤らめ、両手を広げ頭を横に振っていた。

「だめだよ、お姉ちゃん。ちゃんとお礼を言わないと」

二人は姉妹らしく、妹の方は木霊よりも二つ三つ歳が離れていそうだった。逆に姉の方は二つほど上のようだ。

妹が笛を両手に持ちながら、その小さな頭を深く下げ、丁寧にお礼する。

「ふふ、あなたたち、この宿屋で働いているの？」

「うわ、綺麗な人……」

櫛の姿に姉妹は見惚れていた。周りを見渡せば、彼女たちだけではない。先ほどまで一緒に芸を見物していたはずの者たち　特に

男たちは皆、その場に立ち止まって、姉妹と同じ目をしていた。

それを横目に官兵衛の方は、またか、といった様子で欠伸をしていた。

「はい。あたしら、この宿屋で働いてます。よかつたら、どうです？ 部屋は空き放題だし、飯はまあまだと思いますよ」

「お姉ちゃん！ そんなんじゃお客さん、来ないよ……あの、すみません、すみません」

頭を掻いている姉をよそに、妹は何度も頭を下げている。

「ぶ、面白い。この姉妹」

十真と十夜は微笑んでいた。

木霊は困った顔をしていたが、

「木霊は気に入ったようね。今晚はここにしましょうか？」

と、櫛が少し屈んで木霊の顔を覗き込むと木霊は小さな声で、はい、と頷いた。

「よし！ 決まりだな！ 嬢ちゃんたち、馬小屋は裏にあるのかな？」

「まいどあり！ 髭のお兄さん！ おつきな荷馬車だね。こつちだよ。ヨミは案内お願いね」

「髭……つて。初めて言われたぞ。俺には官兵衛という名があるんだ」

官兵衛はぶつぶつと言いながら、櫛たちと別れ、姉と一緒に歩き出した。

しかし、すぐに官兵衛は少女より少し後ろへ下がると、

「嬢ちゃん名前は？ 俺は名乗ったぞ」

「ん？ あたしかい？ あたしはナオだ。姓は無いよ」

「じゃナオ。聞くがその脚、どうした？ 答えたくなければ答えなくていい」

「ああ、この脚かい？ これは昔、ちょっとした事で怪我したのさ。走れないけど、不便じゃないよ」

「そうか。聞いて悪かったな。その何だ……初めて見たとき、お前

のその元気な姿から、とても想像できなかったものでな。走る姿が
まっ先に思い浮かんだんだ」

「さっきの黒い女の子といい、あの綺麗な人といい。ほんと、あん
たら面白いね。あたしの走る姿か……そんな事、言ってくれたのも
あんたが初めてだよ。走り方なんて、知らないしわからないよ……
どうなんだろうな？ 走るって。走れたら、自分の好きな所へすぐ
に行けるんだよな？」

「……ああ、そうだな」

片足を引きずるようにしてナオは歩いていった。

「ナオ、お前は馬に乗ったことはあるのか？」

「あるわけないよ。第一、馬なんて高価なものなんて手にすること
できないよ。それにこんな脚じゃ、馬を跨ぐ力さえ出やしない」

「なるほどな……」

「着いた。ほら、ここだよ」

ナオが、ばんばんと木の杵を手で叩く。

馬小屋に着くと、官兵衛は荷馬車から馬を引き離し、一頭を手摺
に固定し、もう一頭には鞍を載せる。

「あれ？ お客さん、こんな時間に出かけるのかい？」

「官兵衛でいいぞ。少し、散歩するぞ。ナオ」

「行つてらっ へ？ って、あ！ 何するんだ！」

官兵衛はナオの腰を掴み上げると、そのまま鞍に乗せ、官兵衛自
身もナオの後ろに跨る。

「どうだ？ 初めて乗った気分は？ 少しだけ付き合え」

「は？ なに言ってるの？」

そう言っている間にも、ナオと官兵衛を乗せた馬は小屋を出る。
そして、

「行くぞ」

「ちよっと！ うわっ！」

馬は大きく前脚を掲げ嘶くと、勢いよく駆け出した。

ナオは、わあわあと叫び、目を瞑って鬣にしがみついていた。二

人を乗せた馬が行灯に照らし出された橙色の通りを駆けていく。通りを歩いていった通行人が慌てて端に跳び退き、迷惑そうに二人を見ていた。

「ナオ、目を開けて見てみる。お前が見たかった景色が広がってるぞ」

「何言ってるんだ。さつきから無茶苦茶だぞ！　だいたい、こんなに揺れてるじゃないかあ！」

「揺れているのは当然だ。馬に乗ってるんだからな。それに怖いのか？　さっきの元気はどこへ行った？　目を開けないから、怖くなるんだ。開けてみる。できないなら、もっと速く走るぞ」

これ以上、速くなったら、たまったものじゃない。

「わかったよ！　開ければいいんだろ！」

ナオは双眸を少しだけ開けてみた。風が目の際間に入ってくる。

体が上下に揺れ動き、何が映っているのか、よくわからない。もう少しだけ目を開けてみた。最初に映ったのは橙色。そして、正面には道が細く映っていた。いつもは、あんなに広がった道が狭く感じる。遠くにあったものが、ナオの目の前で次々と消えていく。でも、遠くを見ればまた新しい景色が飛び込んでくる。

いつの間にか、ナオは背をただし顔を上げていた。

いつもと違う景色　新しい世界。

「すごい……　どんどん景色が変わっていく……」

「もっと面白いものを見せてやろう」

そう言って、官兵衛は方向を変え、道を外れると小川の方へ向かった。

「ちよつと、どこ行く気？　そっちは道じゃないでしょ！」

さっきよりも更に馬は速度を上げて小川のある土手を登る。

「うわ！　落ちる！」

官兵衛はナオの腹を腕で抱えると、

「いくぞ！」

次の瞬間、馬は勢いよく空へ飛び出し宙を駆っていた。

「ほら、見てみるんだ」

「あは……はは！ 飛んでるよ……綺麗」

それは一瞬だったが、ナオには全てが止まっているように見えた。夕陽に反射して金の鱗のように輝く川のせせらぎ。馬の思わぬ登場に驚いたのか、水しぶきを立て川面で跳ねる鮎。川岸に咲く白い彼岸花。木で作られた素朴な橋。橋から道が曲がりくねったように伸び、田畑が金色のさざ波を立てて広がっていた。

馬の四肢が着地すると同時に、ナオの体も一旦、深く沈みまた浮き上がる。

「はは！ あははは！」

ナオは大声で笑っていた。

「飛んだ気分はどうだった？」

「はは。最高だよ！ 走って飛んだんだ！ 一瞬だったけど……でも、すごく美しかった」

「そいつは良かったな、ナオ。じゃあ、そろそろ引き返すとするか。帰りももちろん、走るぞ！」

「うん！」

今さらながら、ナオは気付く。ずっと片手で官兵衛がナオを支えていたことを。ナオの腰に官兵衛の腕があつた。少し恥ずかしかった。それにしても、この男はなんて強引なんだろう。何を考えているんだ。いや、考えるのはよそう。そう自分に言い聞かせてみる。だがこうなると、余計に意識してしまう。背中越しに伝わってくる心臓の鼓動。気になる。？ ちらりと、横目で後ろを覗こうとした。だけど、何も映らない。さっきから風が顔に当たっているけど、涼しくならない。

帰りの景色はよく憶えていなかった。

馬小屋に着くと、ナオは官兵衛に打ち抱えられながら、馬から降るされ、地面に足を着けた。が、少しよろける。

「お？ 大丈夫かナオ。少しだけだったが、走れて良かったな」

「うん！とにかく、すごく楽しかった。こんな気持ち……を抱いたのも初めてだ」

「こんな気持ち？　どんな気持ちだそれは？」

「えっと、それはその……何でもいいだろ！　とにかく凄かったんだよ！」

「わかったわかった。それじゃ、戻るぞ」

その夜、

宿屋とは別の場所にある離れで、ナオは湿っぽい固い布団の上にヨミを寝かせていた。昼間と違って二人に与えられた部屋はすきま風があらゆる所から入り込み、夜は寒い。

ナオは薄手の掛け布団をヨミに被せる。小さな窓から差し込む月明かりがヨミの薄汚れた顔を照らしていた。

「お姉ちゃん、何か楽しいことでもあったの？」

「うん？　ヨミ、なあに突然に。どうしたの？」

「だって、いつもと違ってニコニコしてるよ」

「そう？　でも、そうなんだろうな」

「何があったの？　教えてよ」

「うん。今日、実はね。走ったんだよ」

「え？　お姉ちゃん、走ったの？」

「そう。走るのってあんなに楽しいことだったんだね。走ることできたら、ヨミと一緒にもっと、もっと……と遠く、に……行ける、のに……」

「……」

「……」

「……お姉ちゃん。お姉ちゃん？」

ナオは寝息を立てていた。

「疲れて寝ちゃったんだね……。私が大きくなったら、私がお姉ちゃんをどこにでも連れて行ってあげるからね。誰も……あの人たちが追ってくるけど、できない遠くへ……」

そう言つて、ヨミは掛け布団の端を掴むと、そのまま上に持ち上げ、ナオに体をぴたっとくっつけ抱きつく。そして、
静かにヨミも目を閉じた。

その晩は朧月だった。窓から差し込む柔らかな月明かりが、体を丸め寄せ合いながら眠っている二人をいつまでも包んでいた。

2

翌朝、木霊たち一行は狐狸の里から少し離れた場所　『羽八馬溪』へと向かっていた。

そこは木霊たちが鍛錬するための場所だった。

ここにいる間　すなわち木沙羅とキアラの居場所が掴めるまでの間は、早朝から夕刻まで羽八馬溪で鍛錬し、夜は宿に戻って休む計画だ。

今日はその初日だった。

鳥が囀り、滝壺に水が当たる音に混じり、鋼の音が響いてくる。

真っ直ぐに伸びた刃が、木霊の横腹を斬り裂く。木霊は避けきれず、長巻で刃を受ける。それを受けている間に今度は斜め上から円形の盾が木霊の顔面めがけ飛んできた。木霊は上半身だけで仰け反って躲すもバランスを崩し、尻餅をつき一瞬、視界が暗くなる。目を瞑ってしまったのだ。瞬時に目を開けるも、間に合わなかった。銀色に輝く刃の先端が木霊の眼前で凜とした輝きを放っていた。

「武器で受けない！　最小限の動きで避けることに集中しなさい。木霊」

木霊の鼻先に触れるか触れないかの位置で止まっていた剣の切っ先が引っ込むと、目の前に片手剣と円形の盾を持った十夜の姿があった。

はるか上空で生い茂っている木々の葉から陽の光が差し込み、木漏れ日となって滝の前に立っている十夜を照らしていた。白い翼を

広げたその姿は鋼の騎士というよりも、

「十夜さんって、まるで天女みたい。すてき」

小さな手を合わせながら、短い黒髪の少女はため息をついていた。
「うん、そうだね。櫛さんも綺麗だけど、十夜も十真も綺麗だな」
「そうだよね、お姉ちゃん」

「おはよう。二人とも。早速、今日もお仕事かしら？」

「あ！ おはようございます。櫛さん」

「おはようございます」

そう挨拶したのは、ナオとヨミだった。

櫛は朝食の準備をしていた。火を起こすための炉を作ったのはもちろん、官兵衛だ。

「あれ？ 官兵衛はどこ行っ たんですか？」

ナオが尋ねる。

「そういえば、十真さんもいませんね」

「二人ならほら。あの滝の向こうで鍛錬してるわよ」

「あ、本当だ。へー」

櫛も官兵衛の方を少しだけ見ていたが、二人に向き直ると、

「ところで、今日は一体、どうしたのかしら？」

「あ、そうだ、いつけない。言うのすっかり忘れてた！」

「もう、お姉ちゃんってば」

ナオはごまかすように、笑うと、

「あのですね。櫛さんたち、今日からここで鍛錬されるんですよ。
だから、あたしたち、食べ物が必要になるだろうなって、持ってきたんです」

そう言っ て、ナオとヨミはかごに入った芋や人参、椎茸や山菜を見せる。

「どれも美味しそうね。それじゃあ、全部、頂こうかしら」

「え！ 本当に？ 全部、ですか？」

「ええ、本当よ。はい」

櫛は当然の顔をして金銭を払う。

ナオとヨミの二人は目を丸くしていた。なぜなら、櫛が作っている朝食の分だけでも、おとな八人分は優にあつたからだ。もしかして、昼の分も合わせて今、作っているのだろうか？

「あの？ 櫛さんが今、作っているのってお昼の分ですか？」

「違うわよ。これは朝の分。お昼はあつち」

見れば、火に掛けているものと同じ大きさの円筒型をした鍋がもう一つあつた。

固まっている二人の間に割って入ると、櫛は二人の顔を見比べながらにこやかに、

「ふふ。せつかく仲良しになつたのだから、一緒に食べましょうね」

「うまいなー！ こんなにたくさん食べたの。久しぶりだよ」

「うん、美味しいね」

朝食はナオとヨミも一緒だった。

木霊は二人から顔が見えない所に座つて、黙々と食べていた。

木霊の隣で、十夜と官兵衛が並んで食べている。

「十夜。おかわりか？ 俺のもついでに頼む」

官兵衛の茶碗を受け取り、十夜は席を外す。

「ちよつと十真。あの二人、いつもあんななの？ 食べ始めてからまだ、そんなに時間経っていないのに、すでに三杯目なんだけど」

ナオが十真に訊く。ヨミも箸を止めて十真に注目していた。

「はは……そうだね。いつもあんな感じ……」

「姉妹なのに、違うね。でも、あんなに食べて空を飛べなくなるとか無いの？」

「うわ、お姉ちゃん、ちよつと失礼だよ。そんなこと聞いちゃ……」

「飛ぶ？ ああ、ナオは知らないんだね。私たち天狗は翼を持つてはいるけど、鳥のように飛ぶことはできないんだよ」

「へ？ そうなの？ ああ、でもそう言われてみれば、高いところをこつ、ぴよんぴよんと、飛び跳ねて行くのは見たことあるけど、鳥みたいに大空を飛んでいるのは見たことないな。ヨミはある？」

「うっん、私もないよ」

「だいたい、崖のような高いところから滑空するか、壁とかを蹴ってその反動で飛び跳ねる感じだね。そんなことしないけど、屋根とか二階三階に飛び移るのは、簡単にできるよ」

「ああ、それは楽でいいね。玄関いらないな」

朝食を終え、木霊は一人、笛を吹いていた。

すると、ナオとヨミが林の方から歩いてきて、音を立てないように木霊の隣にそっと座る。

演奏が終わると、ナオが興味津々に顔を向け、

「木霊って笛、吹けるんだ。すごく上手だね」

木霊は、はい、と頷いた。遠くから滝の音が聞こえてくる。

「木霊ってあんまり喋らないよね。顔も見せてくれないし」

「ごめんなさい……」

「みんなに聞いても、木霊のこと教えてくれないんだよね」

「……」

「お姉ちゃん」

ヨミがナオの裾を引っ張る。

「ちよっとだけだから、いいでしょ。ね」

「もお」

「あの……私のことで何かあるのですか？」

「えっと……なんというか。その、ほら、木霊って。他の人と雰囲気が違うよね。肌の色とか。その金色の髪とか。もしかして、木霊ってどこかの国のお姫様が、お嬢様なの？」

「……いえ。でも、どうして？」

「食べ方がすごく綺麗でした。歩き方とか今も座っている姿勢とか綺麗になって」ヨミは瞳を潤わせていた。「なんか憧れてしまいます」

「だから、木霊はきつとどこかのお姫様で、隠密で旅しているのになって。昨日だって、あたしらにお賽銭、上げようとしてたけど、

戸惑ってたしね」

「あ……」確かに、昨日、十夜から賽銭を渡され、どうすれば良いか戸惑っていた。それもそのはず、ずっと城内で暮らしてきた木霊にとつて、庶民の暮らしは、ほとんど皆無と言えた。

「なるほど、私はそういう風に見られているんですね」

「あ！　今、笑ったでしょ？」

「笑ってませんよ」嬉しかった。木霊は感情を小さくして心の片隅で微笑んでいた。

「うそ！　顔に出さなかったけど、笑ってた！」

「うん。木霊さん、今、少しだけ笑いました」

ナオとヨミも初めて見せてくれた小さな木霊の笑顔を見て、笑っていた。

「では、そういうことにしておきましょう。でも私がお姫様だったら、修行はしていないでしょうね」

「あ、そうか。でも、戦うお姫様もいいな。ちよつと憧れるなー」

「私も憧れちゃいます」

「おっと、ヨミ。そろそろ宿に戻らないと……」

「そうだね、お姉ちゃん」

「邪魔してごめんね。木霊。また、明日……というか、今晚も宿で会うかもしれないけど、またね」

「はい」

「あ、そうそう。木霊って淡々と話すけど、笛の音は違うよね。そっちが本当の声なんじゃない？」

「お姉ちゃん、また少し失礼だよ。でも、本当に笛は素敵でした。今度、私にも教えてくださいね」

そう言つて、お互い手を振って別れると、木霊はまた一人になる。木霊は少しだけ、嬉しかった。

言葉にしなくとも、感情を表現する方法はある。思いつきり笑うことはできないが、この笛を通して喜ぶことはできる。そう考えると、少しだけ気持ちが楽になった。

きつと、これからも笑うことはできる。感情は消えない。

木霊は横笛を口にあてた。

森の中をトンボが羽を広げ、滝の方へと飛んでいく。

滝のそばを流れる小川に沿って歩きながら、十夜と十真は移りゆく秋の気配を楽しんでいた。

水しぶきが舞い、木の葉がこすれ合う音に混じって、どこからともなく、笛の音が聞こえてくる。

官兵衛は目を閉じ、木にもたれ耳を澄ませていた。

だが、ふと片目を開け、

「どうした？ 楽しそうな顔をして」

少し離れた苔の生えた石の上に腰を掛け、足を伸ばして体を休めていた櫛が、髪をかきわけながら一人微笑んでいた。

そのまま、空を仰ぐように顔を上げると、

「木霊、笑っているわね」

「……ああ」

官兵衛は頷くように目を閉じると、思わず櫛と同じ顔をしてしまう。

「笑っているな」

3

五日が経とうとしていた。

ナオとヨミの二人の姉妹は毎朝、木霊たちの鍛錬の場である羽八馬溪に顔を出していた。

歳が近いせいもあるかもしれないが、ナオとヨミはよく木霊に話しかけ、はじめは戸惑っていた木霊も、今ではもう打ち解けあっているようだった。

いつものように朝食を終え、いつもの場所で木霊は横笛を奏でていた。隣にナオとヨミが座っていた。

最後の音が風に乗って空へ吸い込まれていくと、木霊は笛から唇をはなした。

そして、二人の方へ静かに顔を向けて、

「今日はお祭りがあるのですよね？」

「はい、今日ですね」いつもはすぐに答えてくる姉に代わって、返事したのはヨミだった。どことなく、二人とも元気が無い。

「私の国では流し雛のような行事は無かったから、早く見てみたいですね」

「そう……」

「わわ、それなら今日、木霊さん一緒に見ましょう。実は今日、木霊さんにこれを渡そうと思って来たんですよ」

素っ気なく答えるナオに、ヨミがあわてふためきながら、懷から何かを取り出してみせる。

「これは……雛人形……？」

ヨミから手渡されたのは、手のひらに収まるくらいの紙で作られた雛人形だった。少し目が粗いが、一般的に紙は高価なものだ。

「はい。お姉ちゃんと私で作りました。お姉ちゃんと私のもあるから、一緒に流しましょう」

「ありがとうございます」

木霊は丁寧にお礼を述べた。

「ヨミ、あたしは行かないよ。木霊と二人で行ってきなよ」

「お姉ちゃん！ そんな、約束したじゃない。行こうよ」

「ごめん、だけどやっぱり行けない。それに戻る時間だ」

「ああ……、木霊さん、夕方に宿屋の橋の前で待ち合せましょう。

お姉ちゃんも必ず連れてきますので」

「あたしは行かない」

「もう、そんなこと言っていないで行こうよ」

ヨミは木霊に軽くおじぎすると、先へと歩くナオの方へ小走りで去っていった。

今日は祭りがあるということで、陽が西へ傾き始めた頃には、木霊たちは狐狸の里へ戻っていた。

約束の場所にナオとヨミはいた。

何時にもまして、通りは人と活気に溢れていた。通りに沿って立ち並ぶ店と店の間を埋めるように、露天も立ち並ぶ。

通りの中央には、およそ五メートル幅の底の浅い川が走り、いくつもの橋が等間隔に架けられていた。

「あ、木霊さん。それじゃあ、川上の方へ行きましょうか」

「お待たせしました。ヨミ。ナオも来てくれたんですね」

「あたしは、気がすすまなかったんだ。だけど、どうしてもってヨミが聞かないからさ」

三人は上流の方へと歩き出す。木霊は袋に包まれた長巻を手にしてた。護身のため、常に持ち歩いていた。

「でもどうして、そんなに嫌がっているのですか？」

「それは……この雛おくりが、嫌いだからさ。実をいうとさ、木霊」

ナオは遠くを見つめていた。

「あたしらは、ここの人間じゃないんだよ。あたしとヨミは逃げ出してきたんだよ。だけど、この怪我した脚ではこれ以上、遠くへ行くこともできない。だから、あの宿屋に住み込みでお世話になっているってわけさ」

「そうだったんですね……」

「うん、それでさ。あたしらの村にも雛おくりがあるんだけどね。それが笑っちゃうんだよね」

ふうっ、と息を吸い込んだ。

「儀式だったさ」

「お姉ちゃん……」

「儀式……？」

「そう、儀式。その村には今では誰も近寄らない坑道があつてね。坑道の奥深くに冥界の入り口があるんだって。おかしいのが、その

奥深くから人を狂わせる瘴気が発生する。もし吸えば、その人間は気が狂ったように見境なく人を襲う。そして、自らも冥界への入り口へと向かって歩き出し、二度と現世に帰ってくることはない。しかし、瘴気の発生を防ぐ方法が一つだけある。それがあたしたちの村に伝わる『雛おくり』という生贄を捧げる儀式」

「生贄!？」

「あたしは学が無いから、聞いた話でしか知らないけど雛人形っていうのは何千年も昔からあって、子どもの身代わりとなって事故や病気から守ってくれてるものらしい。そして、身に付いた穢れを水に流して清める。それと同じように、あたしら村の子が雛人形になつて村の人を守る」

生贄という言葉を目にしてなんとなく、そのような気がしていた。だが、実際にその言葉を聞いて、改めて息を呑む。木霊のそれを汲み取ったかのようにナオは続けた。

「この儀式は一〇年に一度、行われるんだ。そして、次の生贄

『雛巫女』に選ばれたのがヨミだったんだ……」

「もしかして、その儀式は今日……?」

「そう……。あたしはヨミを連れて逃げ出したんだ。でも今頃はきつと、別の子が……。だけど、それをわかっていて、あたしはヨミを連れ出した」

「お姉ちゃん……」

「ヨミは悪くない。これは全部、あたしの意志でやったことなんだから」

そう言つて、木霊に向き直ると、

「木霊。雛おくりの儀式はとても残酷なんだ。生きたまま四肢を斬り落とされるんだよ。とても、人間のやることじゃない。だから、あたしは」

「わかります。ナオ。だから、ナオとヨミはこの雛人形を作ったのですね。」その子”のために。でも、ナオは悩んでいた。ヨミと同じくらい、その子のこと」

「木霊……」

「木霊さん……」

今の私にできること。

「行きましょう。会場はあちらですよ。遅れちゃいますよ」

ほんの少しだけだったが、顔の下から覗く唇が笑っていた。

まわりの人間たちも、雛おくりの会場へと向っている中、三人は並んで歩いていた。

木霊はふと、数日前のことを思い出す。彩加と官兵衛はこの地方の伝説や伝承を調べているようだった。それが何のためなのかは、わからない。だが、どうしても気になることが一つあった。

「木霊さん、お姉ちゃん、ここは人が多いからもう少し上流の方に行こうよ」

三人は人形を手にした人たちの間をすり抜け、人がまばらになるくらいの場所まで来ていた。

木霊は片足を引きずって歩いていたナオに声を掛けた。

「ナオ、一つ訊いてもいいですか？」

「いいけど、なに？」

4

「朧……」

官兵衛は目を細めた。目の前で一体の雛人形を握っていた。

「聞いたこと無いな。みんなはどうだ？」

テーブルの上には徳利とお猪口、肴が置かれている。

官兵衛の右隣に座っていた櫛は首を横に振った。向かいで箸とお猪口を動かしていた十夜と十真も横に振る。

官兵衛はテーブルのそばで立っていた男に声を掛けた。

「で、ご主人。この朧と言われる人形はだいたい一〇年ほど前から出まわっているって話だよな」

「はい、そうです。ああ、お客さん。そんなに乱暴に扱わんでくだ

さい。かなり高価なものでしてね。欲しければ、このお値段でお取引させて頂きますよ」

と、目の前の男が両手を使って金額を提示する。

「何！　これが……そんなにするのか？」

「左様で」

「みんなで三ヶ月は生活できるね」

十真を横目に、官兵衛は持ち直した。十夜は綺麗に焼き色がついた鮎に箸を伸ばしていた。

「ふむう、わからんな。どこにそんな価値があるんだ？　まあいい、それで、これはどこで作られているんだ？」

「お客さん、直接、買い付けに行こうとしても無駄ですよ。どこでこれを作っているのか、私どもも知らないのです」

「それは、どういうことかしら？」　櫛は箸を置いた。

「あ、はい。一、二ヶ月に一度ですが、この人形を売りに来る者がいるんですよ。売りに来る者は毎回、違いますが決まって皆、帰るまでずっと何も話さない。なので、彼らがどの人間なのか、わからないのです」

「それは、おかしい話ね。彼らが帰っていく方向から、ある程度、わかりそうな気もするけど　」

「ああ、それなんですがね」　主人は腰をかがめ、口を細めた。「実は、彼らが帰って行く時、若い衆にこっそり後を追わせたんですかね。一本道の山の中で突然、姿を消しちまったっていうんですよ。

場所はここから、そう遠くなく、この辺らしいのです」

主人はテーブルの上に置いてある官兵衛のお猪口を起点に指を這わせ、少し進めた所でぴたりと止める。

官兵衛はその止まった場所に視線を落とすと、

「その周辺は何も無いはずだ。山しかないだろう？」

「はい、ですがね。これは私の勘ですがね、じつは隠れ里があるんじゃないかと……。いえね、一〇〇年ほど前、この里から罪人が追い出されたのはご存知でしょう？　で、追い出された罪人は皆、殺

されたか散り散りになって逃げたということらしいんですが、実際には詳しい事まで記録に残っているわけでもなく、誰も知らないので」

「そして、それ以来、その里には罪人の末裔が暮らし、その朧を作り続けているのではないかと、思うのです」

「なるほどな、しかし、それだとおかしな点があるな。追い出されたはずなら、もっと遠い地に行くはずだろう。ここから一日も掛からない所に、隠れ里を作るとは考えられないな」

「だから、私の勘です」

「他に、この一〇〇年の間に起きた面白い話はないか？ 逸話とか何でもいい」

「お客さん、面白いこと訊きますね。最近でなく、一〇〇年ですかい？ いやあ、あとは今日の祭りぐらいなもんです。そうそう、逸話になるかどうか、わかりませんがね。今日、行われる『雛おくり』で流す雛人形に結ばれている赤い紐のことはご存知で？」

「いや、知らないな。そもそも、雛おくり自体、見るのが初めてだからな。そう言えば、雛おくりも一〇〇年ほど前から始まったらしいな」

「よくご存知で。そうなんです。これも私の勘なんですがね、この雛おくりという祭りは、他の地で行われているものと違って、罪人と関係あるのではないかと。根拠は無いんですがね、そのさっきも言った赤い紐が何かを意味していると思うんです」

「赤い紐？ この人形には付いていないようだが、赤い紐を一体、どうするんだ？」

「赤い紐をこう右手首に結ぶんです。そして、川に流すんですが正直な話、これが不気味なんです。まるで手首から血を流しているように……」

「血……」

「ああ、お食事中に申し訳ありません」

「いや、構わない。続けてくれ」

「はい。一般には、それは血でなく穢れらしいんですが、わざわざ、どうして手首に結ぶのかという疑問が残るんですね。だから、この地に伝わる雛おくりというやつは、罪人たちの間で行なわれていた儀式か風習の名残から来ているんじゃないかと思うんです」

「……。ふむ……。ご主人、飯屋より学者の方が似合ってるかもな。なかなか面白い話が聞けた。酒も飯もうまいしな」

「ありがとうございます」

官兵衛は人形を主人に返すと、店主は軽く会釈し離れて行った。

「なかなか、興味深い話だったわね」

「ああ。半分、空振りに終わるかと思ったが、雛おくりに罪人、赤い紐、一〇〇年前の事件か……」

櫛は官兵衛のお猪口に酒を注いでいた。

「そろそろ、木霊に話してもいいんじゃない？ 私たちの旅の目的の一つ」

「そうだな。彩加と俺が話していた時も、なぜ、各地の伝説伝承を調べているのか、気になっていたようだったからな」

「ああ、それ、かなり気にしてる感じだったよ。私たちも言うの我慢してたんだから。ね、十夜」

「そうね、でもまずは『実例』を示さないと、木霊も納得しないと思うわ。木霊は、こういった伝説とか信仰というものを重んじる子だから、尚更ね」

「確かに、十夜の言うとおりだ」

十夜は箸を置いて、代わりに熱い緑茶の入った湯呑みを持ち、口へと運んでいた。

十真も最後の一口を飲んで、足元に置いていた弓と矢筒を手に取り。十夜も盾を手にしていた。

「そろそろ、迎えに行く時間ね」櫛は言った。

「またいつ、アトウイのような連中に襲われるかわからないからな。頼んだぞ」

「うん、帰ってきたらみんなで柚餅子食べるから、お願いね」

二人は櫛と官兵衛に手を振ると、まだ陽射しの明るい外へと出て行った。

「櫛……」

「なに？ 難しい顔して」

「さっきの話、どれも妙にしつくりと来るな……」

「実際にありえそうってことかしら？」

「そうはあつて欲しくないが……」

5

木霊の前にナオとヨミが立っていた。

手に紙で作れた雛人形を持ち、すぐそばで、澄みきった水が小さい音を立てて浅瀬を流れている。

木霊はナオの目を見ていた。外套に覆われた木霊の顔は、桜色の唇と褐色の顎だけしか見えない。

「ナオとヨミの村はどこにあるのですか？」

「……ごめん。それだけは、言えない」

「いえ。無理に聞こうと思ったわけでは無いので、気にしないでください」

「うん、あんだけ話して、本当にごめん」

ナオもヨミも申し訳なさそうにしていた。

だが、木霊が瞬きをした次の瞬間、二人の顔つきが変わっていた。「ど……」

木霊は、どうしたの、と尋ねようとした。が、声が出なかった。二人とも目を大きく見開いていた。何か叫んでいる。何を言っているのか全く聞こえない。何が起きた？ 刹那 後頭部が熱くなつたかと思うと、頭の中に激痛が走る。直後、意識が遠のき視界が闇に包まれた。次に木霊が目を開けたとき、地面が広がっていた。左頬に砂利の感触。太い二本脚の前で暴れる細い脚。横に目を動かし。背後の大きな黒い影にナオは抱きつかれていたのが見えた。目

眩がまた襲う。次に目を開けたとき、ナオにしがみつくヨミの姿が映っていた。影は三つあった。意識が更に遠のきそうだった。次に目を開けたとき、ぼやけた視界の中心に三つの影が、川上の方へ走り去って行くのが見えた。意識が飛んでいきそうだった。まぶたが重い。全てが暗闇に包まれた時、木霊の思考は遮断された。

ま！

暗闇の中、どこからともなく、何かが聞こえてくる。

こ　だま！

それが声であるとなると、思考が急速にまわり出した。

「木霊！　しつかり！」

目の前に十夜と十真、二人の顔があった。二人の背後で、遠巻きに覗く人の姿も見える。

十夜と十真は木霊を抱き上げ、地べたに座らせた。

「私は、いつたい……」

「気を失っていたんだよ。何があったの？」

「わかりません。突然、気が遠くなって……っ！　そういえば、二人は？」

「私たちがあなたを見つけた時にはもう、二人はいなかった。代わりにこれが落ちていたわ」

「これは、ナオとヨミの雛人形！　くっ……」

後頭部から吹き出すような激痛が走り、手でそこを押さえる。

「武器はある　「十夜は周りにいる人間の顔を確認した。」「顔も見られていないようね。一体、何があったの？　よく思い出して、木霊」

ふらふらするも、木霊は記憶をたどる。

「影……三つの大きな影……」

「影、それって人なんじゃない？」十真が心配そうに覗き込んでいた。

「顔はよく見えませんでした、人間の男性だったと思います。彼

らはナオとヨミを抱きかかえて上流へと向かった……」

「彼らの行き先はわかる？」

「いえ、ただ……ナオは言っていました」

「何を？」

「二人はある村から逃げて、ここに来たって。その村では一〇年に一度、『雛おくり』と呼ばれる生贄を捧げる儀式が行なわれ、ヨミはその生贄である『雛巫女』に選ばれていたと。そして、今日がその日だとも」

「十夜、これって……」

「朧」

「おぼろ……？」

「十真、さっきのお店であの主人が描いた地図を覚えてる？」

「まあ、何となくだけど、あの場所は一つ山を越えたあの辺りだと思っよ」

「そうね、私もあの辺りだと思う。さ、木霊、行くわよ。走れる？」

十夜は、座っている木霊に手を差し伸べ、木霊は立ち上がった。

「彼らがどこに行ったのか、わかるのですか？」

「いえ、でも、微かな手がかりはあるから。それに、この里に居てもこれ以上は何もわからないわ。今は行動あるのみね」

木霊は頷いた。十真と十夜は体を翻し、翼をたたむと勢いよく駆け出す。木霊も右腕に長巻を握りしめ、左手に握っていた二体の雛人形を懷にしまい込むと、二人の後を追った。

「まずは、この山道に入るようね」

それは、おとなが二人並んで通れるほどの道だった。

十真は腰を落とし、草をかき分けていた。

「十夜、この足跡はまだ新しいよ。あきらかに走ってできたものだね」

「人数は三人、歩幅と足の大きさ、深さからして、二人は男性の大人に抱きかかえられ連れ去られたようね。木霊の言ったことと一致

するわ」

「すごい……足跡から、わかるのですか？」

「感心してる場合じゃないよ。木霊もこれくらい見極められるようにならないと、いけないんだから」

そう言つて、十真は懷から小袋を取り出し、色のついた米粒を地面に撒いていた。

「行くわよ。木霊、十真」

十夜を先頭に、十真、木霊が急勾配の斜面を駆けていく。

登っていくほどに、道は狭くなりついには、一人がやっと通れるほどまでになつていた。前を見ても後ろを見ても下に露出した砂地を見なければ、それが道であるとは誰も気づかないだろう。

「飛んで上空から確認しようか？」

「十真、夜になるまで、それはまずいわ。相手に勘づかれてしまうかもしれない」

「そつか。ならこのまま、足跡を追うしかないね」

三人は立ち止まっていた。

そこは少し開けた場所だった。周りは木々に囲まれ、見上げれば茜色に染まつた空が広がっていた。

しかし、道も足跡もここで止まっていた。

「恐らく、ここが、お店の主人が見失つたと言つていた場所のようね」

「ここだけ、まわりよりも木が多く茂っているよ……多分、ここに……あつた」

十真は、小ささまざまな草木が生い茂る根元を見て、にいつと笑う。

木霊には十真の笑つた意味がわからなかった。

十真は自分の背丈ほどの木の根元を一本掴むと、それを持ち上げた。すると、十真の持ち上げた木は軽々と根っこから抜け落ちた。

十真はそれをそのまま、別の場所へ投げ捨てると、地面を手でかき

分ける。

木霊が覗き込むと、人が造ったものと思われる仕掛けが土の中で露出していた。

「これは？ 旧時代の……」

「そう。たぶん、こいつを使って道を隠していたんだと思うよ。こういう仕掛けを知っている人って、ほとんどいないから隠れるには好都合だね。恐らく彼らは偶然、ここに来て、この仕掛けを知ったんだと思うよ」

「十真さんって、旧時代の人ではないですよね？」

「へ？ うん、私も十夜も木霊と同じ、この時代の人間だよ。こういうのはね、官兵衛や櫛に教わったんだ。私たちはこういった旧時代の仕掛けとか遺跡というのは、何度も経験しているんだよ」

木霊は頷いた。

十真は微笑むと緑色の釦を押した。

二人のすぐ傍で、すうつと茂みが避けるようにして道を開けていく。茂みの中に一本の道が現れた。

そして、十真は先ほどと同じ小袋を懷から取り出すと、色のついた米 五色米を撒いていた。

「行きましょう」

十夜が翼を折り畳むようにして、音を立てないように走っていく。それに二人が続く。

「この道は…… 山を降りている？」

「そのようね。降りる前に、官兵衛たちに場所を知らせましょう。十真」

「え？ いいの？」

「ええ。もう、隠し道なんて無いでしょうし、勘づかれたとしても、まさか、私たちがこの道を見つけたとは簡単に思わないはずよ」

十真は頷くと、矢筒から一本の矢を取り出し矢の先端に覆い被さっている紙を破り捨てた。すると、丸みを帯びた矢の先端が瞬く間に青白い炎を纏う。腰に提げた弓を手にすると、翼を広げ近くの木

へと跳び上がり、太めの枝に一旦、足を着けると更に跳んで、頂きへと登っていく。

最後に空へ飛び上がり、翼をバサッと広げ速やかに態勢を固定させる。

「届いて」

矢を放った。

宵の明星が輝く夕暮れの空に、橙色の閃光が突き抜けていく。

山を降りて茂みから道に飛び出すと、どこにでもある風景が広がっていた。

木霊たちの後ろは茂みだった。木霊たちが通って来た道は茂みで隠されていた。

眼前には、荷馬車が通れるほどの広い道が伸び、田畑が広がっていた。ぽつりぽつりと、遠方に屋根が見える。

「かくれ里だ。本当にあったんだ」

「こんな事って……じゃあ、ここがナオとヨミの村……」

「行くわよ」

三人は道なりに走った。木霊は袋から長巻を取り出していた。左手に川が見える。川岸は赤い彼岸花で埋め尽くされていた。右手には田畑が山の麓まで続いている。

「人の姿はないね」目だけを動かし、十真は言った。

しばらく進むと、立て札が見えてきた。十夜は立ち止まり、立て札を覗いた。

「朧村……」

木霊が呟く。

「店で見た雛人形も朧と言っていたわ。この村の名前から取ったもののだとしたら、間違いなくここは隠れ里」

「ナオとヨミはここに……」

道なりに更に進んでいくと、やがて、橋が見えてきた。

そこで、三人は目を奪われてしまっていた。いや、目だけではない。耳もだ。

橋の向こう側には竹林が山全体を覆うように広がっていた。その前には樹齢一〇〇〇年以上の巨木と比べても引けを取らないほど、大きな朱塗りの鳥居が正面に立ちはだかっている。その鳥居の下から石段が竹林に吸い込まれるように、永遠と続いていた。

竹林には、子供と同じくらい大きな短冊が、石段に沿って無数に吊り下げられていた。

橋の欄干には数えきれないほどの赤い風車が、音を立てながら勢いよくまわっている。

川岸は、赤い彼岸花で埋め尽くされていた。

十夜と十真に続いて、木霊が橋を渡ろうと一歩踏み出したその時、上流の方からぶかぶかと白い塊が流れてくるのが見えた。

「あれは……？」

木霊が示す方向に、十夜と十真も双眸を向ける。

白い塊は川を埋めるようにして、木霊が立っている橋へ、ゆっくりと近づいていた。

近づくにつれ、塊はほどけ、一つ一つの形がはっきりと見えてくる。

それは無数の小さな雛人形だった。

川面にゆらゆらと浮いている立姿の雛人形は、どれも白い装束に身を包んでいた。奇妙なことにその人形たちには、それぞれ一本の赤い紐が結び付けられている。ある者は手首に。そしてある者は足首に。更に注意深く見ると、その中に、赤い装束をまとった人形も見受けられる。白い雛人形から伸びた赤い紐はすべてその赤い人形の四肢と繋がっていた。

十夜が欄干に手を置いて、覗き込む。木霊も隣に並び、赤い雛人形に視線を縫いつけた。

「この雛人形と赤い紐……あの店の主人が言っていた姿にそっくりね」

「あの赤い人形は雛巫女……雛おくり。 もしかして、この先で儀式が行なわれようとしている？」

木霊は欄干から手を離すと朱塗りの鳥居へと颯爽と走り、そのまま石段を何段も飛び越え駆け上がった。十夜と十真も続く。

石段を登り切ったところで、木霊は足を踏ん張って立ち止まり、周りをぐるっと見渡した。竹林。空まで伸びた竹が風にあおられながら、木霊を見下ろしていた。空が紅い。

前を見れば、足元から石畳の床が真っ直ぐ伸び、その先は闇だった。

木霊は湿った左手を腰のあたりで拭くと、右手にある竹林の中へ入った。腰を屈め足元を確かめながら、土を踏んでいく。

十夜と十真も左手の竹林の中を突き進んでいた。

前方に、瓦葺きの屋根が見えてくる。木霊は一旦、足を止め更に姿勢を低くし、そっと近づいて行った。

二人はすぐに見つかった。

（ナオ！ ヨミ！）

そこは、神社の境内だった。

境内は広く、生垣で仕切られていた。立ち上がりさえしなければ、境内から木霊の姿は見えない。

木霊から見て左側、すなわち境内の入り口付近には、村人らしき集団が頭を下げて正座していた。

右側に目を向けると、一番奥に狩衣に袴姿の男が五人。その前に巫女の装束を着た四人の少女が、何かを取り囲むようにして立っていた。彼女たちは全員、白色の小袖と袴を着ていた。どこことなく、橋の上から見たあの白い雛人形を彷彿させる。奇妙なことに、彼女たちの手には鉈が握られ、彼女たちの視線は皆、一箇所に集まっていた。

木霊は白い巫女の灰色の瞳に視線を縫い付け、そのまま双眸を這わせた。

そこには、橋で見たのと同じ真っ赤な装束に身を包んだ雛人形が

いた ナオだった。

ナオは、両手足首を縄で縛られ、石畳の床の上で仰向けにされていた。

そしてもう一つ。ナオの右手首からは、太く赤い縄が伸びていた。人間の力で引きちぎるのは恐らく無理だろう。その赤い縄の先には、白い巫女の右手首があった。右手同士で繋がっていた。そして、左手も両足首も同じだった。ナオの四肢と四人は赤い縄で繋がっていた。

ヨミは両手を後ろに縛られ、袴姿の男と向きあう形で、膝をついてナオの前に座らされていた。

「逃げ出すとは何たることだ。お前はこの意味をわかっておるのか？ ヨミ。お前が掟に背いたおかげで、ナオが雛巫女を務めることになった」

中央に立っている年老いた男が、嘎れた声でヨミを見下ろしていた。

「……」

ヨミは口元をぎゅっと固く締め、うな垂れていた。

「あたしはヨミを助けたかったんだ！ ヨミは一つも悪くない！ もう、いいだろ。こうやってあたしが巫女になるんだからさ！」

「お姉ちゃん……」

「たわけが！ お前が巫女になったのは掟に背いたからだ。お前の意思は関係ない」

「掟掟って、いつもそれだ！ こんな馬鹿げてる！ みんなだつてそうだろ！？ いつまでもここにいないで、新しい場所を見つけて、そこでみんな一緒に暮らせばいいじゃないか！ 何でそうしないんだよ！」

「ナオ。お前には何度も話したはずだ。この村は一〇〇年以上前に罪人や爪弾きにされた者が集まって作られた。この地に発生する瘴気は人を狂わせる危険なものだが、外界からの侵入者を寄せつけない。わしらにとって、ここしか生きる場所は無いのだ。よいか、ナ

才よ。罪人はずっと罪人なのだ。罪人の子もまた罪人なのだ。お前だけではない。お前の親も。お前の妹も。お前の夫となる者も。お前の腹から生まれる子もだ。そのわしら罪人がどこに行くというのだ？ どうやって稼ぎ、明日から暮らしていく？ また殺しや盗みをしろというのか？」

「……だけどあたしは……こんなの絶対やだ！ あたしは自由に生きたい。こんな迷信や儀式なんか縛られてまで生きたくはない！」

「お前はそれでいいだろう。だが、他の者はどうだ？ 皆、お前のように、あやふやな夢にしがみついている者ばかりでは無い。危険と隣り合わせてでも、小さな安寧が得られるならば、それを受け入れる者だっているのだ。なぜ、それがわからん」

「くっ！ そんなこと……そんなことくらい、あたしだってわかってる！」

「いや、お前はわかっておらん」

「お姉ちゃん、もう止めて」

「ヨミ……」

「いいの」

ヨミは中央の年老いた男を見上げ、

「神主さま。掟を破ったのは申し訳ありません。だけど、どうかお姉ちゃんを許してあげてください。そして、どうか……どうか私に、雛巫女をやらせてください。この通りです！ お願いいたします」

ナヨは地面に頭を擦りつけながら土下座していた。縄が手首に食い込んでいる。

「お願いします！」

「……ヨミよ。面を上げなさい。残念だが掟は掟だ」

「そんな……」

「掟を破ればまた、規律が乱れ村は崩壊してしまうだろう」

「……それは……でも、でも！ どうかお姉ちゃんを。お姉ちゃんを助けてください」

「……」

「ヨミ……。じじい！ わかったよ！ もういいから早くしろよ！ あたしが巫女なんだ。あたしが村を守ればいいんだろ！」

「っ！ お姉ちゃん！」

「ごめんね、ヨミ。馬鹿な姉で。結局、あたしの空回りだった……。だけど、あたし一人の命でヨミやみんなが生きていけるなら、何も心配ないよね」

「そんな……。本当は私の役目なのに、そんな……」

ヨミは顔を上げ懇願するように、男達を見た。

だが、気まずそうに男達は視線を反らすと、中央の男に目をやる。「例の物を」

神主と呼ばれた男がそう指示すると、隣に立っていた一人が黒い小さな包みを広げ、中から珠のようなものをつまみ上げる。その小さな珠は、糖で固めた飴玉のように表面が煌めいていた。

「この珠には凝縮された瘴気が封じ込まれておる。瘴気を吸った者がどうなるかは知っておろう？」

「はっ！ なんて、そんなことしないといけないんだよ！」

「お前は瘴気が発生する場所が、わかるのか？ これがお前を冥界への入り口へと導く。それにこれを飲めば痛みも何も感じ無くなる」

「だけど、そいつを飲めば頭の中がおかしくなってしまうんだろ？」

ヨミの事もわかんなくなつて あたしは嫌だ！ このままでいさせてくれよ！ 人のままでいたいんだ」

「いい加減にせんか！ お前は本当に村のためだけでなく、妹の命を救う気があるのか？」

木霊は長巻を強く握り締めた。

（何を迷っている……。あの二人を助けるために来たはずだ。しかし、儀式を壊せば村が滅びる……）

「っ、ち、くしょう！ なんて、こんな事になるんだよ！ この社に祀られているのはカムイ『天』なんだろ！ なんてカムイに生贄が必要なんだよ。なんでカムイが冥界にいるんだよ」

（え？ 今、カムイ『天』って ）

「天のカムイ様が……ナオよ。お前は先ほど、迷信と言ったな。最後だからお前には話しておこう。一〇〇年前、狐狸の里を追われた我らの先祖は、偶然にも、この社を見つけ皆、社の中にある坑道へと逃げ込んだ。坑道の中は複雑に入り組み、追っ手から逃れるには好都合だった。しかし、ある日、大勢の追っ手がこの社へ攻め込んできた。皆、坑道の奥深くへと逃げた。その時、天のカムイ様が現れ、こう言われたのだ『この地に住みたくば生贄を捧げよ』と。行き場の無い我らの先祖は言葉に従った。たちどころに天のカムイ様は追っ手を皆殺しにした。そうしてこの地を与えられ、儀式はここから始まったのだ」

「そんなの嘘だ！」

（どうということなの？ カムイ天は他にもいるというの？ それとも、私が天ではない……）

「この期に及んで、嘘を話して何になる？ 始めよ」

男が前に歩み出ると、ナオの両頬をつまむ。ナオは抵抗の目を向けていたが、黙ってそれを受け入れた。そして、珠が彼女の口に放り込まれる。

ナオは珠を口に含んだまま、泣いているヨミを見た。ナオは口をぎゅっと結んで微笑んだ。

「お姉ちゃん……」

ごくりと呑み込む。呑んだ瞬間、ナオの瞳から涙がぼろぼろと、溢れ出していた。

「うっ！」

ナオは突然、目を大きく見開くと、もがくように四肢をじたばたさせた。

「お姉ちゃん！」

そして、赤い紐の先にいる白い巫女に襲いかからんと、狂ったように暴れだす。

「始まった……始まったぞ。早くアレを」

神主が男達を急かす。

木霊は混乱していた。木霊の知る限り、世間に知られているカムイとは、その男が言っているような存在ではない。制裁者と呼ばれる存在を除けば、カムイとは、例えばキアラが持っていた『光明ノ書』を守る存在であり、英雄と呼ばれるような存在に近い。

どちらかと言えば、この時代の人間は、カムイよりも「幸福、繁栄、奇跡、永遠の命をもたらす」と伝えられているカムイの書を崇拜している。官兵衛に言わせれば、書には旧時代の文明知識が書かれているだけ、ということらしいが、少なくともこの時代の人間は、そのように受け取っている。それ故に、書を祀っている社は各地に存在する。

しかし、目の前の男が言っているカムイは、まるで化物だ。それに、儀式というのは自然に宿る神々に纏わるのがほとんどだ。木霊の住んでいたヒムカの国はそうだった。いや、ヒムカだけではない。どの地方もそうだ。

しかし、ここ臈は違う。自然でなくカムイを崇拜している。ましてや、カムイが生贄を要求する話なんて聞いたことも無い。

木霊が普通の人間であれば、この儀式を信仰心から受け入れているかもしれない。しかし、今の木霊は自分がカムイであることも自覚しているつもりだ。

神主に言われ、男が目隠しのようなものを取り出し、暴れているナオの顔にそれを近づけている。

その目隠しの形状は残酷だった。耳に当てる部分から鋭い針が二本突き出していた。

そいつを見た途端、木霊は我に返った。

（　　っ！　間に合うか……）

木霊は齒を食いしぼり、生垣を跳び越えた。一点だけに意識を集中した。

ナオの顔から”人”が消えていた。ひどく興奮している。

目隠しを掴んだ手が、ナオの顔に触れるか触れないかの所まで来たその時、ガリっという音とともに、男が悲痛な叫び声を上げる。

「ナオ！」ざざつと、砂利を撒き散らし着地する。ナオの所まで、まだある。木霊は腰を落とし後ろに下げた右足に力を溜め、一気に解き放った。

木霊の声は届かなかった。男がのた打ち回る中、ナオは口から地面に何かを吐き出す。それは男の親指だった。周りの者はナオの獣のように豹変した様子に、思わず後ずさりするが、三人の男が飛びかかり、ナオをうつ伏せにさせる。ナオの着衣は乱れ、肩と脚がはだけるもナオは唸り声をあげ、男たちを振り払おうと暴れる。一人の男がナオの背中に、馬乗りになる。間髪入れず、男は目隠しを彼女の目に当てる。すると一瞬、ナオの動きが止まる。男はそれを見逃さず、即座に目隠しの帯を後頭部にまわし、ぎゅっと強く絞めつけた。すると、ナオは完全に動かなくなった。それを見た男たちは縛っていた縄を慎重に切ると、その場から離れ、元の位置に戻った。ナオの髪は乱れ、口元から涎を流し、塞がれた耳からは血が滴り落ちていた。

「お……姉ちゃ、ん」

ヨミはただただ頬を濡らし、瞳孔が開いた目で、変わり果ててしまったナオを見ていた。

木霊は間に合わなかった。

「どいて！ ナオ！ ヨミ！」

木霊の両腕に男達の太い腕が絡まっていた。木霊はナオとヨミだけに注力し、周りを忘れていた。生垣のすぐ傍にも村人や狩衣を纏った者がいたのだ。

「きさま、女か？ 何者だ！？」

神主の隣に立っていた壮年の男が、腕と肩を押さえつけられ足掻いている木霊に向かって叫んだ。

「木霊……さん？ なぜ、ここが？」

「ヨミ。お前の知り合いか？ だが、この場所が知れてしまった以上、帰すわけにはいかん。気の毒だが死んでもらうぞ」

「やめてください。この方は関係ありません！」

そう言っている間にも、ナオがひとりで動き出す。

「雛巫女が動き出したぞ、さあ、お前たちとはともに行きなさい。この怪しい娘は、わしらの方で片付けておく」

「お姉ちゃん！」

ナオは立ち上がると、まるで行くところがわかっているかのように、片脚を引きずって、社の方へ歩き出していた。

赤い紐で繋がった白い巫女が、ナオの後に続く。

木霊の周りにはもう、一〇名以上の男達が群がり、敵対心を剥き出していた。更にその周りを囲むようにして、村人が木霊を睨めつけている。

「外から来たのは、お前だけか？ 他にもいるのではないか？」

「……」

「皆の者、夜に備え火を焚け！ 他にも賊がいるやもしれん。くまなく探すのだ！」

神主が大声で叫び、村人に指示を出す。

木霊の首筋から汗が滲み出していた。軽率だった。十夜や十真にまで、危険に晒してしまった自分の浅はかさを恨んだ。だが、今はそのような事を省みる暇は無い。五人の巫女が社の中へ消えていく。

「探しても無駄です。私一人でナオとヨミを追ってきたのですから」

「信じられん話だ」

「その女の武器を取れ！」

木霊は大人しく手の力を緩め、武器を手放す。

「顔を見せてもらうぞ。悪く思うな」

男が木霊の頭に深く覆い被さっていた外套を剥がしていく。

金色の髪が腰に滑り落ちた時、男がすっとんきょうな声を上げた。

「お前は　！」

木霊の正面に立っていた全員、一様に驚愕していた。ヨミもまた、目を丸くし口を開けていた。

「て……」

ヨミがその名を口に出そうとしたその時、別の誰かが叫んだ。

「天罪者だっ！」

「目を合わせるな！ 殺されるぞ！ 女子どもはすぐ逃げろ！」

あたりの様子は一変していた。誰もが、顔に恐怖を描いていた。

ここに集まって来ていたのは男たちだけではない、女子ども含む村人全員がこの場所にいた。

女は叫び、男たちは後ずさりしている。

木霊は、腕を掴んでいた男に隙が生じたのを見逃さなかった。下半身をひねり、片脚を後ろに大きく引いて、振り子のように振り上げ、同時に自分の腕を引っ張った。すると、木霊の腕を掴んでいた男はバランスを崩し、片足を地面から離してしまう。その時を逃さず、木霊は脚を振り下ろし、男を支えていた方の脚を掬い上げた。巨軀が宙に浮く。更に木霊は体を回転させ勢いをつけると、逆に男の腕を掴み、その腕を引っ張り 離れた。支えるものを失った男は無様な格好で宙を泳いでいった。

反対側の腕には、別の男の手があつた。木霊は体の回転を止めること無く、解放された腕を屈折させた。そして、そのまま鋭利な刃物で突き刺すようにして、肘を男の脇腹に撃ち込む！男は悶絶し、両手で脇腹を押さえた。木霊はその瞬間も逃さず、男のふくらはぎを後ろから蹴り飛ばした。男は後方へ回転する形で宙に浮いていた。続けて木霊は男の首に手を添えた。男と目が合う。男は自分の身に一体、何が起きたのか、まだわかっていない様子だった。木霊は腕に力を入れ、男の首を石畳の床に叩きつけた。ごきつという音とともに男は白目を向いていた。

木霊は、ヨミの方へ疾風のごとく駆け寄った。

「あんな小さな娘が……なんということだ。本当に恐ろしい」

周りの者は蒼白していた。しかし、逃げる場所の無い彼らは覚悟を決めたように、顔つきが変わっていった。

「まだ娘だが、殺すしかない。子どもだと思ふな！ こいつは天罪者なんだ」

「よりによつて、天罪者にここがばれるとは。やはりこの地は呪われているのか……」

神主はヨミの縄をほどいている木霊に向かって、恨めしそうに言葉をついた。

縄を解かれてもヨミは、頭を上げようと、振り向きもせず、ただ座ったまま体を震わせていた。

ヨミの小さな肩と背中が小刻みに震えていた。

「ヨミ……」

「ご、めんなさい。天罪、者……なのですよね？ 私たちを、殺して、この村を……滅ぼすのですか？」

「なぜ、そんなこと……私はただ、ナオとヨミを助けに來ただけです」

「嘘……嘘です。天罪者に会った人は皆、死ぬって聞いています。今もああして、簡単にあの人たちを倒して……」

「ちがう！ 私はそのような事はしない」

「じゃあ、どうして、お姉ちゃんを助けてくれなかったのですか！」

「それは」

何も言い返せなかった。ただ拳を強く握りしめることしかできない。

背後に、複数の足音。

「神主さま！ ご無事ですか！？」

木霊の背後に、鉦や錆びた槍や打刀を手にした男達が立っていた。木霊から取り上げた長巻を手にした男も、その中にいた。横に目をやれば、弓を構えている者が数名。

「殺せ！」

木霊は身構えた。全員が一斉に、襲いかかる。

刹那。

大気を斬り裂く音が、空から稲妻のように男達の前に落ちてくる。男達はその音に驚いて、一斉に立ち止まり、上空を見上げた。が、雨雲は見当たらない。前方を見た。

目の前で、一本の矢が地中深く突き刺さり小刻みに振動していた。「後ろですよ」

透き通るような美しい女の声だった。男達は後ろを振り返った。いない。

しかし突然、ぎゃつと短い叫び声が出たかと思うと、集団の端の方で男が宙を舞っていた。

続けて今度は別の場所で、どさつと倒れる音。

男達は困惑した顔つきで四方八方、首を動かしていた。

「どこだ？」

木霊から奪った長巻を構えながら、その男は叫んだ。すると、眼前に一枚の白い羽。その先で、天罪者が静かにその男を見ていた。

「これは？ 白梟の羽……？」

「そう」

すぐそばで囁き声がし、男は思わず目を瞬かせた。いつの間に入れ替わったのか。目の前にあったのは茶色の瞳だった。

男は何か言いかけようとして止まった。痛みもない。ただ、自分の視界が真っ暗になっただけだった。

「返してもらっよ」

男はその場で崩れ落ちた。

「十真！ 十夜！」

木霊は叫んだ。十真が木霊の隣に並び、取り返した長巻を木霊に手渡す。続いて、十夜も並ぶ。

「天狗とは……まだ若いのになんて強さだ」

武器を手に使っていた男達は半歩さがり、距離を置く。

神主を守るようにして、狩衣を纏った宮司が木霊たちの前に立ちはだかつていた。

「雛おくりは止めさせんぞ。我らの命運がかかっている。どうして、我らの邪魔をする？」

「私はただ、ナオとヨミを助けただけです」

「天罪者が何を言うか！ 助けたいだと？ まわりを見よ！ お前たちが現れただけで、この有りさま。全員を争いに巻き込んでしまっているではないか！ それにナオとヨミを助けたその後はどうする？ 我らはどうすれば良いのだ？ 皆、瘴気にのまれて死ねというのか？」

「それは……、あなた方もこの里を出れば良いではないですか！」

「木霊さん」

ヨミは顔を上げた。

「お前も天罪者ならわるだろう？ 罪人が行く場所はどこにも無いのだ」

「あります！」

「何だと……ふざけるな」

「あります。私がそうです。こんな私にも守ってくれる人たちがいます。それに、ナオもヨミだって」

木霊は十夜と十真を見てから、自分に言い聞かせるように、胸に手を当てた。

「私は見ました。明るく、そして力強く、生きようとしていく二人の姿を！」

いつもは抑揚のない、淡々と話す木霊の口調が変わっていた。感情が高まり、激痛が木霊を襲っていた。それでも、木霊は声を振り絞って、

「あなた方が勝手に、そう決めつけているだけではありませんか！？」

握りしめている拳の震えが止まらない。

「木霊さん」

「木霊……」

神主もその周りに立っていた男達も皆、固く口を結び歯を食いし

ばっていた。

笹が擦れ合う音に混じり、松明の燃える音が聞こえてくる。

その音を遮るように、木霊たちの背後の方から老女の笑い声が響いた。

「ふおっふおっふお。そんなことは皆、承知の上じゃよ」

木霊は振り返った。

「長老」

「大婆さまだ」

一人の少女に支えられながら、笑い声の主が立っていた。皆、その老女に場所を譲るようにして引き下がっていく。

神主もその老女に敬意を表するように頭を下げていた。

「ふむう。お前さんが天罪者かい？ どれ。わしに顔をもっと見せておくれ」

「長老……近くに寄られては」宮司の一人が心配そうに言った。

「この老体に怖いものなんてありません。お前たちは黙っておれ」そう言って、少女に導かれ老女は木霊の前に立つと、皺で覆われた手を掲げ、

「ほれ、顔をよくお見せ」

木霊は腰を屈め、顔を近づけた。

（この人。盲……）

老女の固く乾いた手が木霊の顔をぺちぺちと撫でていた。

「ふむ、ふむ。お前さんは本当に天罪者なのかい？ よう澄みきつておる。名はなんと申す？」

「柊木霊です」

「そうか。木霊というのか。木霊よ。外の世界はここよりも広く、美しいかい？」

「……はい」

「そうかい。ナオとヨミもまた、外に出れば幸せに生きていけると思ukai？」

「はい。思います」

「皆も外に出ていけば、同じように生きていけると思っかい？」

「はい」

「ここにいる皆、木霊と同じ気持ちじゃよ」

木霊は、はつと、息を呑んだ。この老女が言ったのは木霊と全く同意見という意味では無い。

「わしらは、既に選択したんじゃ」

そうだ。この人たちも自分と同じように悩み、考え、そして選択したのだ。ただ、選んだ結果が違うだけ。

「ここに住むことが、お前さんの言う幸せなことだと　そして、ここにいれば、皆が守ってくれる。そう考え、選択したのじゃ」

老女は木霊の顔から手を離し、

「ただ、少し違うのは雛おくりという痛みを我慢しないといけないことじゃ。わしら罪人の末裔が生きていくための対価じゃの。お前さんは恐れを知らない無垢な雛鳥のようじゃ。どんな困難にもめげずに立ち向かい、思い描いた夢を実現することもできる。それはそれは、とてもいいことじゃ」

「お婆さん……」

「耳朶よ」【耳朶^{だじ}】

「はい」

神主が答える。

「外の世界は変わっても、この里は時が止まったように美しいのう」
「はい」

「じゃが、そろそろ、カゴから出たい雛は外に出しても良いのかもしれないのう。もう外に出てもわしらは生きていけると、ナオとヨミは証明してくれたのじゃ」

「それは……ナオとヨミを許せと」

「耳朶よ。わしらの知らないところで、この里も変わっていたんじやな」

「……」

耳朶と呼ばれた神主は、押し黙っていた。

木霊はヨミの正面に廻りこみ、しゃがむと、

「ヨミ、あなたは自由になったんだよ」

「……」

「ヨミ……」

「……だけど、お姉ちゃんは帰ってこない」

ヨミは俯いたまま、小さな肩を震わせていた。手首に縄できつく締められた跡が痛々しく残っていた。

「それは」

「なん、で……こ、んな……こんな事だったら、なんで……」

ヨミは立ち上がり、拳を強く握りしめ、

「大婆さまも！」

「神主さまも！」

「木霊さんも！」

「十夜さんも！」

「十真さんも！」

「みんなも……！」

「なんで、みんな、もっと早くお姉ちゃんを助けてあげなかったのっ……！」

怒号が空に響き渡る。髪が逆立ち、涙で濡れたヨミの瞳は、怒りに満ちていた。

「許せないっっ！」

「あっ！」

木霊は小さな声で叫んだ。油断していた。まさか、ヨミがそのような事をするとは考えもしなかったからだ。

ヨミは木霊の長巻　天ノ羽衣を奪っていた。

そして、飛び出すように前に踏み込み、天ノ羽衣を突き刺した。

「耳朵さま!?」 宮司が叫ぶ。

ヨミの両腕から伸びた刃は、えぐるようにして耳朵の胸下に刺さっていた。

耳朵は素手で刃を押さえるが、ずぶずぶと、食い込んでいく。

見る見るうちに、耳朵の手から鮮血が地面に滴り落ち、狩衣が真っ赤に染め上がっていく。

ヨミは天ノ羽衣を耳朵の胸下に突き刺さっていた刃を乱暴に抜き取ると、天ノ羽衣を手にしたまま宮司たちを避け、ナオが先ほど入って行った社の中へと消えた。

「ぐっ……、何ということだ。ヨミを……ヨミを、ごぶっ！ 止めてくれ」

耳朵は口から、血を噴き出していた。目がうつろになっていく。

「木霊、行くわよ」

「私の刀を、使って」

走りながら、十真は腰に差していた湾曲になった短刀　ククリを木霊に手渡す。

木霊たちの後ろで、村人たちも慌ただしく動き出していた。一〇名ほどの男達が武器や松明を手に木霊たちの後を追う。

本殿は、この時代によく見られる造りをしていた。湿気もなく、蠟燭のわずかな灯りが屋内の中を点々と照らしている。

「坑道への入口はきつと、蠟燭の灯りが続いているこの奥だわ。急ぎましょう」

十夜を先頭にどたどたと木造の床を叩く音が鳴り響く。蠟燭の油煙がゆらゆらと立ちのぼっていた。

木造の渡り廊下を進むとやがて、それと思しき入り口が見えてくる。入り口は広く、大柄な鬼が五人並んでも十分、通れるほどだった。入り口から先は石造りの階段が下へ続いていた。

階段は意外と短く、降り立ったところで三人は立ち止まっていた。その場所は、坑道と呼ばれる場所に違いないが、木霊はどこかで見たことがあるような気がしてならなかった。

「一体、何があったの？」

「呪い……」

「呪い？」

「死人が……かつての雛巫女が襲ってきたんだ……うひいっ！ 助けて助けて助けて」

「しっかりして！」

十夜が話しかけたのは、ここ坑道の入口付近で見守りをしていた村の男だった。

男は自分以外の人間は全員、殺され、自分だけが生き延びたと怯えきった様子で話した。

「死人って何？」十真が問い詰める。

「冥界から、俺たちみんなを殺すために来たんだ！ きっとそうだしきつときつと」

もはや、まともに答えられそうになかった。

今度は十夜が質問する。

「指差すだけでいい。ヨミと雛巫女はどの道を通ったの？」

「あああ……ああ」

「どこ！」

この部屋からは道が三つに分かれていた。先ほど通ってきた入り口同様、この部屋から奥へと続いている道も広く、推測するに、奥は広大のようだった。

男は震える手で中央の道を指差していた。

道の奥は暗く、何も見えない。しかし、その奥からだろうか。どこからともなく、人の声のようなものが聞こえてくる。生暖かい湿った空気が木霊の首筋を舐めるように、流れていく。

十夜は、後ろについてきた男達に向かって、

「あなたたちは、返って足手まといになるから、ついて来なくていいわ」

そう言われ、男達は安心したようだった。

「木霊、私たち白梟は夜目がきくわ。だから私たちは敵を見つけ次第、あなたに知らせるから、いつでも迎え討てるように準備しておくのよ」

「行こう、木霊」十真が促す。

「はい」

（この先に、ナオとヨミ。そして、私と同じ『天』と呼ばれるカムイがいる……）

（つづく）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0480t/>

八国ノ天

2011年5月6日12時25分発行